



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	下川中学校調査報告書：中学生の地域理解の構造と地域アイデンティティ
Author(s)	浅川, 和幸
Description	平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (研究課題番号16K04521) 「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究報告書3 学生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。
Issue Date	2019-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90984
Type	report
File Information	04_asakawa_kaken_shimokawa.pdf



平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書 3

下川中学校調査報告書

中学生の地域理解の構造と地域アイデンティティ

平成 31 年 3 月

研究代表者 浅 川 和 幸

（北海道大学大学院教育学研究院教授）

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的
自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書 3

下川中学校調査報告書

中学生の地域理解の構造と地域アイデンティティ

平成 31 年 3 月

研究代表者 浅 川 和 幸

（北海道大学大学院教育学研究院教授）

目次

はじめに——研究の意図と方法（浅川）	1
第1章 調査結果の概要（浅川）	6
第1節 生徒の特徴	7
（1）性別	
（2）保護者の職業（主なもの）の特徴	
第2節 森林環境教育体験の感想	8
第3節 生徒の地域アイデンティティ	11
（1）考察の順序	
（2）下川町の評価（3択）とその理由	
（3）生徒の考える下川町の「良いところ」	
（4）生徒の考える下川町の「良くないところ」	
（5）生徒は下川町にいるからこそ「できること」をどのようにとらえているか	
（6）生徒は下川町にいるからこそ「できないこと」をどのようにとらえているか	
（7）生徒は下川町の産業をどのようにとらえているか	
（8）生徒にとっての地域の広がり	
（9）生徒にとっての他地域のイメージ——「住むならこのまち」と「遊ぶならこのまち」を素材に	
（10）小括——生徒の地域アイデンティティ	
第4節 生徒の将来志向	28
（1）生徒の進路志向と保護者の進路についてのアドバイス	
（2）生徒の「将来の居住地志向」	
（3）生徒の職業志向	
（4）生徒の「将来生活志向」	
（5）小括——生徒の将来志向	
第2章 考察	39
第1節 はじめに——考察のテーマ（浅川）	39
第2節 生徒の地域（下川町）理解の構造（浅川）	40
（1）生徒の下川町のとらえ方の特徴	
（2）下川町の「良いところ」「良くないところ」と下川町だから「できること」「できないこと」は関係しているか	
（3）下川町の評価（「良いところ」「良くないところ」カテゴリ）は「住むならこのまち」の選択に結びつくか	

(4) 下川町の評価(「良いところ」「良くないところ」カテゴリ)は下川町の評価(3択)に関係しているか

(5) 森林環境教育と下川町の評価(「良いところ」「良くないところ」カテゴリ)は関係しているか

(6) 小括——生徒の地域理解(下川町)の構造

第3節 生徒の地域アイデンティティの特徴——他の町村との比較(浅川) 67

(1) 地域評価(3択)の比較

(2) 2016年度O中学校生徒の地域理解(「良いところ」と「良くないところ」)の構造

(3) 2013年度N中学校生徒の地域理解(「良いところ」と「良くないところ」)の構造

(4) 2015年度N中学校生徒の地域理解(「良いところ」と「良くないところ」)の構造

(5) 2018年度下川中学校生徒の地域理解(「良いところ」と「良くないところ」)の構造

(6) 「良いところ」と「良くないところ」の対比の構造を貫くもの

(7) 小括——地域アイデンティティに刻み込まれた地域格差を変革するために

第4節 下川中学校3年生の将来志向の構造について——男女差を中心に(学生担当分) 86

(1) はじめに

(2) 将来になりたい職業

(3) 将来生活志向

(4) まとめ

おわりに——まとめと今後の課題(浅川)

94

謝辞(浅川)

(資料) アンケート用紙

執筆は、浅川と北海道大学教育学部3年生で行った。それぞれの担当箇所に担当者を示した。学生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。

また、この報告書の元になった調査は、平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)(研究課題番号16K04521)「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」)を用いて行った。

はじめに——研究の意図と方法

この研究は、北海道地方の中学校の生徒（３年生）を対象に、地域アイデンティティと将来志向の関係を検討したものである。私たちは、ここ数年、中学校と高等学校において同種の調査を続けてきている。

現下で進行している日本社会の巨大な変化は、人々の変化の言わば「集積」である。変化の行き先（未来）を考えるなら、若者（ここでは生徒）が生活する場所や生活の在り方をどのように展望しているのかを考えなければならない。

比喩的に述べるなら、マクロな行き先（未来）をミクロな展望から考えたいということになる。そして、現代日本の場合、マクロな行き先（未来）とミクロな展望の結節は、以下のような問題として表現されているのではないだろうか。

第１に、「地域格差」問題である。

「人口減少」「地方消滅」等の困難を抱える本道の地方において、その影響は生徒にどのように表れているのだろうか。東京を中心とした都市に人口の流入は止まらず、地方は担い手不足に喘ぎ、疲弊している。「地域格差」問題は、生徒に、どのように意識され、あるいは感じられているのだろうか。生徒は地方に幻滅しているのか。生徒は、昔と変わらない理由で、都市を目指す人生を展望するのだろうか。そうだとしたら、何か止めるための、少なくとも和らげるための手だてはないのだろうか。

第２に、「将来格差」問題である。

2010年代も終わりを迎えようとしている。生徒の育つ社会は、もはや「右肩あがり」の時代のものではない。社会全体も将来の方向性を喪失している。教育制度も60年ぶりの大転換の途上にある。受験競争は既に弛緩しているため、広範囲の生徒の学習のモチベーションを「学歴獲得」から得ることは難しい。生徒の学力格差を原因とする将来格差は、家庭の経済力（市場からの学力の調達）に依存するようになったと言われている。他方で、地域社会や家族等のコミュニティが、生徒の人間性を陶冶する力を失って久しい。それでは、生徒を陶冶しているものは何だろうか。生徒は、将来が見えない中で、どのように自分を育てることができるのだろうか、将来を展望することができるのだろうか。

「地域格差」問題と「将来格差」問題の焦点に、私たちは研究課題（地方の生徒の地域アイデンティティと将来志向）を位置づける。

この２つの問題（「地域格差」「将来格差」）の克服は、公教育の目的に再考を迫る際の基点だと考えている。そして、2022年に施行される「18歳成人」法は、この再考が現実化される舞台を提供する。少なくとも中等教育の目的は、18歳を「大人にすること」に定めざるを得なくなった。すなわち、「社会的自立」を公教育の目的とするしかない。前述した２つの問題の存在を与件として、「社会的自立」のために何ができるかを考えなければならない。

少なくとも、第５期科学技術基本計画で謳われる「society5.0」等の眉唾な未来に向けて、

「資質・能力」を育成すれば「大人」になれるという楽観的な議論は、2つの問題から目をそらせているように思える。さらに、翻って、子どもには「資質・能力」を要求する「大人」は、問題含みの現在の社会をどのような社会に変えれば良いのか、作って行く必要があるのか、を問う必要はないのだろうか。

私たちが、教育にできることは何かをミクロな変化から考えなければならないと考えるのは、あやふやな未来論から教育を演繹してはならないと考えるからである。

地方の生徒の地域アイデンティティと将来志向の関係を検討することは、ここに日本社会の未来の「縮図」が現れていると考えるからである。

付言しておく、この中学生・高校生（学校）を対象とした研究群以外では、「地域の若き担い手」として、地方の若手労働者（酪農家や漁業者も含むため、厳密には労働者とは言えないが）の労働・生活と将来の志向性についての研究も、並列して行っている。

ところで通例として、私たちが行う様なアンケート調査を素材とした意識分析は、生徒の生活（家族生活、学校生活）という土台との関係で、意識を考察する。しかしながら、今回のアンケート調査は、下川中学校の中学3年生（以下、生徒とする）の地域アイデンティティを明らかにする目的に限定して許可をいただいたこともあり、この土台に関する情報については制約をもつ。必要だと思われる点についての検討がないという誹りもあるだろうが、ご勘弁ねがいたい。

その代わり、2つの強みがある。ひとつは、これまで私たちが行ってきたオホーツク地域の中学3年生調査（2つの年度のN中学校の中学3年生、O中学校の中学3年生）との比較を生かすことができるという強みである。もうひとつは、対象とした生徒が通う下川中学校は、「総合的な学習の時間」において、幼稚園から高校まで一貫して行われる「森林環境教育」に位置づいた「体験学習」を行っている。これが生徒の地域アイデンティティにどのような影響をもっているかについても具体的に考察できるという強みである。

報告書の構成について少し説明する。

第1章は、生徒調査の概略である。これは調査項目にそって忠実に、その結果を記述することを旨としている。

第2章は考察となっている。分担執筆となっているため、節の冒頭に筆者を書き込んでいる。筆者は、私（浅川和幸）と、中学校調査の分析を担当することになった北海道大学教育学部の3年生2人（伊藤磨里と森高紗英）が行った。

報告書を始めるにあたって、どのような視角で考察を行ったのか、手短かにではあるがそれに触れておきたい。

分析の素材は、アンケート調査に表明された30人ほどの生徒の意見（意識）である。しかし、個々の中学生の意識は「背景」と意識を構成する「独自の論理」をもっている。

「背景」とは、日本国の中で特定の位置を占める地域社会と、「2020年が迫る今」とい

う意味で) 大げさに言えば歴史背景である。「独自の論理」とは、それぞれの人生に見通しを打ち立てながら(「時間軸」をもって、後述する) 生きている者としての意識、である。この考察によって、個別の30人の分析という意味から、普遍性を取り出したいと考える。

具体的には第2節の考察で、2つの視角から生徒の意識を考察する。この報告書の方法論とも言える。

第1に、特定の地域社会(下川町)は生徒の生活の環境として最も重要であるが、それは格差を抱えた現代の日本社会に位置づけられ、意味を与えられている。この点を重視する視角である。先行研究との関係を少し補足しておきたい。

これまで中学生は、学校と家庭という2つの閉じられた(守られた)環境を往復する「振り子」のような存在(「振り子」型)として理解されてきた。これは「教育学的孩子・青年把握」、すなわち「保護される存在としての『子ども・青年』像」と非常に良く符合していた。ところが現在の「子ども・青年」研究は、この2つの環境にさらに新たな環境(消費社会・消費文化)を加えなければならないと指摘している¹。すなわち「子ども・青年」は、学校、家庭そして消費社会の3つの環境を自由に行き来する存在(「トライアングル型」)として理解しなければならないというものだ。

学校や家庭(地域コミュニティも含めて)が「子ども・青年」の精神に大きな影響を与えていないことは、子どもに関わる全ての人にとって、もはや周知の事実ではないだろうか。そして、学校の影響力でさえも低下したからこそ、地域(社会教育は当然のこととして)を動員することで補強するのが新しい学習指導要領を含めた政府の戦略となった。この見立ては間違っていないと考えている²。

そして新たに加わった環境(消費社会・消費文化)は、「子ども・青年」の生活を強く規定し、彼ら／彼女らはその下で自己形成している。極端な言い方が許されるなら、影響力

¹ 日本の「子ども・青年」(以下では、青少年)の生活における消費文化の浸透力は、先進国でも群を抜く。これは家族も含めたコミュニティの弱体化と表裏一体である。そのため、青少年は社会への「構え」さえもその大部分を消費社会において、消費文化を通じて形成する。そして同時に、消費社会や消費文化へのアクセスの有利・不利を判別する鋭い感覚を育てる。消費社会や消費文化へのアクセスにおいて現存する地域格差は、生活している地域のランク付けにさえつながる。しかしながらこのランク付けは、高度成長期からバブル期にあったような東京を頂点とした直線的なものではない。日本中に普及した「郊外型の消費環境セット」(たとえば「イオン」、「カラオケ」、「ラウンドワン」等。この末端に「コンビニがある」がくる)を重視するものへと、変化していると考えられる。この「郊外型の消費環境セット」は日本中に普及したために、「標準」の意味をもつと考えるべきだろう。そのため、これらにアクセスできないことは不当であり、「疎外」されているという意識をもつ。生活している地域を「劣っている」と考えることにさえも、つながってしまう。消費社会へのアクセスの地域格差が、消費社会のヒエラルヒーにおいて、地方が特定の位置を占める意味をもってしまうことについて、また家族―学校―消費社会という青少年の成長／社会化過程を規制する「トライアングル型」の生活環境の問題性については、中西新太郎『「問題」としての青少年 現代日本の<文化―社会>構造』(大月書店、2012年)を参照した。「疎外」意識については、秋田県における県内地域ヒエラルヒーを描いた、豊島ミホ『底辺女子高生』(幻冬舎文庫、2006年)が参考になる。また「郊外型の消費環境セット」については、三浦展『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』(洋泉社、2004年)を参照した。「郊外型の消費環境セット」がないことへの「疎外」意識については、第1章(4)の「生徒の考える下川町の「良くないところ」」(16頁)の分析において詳述する。

² 2015年末に相次いで出された「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」(中教審答申)や「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(中教審答申)、「地域に開かれたカリキュラム」等幾つも上げることができる。

の点からみて、消費社会・消費文化こそが「子ども・青年」を陶冶とらいしていると言っても過言ではない。そして消費社会・消費文化によって陶冶された子どもは、それ以外の社会に対しても「消費者」（強い言い方をするなら「お客様」）として関わることを身に付けている³。そのように臨む。すなわち2つの生活環境に生きる時代（「振り子」型）の「保護される存在としての『子ども・青年』」像は、3つの生活環境に生きる時代（「トライアングル型」）の消費社会・消費文化に陶冶される「子ども・青年」像へ、ある種の「消費者」に、なし崩し的に変化しつつある言うことができるだろう。

ところで「子ども・青年」は、地域社会のことは学校を通して（しかも小学生でしか組織的には学ばない）しか知ることはない。一方で消費社会・消費文化に陶冶されながら、他方で地域社会には陶冶されない。そのため生まれ育つ地域社会を、消費社会・消費文化の格差構造の中に位置付けて理解するしかない。それしかないのだから⁴。

第2に、生徒の人生の見通し（パースペクティブ）を構成するもの・ことの中で、現在は意味付けられているという視角である。現在は時間軸の中にあるという視角である。現在が未来を構想させるだけではない。未来も現在をある形に構築する。未来と過去は相互参照する中で、生徒は自分なりの現在の時間軸を立ち上げている（構築している）と考えられる。

時間軸という言葉は、次のようなことをイメージしている。生徒にとって進路問題は大きな関心事である。ところで中学生が進路を考えると、単なる高校選択の問題として考えるわけではない。それは、2つの時間の狭間に置かれた複合的な判断を行っている。

一方には、これまで（過去）に未来への志向性をどのように培ったか、また未来を可能にするための条件としての学力（成績や点数にのみ還元されるものではない勉強の習慣や動機付けや意欲）を形成してきたのか、がある。

しかしもう一方には、これから（未来）にどのような生活（職業選択も含めた）をして行くのかという志向性（夢やそれを現実化するための社会関係や展望）がある。

そして両方の判断が、現在の生活（例えば、学習の必要性やモチベーション）にフィードバックされる。すなわち生徒の現在は、過去と未来を貫く時間軸（時間的パースペクティブの奥行き）に支えられている。

この2つの視角を梃子にして、生徒の意識を解釈する。十分な解釈が可能になるものもあるだろうが、当然、はみ出すものもある。この後者（はみ出すもの）にこそ、生徒に固

³ この点に関しては、内田樹の『下流志向〈学ばない子どもたち 働かない若者たち〉』（講談社文庫、2009年）が印象に残る説明の仕方をしている。

⁴ このような意味で、生徒が地域のことを知ることは戦略的に重要である。しかしこれは、なにも地方に限ったことではない。例えば、札幌市で生まれ育った北海道大学の学生は、札幌市について知っていることは少ない。新聞も読むことはなく、地域社会の行事に参加することもない（勉強することと学校生活を楽しむことしか親から要求されていない）。そのため、地域について知っていることは、店の名前や遊ぶところ、そして観光地を答えるしかない。大雑把な言い方が許されるなら、日本社会は若者に「根を持つこと」を求めてこなかった。批判的な言い方をすると、「根無し草になる」ことを推奨した。これは広い地域を転勤して生きる核家族には適格的であったからだ。日本社会が「右肩あがり」の時代を終えた今後も許されるのかどうか、私は懐疑的である。

有の考え方（大げさに言えば思想性）が現れると同時に、学校の教科教育やキャリア教育における先生方の働きかけや、友人同士の影響の与え合い、そして地域社会や文化の影響力が把握できると考えている。

第1章 生徒調査結果の概要（浅川）

第1章では、2018年9月に行わせていただいた下川中学校3年生へのアンケート調査の結果を、調査項目の順序にだいたい沿う形で報告する。

私たちは、生徒の考えをできるだけそのままの言葉で知りたいと考えた。そのため、回答の多くを自由記述形式でお願いすることにした。しかし、自由記述はそのままを掲げるのでは「芸がない」。分析にはならない。そのため、自由記述の多様な内容を、質的に区別し、同質のものを集約化した。

集約化作業の手順は、概略以下のようなものだ。

まず、自由記述のそれぞれに共通して登場する「キーワード的なもの」（以下では、キーワードと省略する）に注目する。生徒のひとつの自由記述は、ひとつ以上のキーワードからできている。これを区別する。自由記述を、キーワードに注目して分解すると言い換えても良い。これを全ての自由記述について行う。そうすると、人が違ってもキーワードには共通するものが多々あることが分かる。この共通性に注目してまとめる。この共通のキーワードを「要素」として考える。「要素」はあまり集約度が高くないし、ある程度数が多くなる。

この「要素」を比較し、質的な共通性が認められると判断できた場合は、それをさらにまとめて「ラベル」を作成する。さらに、この「ラベル」を比較し、質的な共通性が認められると判断できた場合は、それらをまとめて「カテゴリ」を作成する（以下では、「要素」「ラベル」「カテゴリ」のカッコを省略する）。すなわち、要素、ラベル、カテゴリは記述の質的な共通性に注目して、より集約度を高めた（それが可能であると判断できた）系列となっている。

しかしながら、要素－ラベル－カテゴリと3段階に集約可能であった系列もあるが、要素を作成する段階で他と共通する要素がない場合や、ラベルを作成する段階で共通するラベルがない場合もある。これらの場合、前者は要素がラベルやカテゴリと同じ言葉となり、後者はラベルとカテゴリを同じ言葉になった。すなわち、3段階に集約可能であった系列、2段階に集約可能であった系列、1段階で要素名のままの系列が混在することになっている。

質の違いを大つかみに表現する必要から、分析結果として説明される場合は、集約化作業とは逆向きになされる。最も大きく区別されたものがカテゴリとなる。カテゴリが一段細分化され、区別されたものがラベルとなる。ラベルがさらに一段細分化され、区別されたものが要素となる。そのため、3段階（カテゴリ－ラベル－要素の系列）と2段階（カテゴリ－要素の系列）と1段階（カテゴリ＝要素の系列）となっている。

冗長な説明となってしまったが、実際の分析を見ていただければ直感的につかめると考える。また、最初に自由記述の整理・分析を行う箇所で、内容に即して補足説明を加えることにしたい。

要点としては、自由記述に重点を置いたアンケート調査を行い、だからこそ質的な分析に意を用いたということである。方法としては、記述内容の質的な区別を重視し、区別された要素の共通性に注目して集約することで、量的にも把握することを目指した。

それでは、方法的な前置きを終えて、結果の報告に入っていこう。

第1節 生徒の特徴

(1) 性別

調査に応じてくださった生徒は 32 人である。そのうち男子は 16 人（50%）、女子は 16 人（50%）である。

※ 内訳(%)は、小数点以下を四捨五入して表記した。以下でも同様である。

(2) 保護者の職業（主なもの）の特徴

保護者の職業を自由記述の形で書いてもらった。それをまとめたのが図表 1－1 である。

図表 1－1 保護者の職業の特徴

	度数(人)	内訳(%)
農家	4	13
林業関係	1	3
自営業	5	16
会社員	8	25
病院・医療関係	2	6
公務員	11	34
N. A.	1	3
計	32	100

※ 生徒の記述には産業や職業、雇用上の地位が雑多に入っていた。その回答を分類した。そのため、正確な職業分類とは言えない。また、複数の職業が記述されていた場合もあったが、筆頭に書かれていたものを主要な職業と考え、それで整理した。複数の記述があったのは 2 人である。図表中の「N.A.」は「ノー・アンサー」を略したもので、回答がなかったものをこのように表記している。内訳(%)は、それぞれの度数を母数（生徒数 32 人）で除したものである。

多いものから上げてみる。まず、「公務員」である。これが 11 人（34%）と全体の 3 分の 1 を占めている¹。

これに続くのが「会社員」の 8 人（25%）である²。この 2 つで 59%となる。

これ以外では多い順に、「自営業」³が 5 人（16%）、「農家」が 4 人（13%）、「病院・医療

¹ 具体的なものとして、「自衛隊」や「教育委員会」を上げてくれた生徒もいたが、ほとんどは「公務員」との記述であった。

² 「美容師」と「お店の店員」をここに含めている。

関係」が2人(6%)、そして「林業関係」が1人(3%)となっている。

2015年の「国勢調査報告書」の産業別就業者数(下川町)との比較してみると、「公務員」(34%)はかなり多い(国勢調査では7%)ことが分かる。また、「農家」(14%)と「林業関係」(3%)を合わせたものを「第1次産業」と考えるとして、これが若干少ない(国勢調査では23%)と考えられる。「林業関係」の保護者をもつ生徒は1人であるが、これは平均的(国勢調査では4%)であると考えられる。さらに、国勢調査においては、「サービス業」の就業者が602人(34%)を占めているが、「病院・看護師」の2人(6%)に会社員の一部と自営業の一部が加わるとしても、相対的に少ないものと思われる。

すなわち、保護者の構成という点で、「自営業」と「会社員」に不明な点は残るものの、「公務員」の比重が高く、「第1次産業」と「サービス業」が少ない点が特徴となるだろう。以下の分析では、保護者の職業の区別を必要に応じて活用する。

第2節 森林環境教育体験の感想

下川町では幼・小・中・高のそれぞれにおいて、全国的にも珍しく、しかも有名な森林環境教育が行われている。森林環境教育への男子生徒の感想を列挙したのが図表1-2、女子生徒の感想を列挙したものが次頁の図表1-3である。

図表1-2 森林環境教育への感想(男子生徒)

保護者職業	感想	注目キーワード			
		下川	森林・木	楽しい・楽しかった	大変・苦労
農家	下川には森林がいっぱいあるのでその木を使った授業で森林について学べてよかった	1	1		
林業関係者	普通。				
会社員	下川は森林をととても大事にしてきた。	1	1		
会社員	いずれも、貴重な体験ができた。				
会社員	これまで森林にふれて、木々の大切さが分かりました。		1		
会社員	植樹祭:木一つ植えるのもけっこう大変なんだなと思いました。		1		1
会社員	とくになし				
会社員	森林環境教育をうけて、中々体験ができないので、楽しかったです。		1	1	
病院・医療関係	こういう取組はきらいではないから楽しかった。			1	
公務員	楽しく森林を学べた。		1	1	
公務員	この行事であらためて下川のよさを感じられる、られたと思います。	1			
公務員	環境についてふれながら、友達と楽しむことができました。			1	
公務員	下川の木の良いところを知れるいい行事。	1	1		
公務員	下川は本当に木を大切にしているんだなと思った	1	1		
公務員	他学年との交流が深まる。				
公務員	下川町の色々なことを学べて楽しかった。	1		1	
計		6	8	5	1

³ 具体的な産業や職業は不明。

図表 1－3 森林環境教育への感想（女子生徒）

保護者職業	感想	注目キーワード			
		下川	森林・木	楽しかった	大変・苦労
農家	いつも何気なく使っている物でもその裏には沢山の苦労がある。				1
農家	みんな楽しかった			1	
農家	循環型森林経営について一般の中学生が学ばないようなことが学べるのが良いと思う。		1		
自営業	木について、下川町でどのような取り組みが行われているのかを知れました。	1	1		
自営業	町の人や他学年と交流する機会があつてうれしい				
自営業	3年生になって2、1年生に教えてあげる立場になって新しい感じで楽しかった。			1	
自営業	N.A.				
自営業	すごく楽しかったです。またしたいです			1	
会社員	森林のことについて、色々知れて良かったと思う。		1		
会社員	下川の木をいかしてとても良いと思いました。	1	1		
病院	こういう環境だからできたと思うので、楽しかったです。			1	
公務員	下川にとってどれだけ森林が大事か、毎回つたわってくる	1	1		
公務員	N.A.				
公務員	森林に関わった環境について知れてよかった。		1		
公務員	たのしかった			1	
N.A.	下川の木で色々な種類があるなと思います。	1	1		
計		4	7	5	1

まず、全体的に感想をみると、生徒の評価が高いことが分かる。また、その内容は具体的で、多様である。

しかしながら、これだけではどのような環境（生活の文脈）のなかに、これらの評価がなりたっているのかは不明である。そのために、2つの作業をした。

第1に、図表には感想だけではなく保護者職業を掲げた。家族文化との関係があるかどうかを検討するためである。第2に、感想から4つの注目キーワードを抽出した（感想で太字にした部分）。注目したのは、森林環境教育が特定の場所と関わっていることを示す「下川（町）」（後述する地域アイデンティティにつながるものである）、直接的な学習対象である「森林・木」、体験についての感想である「楽しい・楽しかった」、そして森林と関わる仕事の「大変・困難」である。

図表 1－4 「性別」×注目キーワード（下川）

		森林教育のキーワード(下川)		合計
		該当	非該当	
男子生徒	度数(人)	6	10	16
	内訳(%)	38	63	100
女子生徒	度数(人)	4	12	16
	内訳(%)	25	75	100
合計	度数(人)	10	22	32
	内訳(%)	31	69	100

まず、性別による違いを見ておこう。4つの注目キーワードのうち多少の差があると言えるのは、「下川（町）」であった。前頁の図表1－4がそれである。それ以外では、性別による違いは大きくないことが分かった。

男子生徒の方が「下川」に注目していると言える。しかし生徒数が32人と少ないので、この程度の%の違いは、それほど大きなものではないとも考えられる。

次に、保護者職業との関係を検討してみよう。図表1－5がそれである。生徒数が比較的多い「会社員」と「公務員」に注目する。注目キーワードのうち「下川」と「森林・木」では違いがでる。

図表1－5 「保護者職業」×注目キーワード（下川、森林・木）

		森林教育のキーワード(下川)		森林教育のキーワード(森林・木)		合計
		該当	非該当	該当	非該当	
農業	度数(人)	1	3	2	2	4
	内訳(%)	25	75	50	50	100
林業関係	度数(人)	0	1	0	1	1
	内訳(%)	0	100	0	100	100
自営業	度数(人)	1	4	1	4	5
	内訳(%)	20	80	20	80	100
会社員	度数(人)	2	6	6	2	8
	内訳(%)	25	75	75	25	100
病院・医療関係	度数(人)	0	2	0	2	2
	内訳(%)	0	100	0	100	100
公務員	度数(人)	5	6	5	6	11
	内訳(%)	45	55	45	55	100
合計	度数(人)	9	22	14	17	31
	内訳(%)	29	71	45	55	100

「公務員」の保護者をもつ生徒は「下川」とのつながりで森林環境教育を意識し（5人、45%）、「会社員」の保護者をもつ生徒は「森林・木」という直接的対象を強く意識している（6人、75%）ようだ。

他に家族文化との関係に関する調査項目がないので仮説的な解釈になる。しかし、「公務員」が、いわゆる「転勤族」であるなら合点は行く。他の地域との比較で考えた時に、森林環境教育、イコール下川の特徴と理解したということだ。その内容としての「森林・木」も45%であることも同じ趣旨だろう。また、会社員は家族（生活）の中では親しむことのない「森林・木」に関する学習や体験が強く意識されているものと推理できる。

さらに、中学校では森林環境教育を進路（キャリア教育）と関係づけている。そのため、進路を考える上で参考になったのかという点についても質問した。その回答をみておこう。次頁の図表1－6である。意味があったと答えている生徒は6人であった（19%）。そしてその内容は、次のようになっている。

図表 1－6 森林環境教育が進路を考える上で参考になったか
(参考になったと答えた生徒のみ)

・食べ物でも植物でも大切に扱うこと
・こういう仕事もあるんだなと思いました
・自分から進んで行動すること
・これまで森林にふれて、木々の大切さが分かりました。
・何かを作ってみたい、と思った。
・協力することの難しさと大切さ

結果からは、森林環境教育が進路を考える上で参考になったかと問われれば、直接的には難しいと考えるしかないだろう。多くの生徒にとっては「関係ない」となる。しかし、この 6 人の内容は、間接的だが大切な内容を含んでいる。直接的な進路を越えた大げさに言えば「生き方」に関わるものである。

また、この 6 人の保護者の職業が、農家が 2 人、自営業が 2 人、会社員が 1 人、公務員が 1 人となっていることから、下川と関連が深い職業（農家や自営業）の保護者をもつ場合には、間接的ではあるが、広い意味で進路に関係して受け止められていることが分かる。

さらに興味深いのは性別の構成である。この 6 人のうち、4 名を女子生徒が占めている。進路を考えることに、性別がどのように関わっているのかは、第 2 部考察で展開される。

第 3 節 生徒の地域アイデンティティ

(1) 考察の順序

この報告書の大きな目的は、生徒の地域アイデンティティについて考察することにある。地域アイデンティティという言葉はなじみ深いものではないと思うが、大きくは生徒が地域（ここでは下川町）にどのように感じているかを表す言葉である。しかし、単なる感想という意味を越えて、自分を地域に“identify”する⁴のかどうかを指している。以下に、考察の順序を掲げる。

第 1 に、下川町のことをどのように思っているのかについて単純な評価（3 択。「好き」、「半々」、「嫌い」）とその理由について検討する。まずは全体の趨勢を把握する。

第 2 に、次に下川町の「良いところ」と「良くないところ」を挙げてもらったものを素材に、「地域評価」の枠組みを明らかにする。後述するが、生徒が下川町についてどのように考えるのかは、他の都市との比較に依存する。特に、21 世紀初頭の日本社会を生きる生徒にとって、地域格差という言葉は知らなくてもこの比較序列の中に、自分の生活する町

⁴ 「identify」を示したのは、この原語に近い意味で地域と自分を「同一であると見なす」のかどうか、がアイデンティティ (identity) に問われていると考えたからである。ここには感情の問題が含まれている。また、評価と言っても離れた位置からのそれではなく、自分と密着した位置からのそれである。

が置かれている。すなわち、比較を通じて下川町の評価をしている。比較の尺度を知ることが重要である。そして、単純な評価（3 択）とこの「地域評価」の枠組みがどのように関わるのかを明らかにする。生徒にとって単純な評価（3 択）は、なかなか選びにくいものとしてあるだろう。特に、「嫌い」を選ぶことには心理的な抵抗感があるに違いない。しかしながら、「良いところ」と「良くないところ」ということで質問すると単純な評価（3 択）では判断が分かれていても、「半々」はもちろん、「好き」も貫く評価の枠組みが存在する。

第3に、生徒にとって下川町をどのような「活動の潜在力」をもったものとして捉えているのかについて、下川町いるから「できること」「できないこと」を素材に明らかにする。

「潜在力」という言葉は耳慣れない言葉である。しかし例えば、生徒が下川町を消費の側面からのみ捉えているとすれば、どうであろうか。大都市に劣る場所としてしか考えられないだろう。しかし、下川町には大都市とは異なる生活に根付いた（共同の）活動が展開できる可能性（このような意味で「潜在力」という言葉を用いた）をもっていると感じているのが重要である。これがないと考えるなら、下川町が不便・不利な場所という評価を逃れることは難しくなってくる。言い換えるなら、地域に関わらない形でなされる評価と、地域に関わるなかで押し広げられることを含めてなされる評価を区別する必要がある。

第4に、これまで私たちが西興部村・興部町行った「地域アイデンティティ調査」の結果との比較から、下川町の特徴と意味を考えてみたい。

（2）下川町の評価（3 択）とその理由

下川町についてどのように思うのかを、「好き」「半々」「嫌い」の単純な3 択で聞いた。また、なぜそう思うか（理由）についても尋ねた。理由については、鍵となっている部分を太字に表記した。それをまとめたのが次頁の図表1－7である。

第1に、下川町の評価（3 択）を確認しておく。「好き」と答えた生徒は15人（47%）である。「半々」と答えた生徒も同じ15人（47%）である。「嫌い」は2人（6%）に止まる。

理由の全体的な傾向について述べておく。

「好き」ではそれを選択する理由となる下川町の「良いところ」（肯定的な評価）が、様々に上げられている。

「半々」では下川町についての「良いところ」と「良くないところ」（否定的な評価）の双方が上げられている。文字通り「半々」を選択するに相応しい意味での理由付けとなっている記述が多い。それ以外では、理由が貧弱であるもの（「何となく」）や「良いところ」か「良くないところ」の片方が上げられているが、評価としては「半々」となった記述もある。

「嫌い」では、「良くないところ」という意味での否定的な評価となっている。

そして肯定的な評価の理由としては、何よりも「空気がきれい」が目立つ。否定的な評

価の理由としては「店が少ない」「遊び場所が少ない」が散見される。これらの理由の詳細な分析は次項に譲る。

図表 1－7 下川町の評価（3 択）とその理由

3 択	理由
「好き」 (n=15)	自然が豊かだから
	N.A.
	のどかでおちつくから
	どこの町より比べても空気がきれいだから
	冬は1日中飛べるジャンプ台があり、コーチも全日本に選ばれていて、日本1の環境のいいところだと思う。
	空気がきれいだからです
	空気がきれいだから
	空気がきれいだから
	となりに名寄があるし、特に不便なところはないから。
	町がきれいだから。
	自然がたくさんあるから
	住みやすいし、町の人やさしいから
	中学校行事1つに対しても町民が協力してくれる。
	空気がいいから
	N.A.
「半々」 (n=15)	森林が多くあって落ちつくが、施設が少ないため
	いいと思うところもあるが、悪いところもあるから
	なんとなく
	森がきれいなのはいいけど、他はないから
	店が少ない、街灯が少ないなどの問題があるけどしずかだから
	N.A.
	N.A.
	N.A.
	好きでも嫌いでもないから。
	友達とすぐ、あつまれるが、行く場所が少ないから
	町も空気もキレイだけど体を動かせるところ・遊べる所が少ないから。
	「森林」「スキージャンプ」くらいしかじまんでできるものがないから。
	遊ぶ場所がすくない
	自然がキレイで好きだけど、動物や街灯が少ない所が危険だから嫌い。
	自然豊かなところ
「嫌い」 (n=2)	学業でも部活動でも人口が少ないためレベルが低い
	N.A.

（3）生徒の考える下川町の「良いところ」

次に、生徒が答えた下川町の「良いところ」の分析結果を明らかにする。これは「下川町の良いところはどこですか」に自由記述で回答したものをそのまま載せたものである。ただし、先の3 択の順に並べ替えた。それが図表 1－8 である。内容の質的な検討のために、3 択の理由として回答したものも一部含めて、合わせて分析した。生徒が下川町の「良いところ」を把握する根拠の多様性と同質性を、なるべく幅広く確認するためである。3 択の理由と「良いところ」が重複している場合には3 択の理由の方は除き、質的に異なる場合にのみ付け加えた。

図表 1－8 下川町の「良いところ」

3択	内容
「好き」 (n=15)	森林が多い。空気がきれい。自然が豊か。
	人と人との仲が良い。
	自然がキレイなこと。のどかでおちつく。
	空気がきれい。行事が多い。
	地域の人たちのあたたかさ。スキージャンプでオリンピック選手をたくさんだしている。冬は1日中飛べるジャンプ台があり、コーチも全日本に選ばれていて、日本1の環境のいいところだとおもう。
	空気がきれい。
	空気がきれい。行事が多い。町がきれい。ごみの分別がすごい。
	空気がキレイ。森林にかこまれている。事故が少ない。
	森林がいっぱいある。
	町がきれい。食べ物がおいしい。
	空気がキレイ。自然がたくさんある。イベントがたのしい。
	森林が9割をしめている。住みやすい。町の人やさしい。
	森林に囲まれていて空気がきれい。中学校行事1つに対しても町民が協力してくれる。
	空気がいい。
	森林が多い。
「半々」 (n=15)	森林の多さ。林業。
	自然が多い。
	人が少なく静かなところ。
	森、木が多くキレイ。
	静か。
	森がいっぱい。
	木がある。空気がキレイ。
	森林・環境が良い。
	空気がきれい。自然が良い。
	日中ともに静かにくらせる。友達とすぐ、あつまれる。
	空気がキレイ。町がキレイ。
	森林がたくさん。
	空気がキレイ。
「嫌い」 (n=2)	災害も犯罪も少なく、安心安全な町。
	木が多い。

「3択」で「半々」と回答した生徒でも、下川町の「良いところ」を多く回答していることが分かる。「嫌い」であってもそうである。そして内容的には共通するものを多く含んでいる。しかし、このままではさらなる分析に活用しにくい。そのため記述の共通性と差異性に注目し、整理していくことにする。

その際に用いた方法が、前述した「要素－ラベル－カテゴリ」の3段階での集約化と整理により系列を明らかにすることである。この図表を素材に、具体的に説明してみよう。

例えば、最も上段の「森林が多い。空気がきれい。自然が豊か。」と記述した生徒の回答に注目してみる。この3つの内容は、それぞれ別個のものであると考えられる。このそれぞれを「良いところ」の要素と理解する。すなわちこの生徒は、「森林が多い」「空気がきれい」「自然が豊か」を（別々に）回答したと見なすことができる。すなわち、ひとりの生徒が3つの要素を回答したと考える。言い換えるなら、一連の記述ではあるが、複数回答

として分析を行ったことになる。これと同様のことを全ての生徒について行った。

さらに、例えば要素「空気がきれい」に注目すると、それに類する記述は「良いところ」の中に散見される。これを同じもの（同質性）と理解し、ひとまとめのものとして数え上げる（集約化）。逆に、内容が共通しない、質的に異なると考えられるものについては、それを別の要素と理解する。

そして、要素間の類似性に注目し、可能な場合にそれをまとめてみる。この作業で作成されたものがラベルである。さらに、ラベル間も類似性に注目し、可能なものをまとめてみる。それで作成されたものがカテゴリである。

このような一連の作業によって作成されたのが図表 1－9 である。

図表 1－9 下川町の「良いところ」の整理

下川町の良いところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみ	豊かな自然	森林の豊かさ	12	38
		空気がきれい	12	38
		自然の豊かさ	7	22
	美味しい食べ物		1	3
小計			32	100
林業が盛ん			1	3
小計			1	3
生活が穏やか	良い町民関係	町民関係が良好	2	6
		町民が協力的	2	6
	生活しやすい	住みやすい	2	6
		安全・安心	2	6
	環境が良い	静か	3	9
		友だちと遊びやすい	1	3
小計			12	38
地域の取り組みがある	行事が良い		3	9
	町がきれい		3	9
	ジャンプの取り組み		1	3
小計			7	22
複数回答総計			52	163

まず、下川町の「良いところ」をざっくりととらえてみよう。具体的には、カテゴリの水準で検討してみる。生徒は、下川町の「良いところ」を、「自然のめぐみ」があること、「林業が盛ん」であること、「生活が穏やか」であること、「地域の取り組みがある」ことであると理解している。しかし、それぞれの支持は大きく異なる。支持の高い順に、ひとつずつ説明する。

第 1 に、最も支持されたカテゴリは「自然のめぐみ」で、度数は 32 件になる。これは生徒数に匹敵している。この 32 件をアンケート調査の母数(生徒数 32 名)で除した%は 100%である。図表では小計の「内訳(%)」の欄に記述してある。この 32 件の内訳(要素)は、「森林の豊かさ」(12 件、38%)、「空気がきれい」(12 件、同%)、「自然の豊かさ」(7 件、22%)

に「美味しい食べ物」(1件、3%)からなる。前3者には共通性があると考え、「豊かな自然」というラベルで表現できると考えた。

度数の計算の仕方について補足しておく。ひとりの生徒の回答が複数の内容から構成されていた場合でも、要素が(同じもので)重複していた時は、それをひとつとして理解した。要素が異なる時は、別のものとして理解した。

すなわち要素の違いに注目したカウントの仕方となっている。そのため、ひとりの生徒が2つの記述をしたとしても、同じ要素である場合は1件としてカウントし、異なる要素の場合は2件としてカウントした。この結果、内訳(%)は生徒のなかの何%がその回答をしたのかが分かる形となっている。すなわち、「森林の豊かさ」(12件、38%)とは、3分の1を超える生徒がこの回答をしたことが分かる。これを合算したラベルやカテゴリは、この意味での数的な厳格さはない。同じカテゴリに所属する要素が同一の生徒によって回答されている場合に、重複して計上されてしまうからである。後のクロス集計を用いた分析で、カテゴリを利用する場合は、この問題重複を取り除いた。同じカテゴリ内の要素やラベルの重複については件数として計上せず、有無のみを問題とする形で取り扱った。カテゴリの説明にもどる。

第2に、次に支持されたカテゴリは「生活が穏やか」で、度数は12件(38%)になる。要素は「町民関係が良好」(2件、6%)、「町民が協力的」(2件、同前)、「住みやすい」(2件、同前)、「安全・安心」(2件、同前)、「静か」(3件、9%)、「友だちと遊びやすい」(1件、3%)からなる。この要素をまとめたラベルとして、「良い町民関係」、「生活しやすい」、「環境が良い」を考えた。

第3に、その次に支持されたカテゴリは「地域の取り組みがある」で、度数は7件(22%)になる。要素は「行事が良い」(3件、9%)、「町がきれい」(3件、同前)、「ジャンプの取り組み」(1件、3%)からなる。

第4に、最も支持が少ないカテゴリは「林業が盛ん」で、度数は1件(3%)のみである。度数は1件で少ない。しかし、これもカテゴリとして考えた。要素、ラベル、カテゴリが同じ内容となっている。

以上のような方法で整理した結果、生徒は下川町の「良いところ」を「自然のめぐみ」があることを中心に理解していることが分かる。これに続くものとして「生活が穏やか」があり、さらに「地域の取り組みがある」がある。下川町は、「林業が盛ん」な土地柄である。しかし、生徒の「良いところ」理解は産業としてのそれにはない。産業の背景である「森林の豊かさ」や「自然の豊かさ」であり、端的には体感できるものとしての「空気がきれい」なことにある。

(4) 生徒の考える下川町の「良くないところ」

さらに、生徒が答えた下川町の「良くないところ」の分析結果を明らかにする。それが図表1-10である。これは「下川町の良くないところはどこですか」に自由記述で回答

したものを、そのまま載せたものである。ただし、先の3択の順に並べ替えてある。3択の理由として回答したものも一部含めて合わせて分析した点や、その理由は図表9と同様である。

図表1－10 下川町の「良くないところ」

3択	内容
「好き」 (n=15)	遊び場が少ない。
	少し施設等が少なく不便。
	何でも作ること。
	みんなで遊ぶところがあるが少ないところ。
	高齢化。森林が多すぎる。
	あまり遊ぶところがない。
	大きい店がない。
	店が少ない。
	イオンとかがない。
	お店が少ない。
	あそぶところがない。
	町が1割しかない。
	ない。
	店が少ない。
	N.A.
「半々」 (n=15)	施設が少ない。
	何をするのにも不便。
	店が少ない。
	何もないところ。
	店が少ない。街灯が少ない。
	コンビニが1店しかない。
	遊ぶところがない。暇つぶし場所がない。
	遊べる所が少ない。
	寒い。コンビニが1つしかない。
	とても寒い。友達と行く場所が少ない。
	体を動かすところが少ない。遊べる所が少ない。
	いなか。「森林」「スキージャンプ」くらいしかじまんでできるものがない。
	キツネなどの動物がおおい。街灯が少なくてあぶない。遊ぶ場所がすくない。
	動物が危険。街灯が少ないので危険。
	あそべるところが少しすくない。
「嫌い」 (n=2)	元気がない。学業、部活動のレベルが低い
	N.A.

3択で「好き」と回答した生徒も、「良くないところ」を回答している。そしてその内容は、「半々」と回答した生徒と共通しているものが多いことが分かる。大きくは、買い物をする「店」「遊び場」「施設」の不足（「ない」）が上がっている。すなわち、ざっくりと言えば消費文化へのアクセスの悪さを、下川町の「良くないところ」と考えている訳である。

しかし、このままではさらなる分析に活用しにくい。図表9を作成するのと同様の方法で分析する。ただし「内訳(%)」の計算は「N.A.」の2人を除き、母数30人で除したものである。それが図表1－11である。

図表 1－11 下川町の「良くないところ」の整理

下川町の良くないところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
消費文化へのアクセスが悪い	物を買う場所に乏しい	店がない	10	33
	遊ぶ場所に乏しい	遊び場所が少ない	10	33
小計			20	67
都市に比べて劣っている		自慢できるものが少ない	1	3
		元気がない	1	3
		学校のレベルが低い	1	3
		不便	1	3
		田舎	1	3
小計			5	17
自然が厳しい		寒い	2	7
		動物が危険	2	7
小計			4	13
自治体行政問題		施設がない	3	10
		街灯が少ない	3	10
		森林が多すぎる	2	7
		施設が多すぎる	1	3
		高齢化	1	3
小計			10	33
特になし			1	3
複数回答総計			40	133
N.A.			2	6

まず全体に関して、質的な区別という点で（カテゴリのレベルで）大きくとらえてみる。生徒は下川町の「良くないところ」を、「消費文化へのアクセスが悪い」こと、「都市に比べて劣っている」こと、「自然が厳しい」こと、「自治体行政問題」だと考えている。しかし、それぞれの支持は異なる。これも支持の高い順に説明して行く。

第1に、最も支持されたカテゴリは「消費文化へのアクセスが悪い」で、20件（67%）である。生徒のおよそ3分の2が支持している。要素はそれぞれ、「店がない」（10件、33%）、「遊び場所が少ない」（10件、同前）である。カテゴリはこの要素名をそのまま流用してもかまわないが、カテゴリを「消費文化へのアクセスが悪い」とした関係で、ラベルとしては違う名前をあてたいと考えた。そのため、それぞれのラベルは「物を買う場所に乏しい」と「遊ぶ場所に乏しい」とした。

第2に、次に支持されたカテゴリは「自治体行政問題」で、10件（33%）である。これも、カテゴリとラベルを同一名称とした。内容は豊富である。「施設がない」（3件、10%）、「街灯が少ない」（3件、同前）、「森林が多すぎる」（2件、7%）、「施設が多すぎる」（1件、3%）、「高齢化」（1件、同前）である。「高齢化」はどのように分類すれば良いのかに迷ったが、行政としての対応（政策）との関係での問題指摘であると理解し、ここに分類した。

第3に、その次に支持されたカテゴリは「都市に比べて劣っている」の5件（17%）である。これは、カテゴリとラベルを同一名称とした。「自慢できるものが少ない」、「元気が

ない」、「学校のレベルが低い」、「不便」、「田舎」がそれぞれ1件（3%）ずつあった。内容がバラバラである。

第4に、最後のカテゴリは、「自然が厳しい」である。これも、カテゴリとラベルを同一名称とした。「寒い」と「動物が危険」のそれぞれ2件（7%）からなる。

さらに、「特になし」と答えた生徒が1人いた。

このように見て行くと、生徒は下川町の「良くないところ」を「消費文化へのアクセスが悪い」ことを中心に理解していることが分かる。これに続くものとして「自治体行政問題」があり、「都市に比べて劣っている」がある。

第2章の考察において、「良いところ」と「良くないところ」がどのような関係にあるのかについて分析を行うので、簡単な指摘に止めるが、対照関係としてあると考えられる。例えば、「良いところ」の「自然のめぐみ」と「良くないところ」の「自然が厳しい」は対照関係をうかがわせる。前者に比べると後者は少ない。また、「消費文化へのアクセスが悪い」も都市との対比として理解できるので、「都市に比べて劣っている」と重なるところがあるとも考えることもできる。

ところで、上述の作業によって、下川町の「良いところ」の内部で、また下川町の「良くないところ」の内部で、また「良いところ」と「良くないところ」の関係を検討することが可能になった。第2章の考察において、これらの分析を行う。そのことを通じて、「良いところ」と「良くないところ」がどのような対比の論理の下に構造化されているのかを明らかにする。またさらに、森林環境教育の「キーワード」との関係を始めとした他の指標との比較も行う。

第2章との関連は置いておき、他の調査項目の分析に進みたい。

（5）生徒は下川町にいるからこそ「できること」をどのようにとらえているか

生徒は、下川町にいるからこそ「できること」をどのようにとらえているのだろうか。前述した「潜在力」の問題として下川町をみた場合の評価である。

このことを質問した意味は、「良いところ」「良くないところ」が少し離れたところからの町の評価であるとするならば、町への関わり（コミットメント）やその可能性（関わることができるか）を独自の位相でとらえたいと考えたからである。

それを「3択」別にまとめたのが、次頁の図表1－12である。

森林・木を中心とした「自然体験」に加えて、「学校行事」（「炭焼き体験学習」、「会食集会」、「植樹祭」）が多く上げられていることが分かる。これに、町の取り組み（「アイスキャンドル」）や福祉（「いろいろな無償」）、スキーができる施設（環境）が加わっている。

これも、このままでは多様性は確認できても、分析することができない。そのため、前出の方法（内容の差異に注目し、類似性を集約する）を活用する。

図表 1－12 下川町にいるからこそ「できること」

3択	内容
「好き」 (n=15)	森で遊ぶこと
	自然の中の暮らし
	森や川にいてリラックス
	学校行事(炭焼き集会・会食集会)
	森林について学習する、炭焼き
	めっちゃ木で遊べること
	木について学ぶ
	植樹祭
	森や木について知る機会がたくさんある。
	自然と触れ合うこと
	植樹祭
	木を使う体験
	森で子供などが遊べる
	植樹祭
	森林環境教育
「半々」 (n=15)	NA.
	自然との触れあい
	NA.
	炭焼き、アイスクャンドル
	森林関係、中学生までのいろいろな無償
	森林学習
	NA.
	植樹祭、炭焼き、森林にかかわっている体験
	炭焼き、植樹祭
	町中をジャージで歩ける
	スキー場が使いたいときに使える(お金がないから…と言うことがない)
	炭焼き、植樹祭などの行事
	炭焼き
「嫌い」 (n=2)	木をつかった町の行事。
	歩道を自転車ではしれること。
	自然にふれること
	NA.

ひとりの生徒の意見であっても、内容的に区別可能なものであったら区別し、それぞれで計上する。また同趣旨のものを抽象化することでざっくりとまとめる。このような方針で作成したのが、次頁の図表 1－13 である。

下川中学校で行われる森林環境教育の行事(「特徴的な学校行事等」)を上げた生徒が 15 件(47%)で最も多い。それに続くのが「自然体験」「森林・木に関する体験」のそれぞれ 5 件(16%)である。これに「特徴的な地域行事」「開放経験」の 2 件(6%)が続く。

下川町にいるから「できること」のは、森林や木に関する体験ができることである。そしてこの体験は、学校行事における体験である。別の言い方をすれば、下川町の「良いところ」や「良くないところ」に存在していた地域社会(行政も含めた)に関することを上げた生徒が少ないということもできる。

図表 1－13 下川町にいるからこそ「できること」を整理したもの

内容	度数・内訳(%)	
特徴的な学校行事等	度数	15
	内訳(%)	47
自然体験	度数	5
	内訳(%)	16
森林・木に関する体験	度数	5
	内訳(%)	16
特徴的な地域行事	度数	2
	内訳(%)	6
開放経験	度数	2
	内訳(%)	6
安価なスキー利用	度数	1
	内訳(%)	3
N.A.	度数	4
	内訳(%)	13
合計(n=32)	度数	34
	内訳(%)	106

端的に述べれば、学校を軸とした（学校が仲立ちとなった）下川町への関わりに、収斂していると表現できる。すなわち、町（という社会）に対してどのように関わるができるか（コミットメント）という点で、生徒たちの直接的な関わりは少ない。かろうじて「特徴的な地域行事」が2件上がるのみである。私たちのような下川町外部者から見れば、森林に関わる体験が多いことは当然とも考えるが、他にも著名なこと（スキー・ジャンプや幾つかの行事）が上がらないのは不思議に思える。もはや「当たり前」にことになっているために、「下川町にいるから」という意味付けがされないものになっているのかもしれない。

このそれぞれの「できること」への支持は、「下川町への評価」（3択）や性別によって多少異なるだけであった。データの提示は割愛する。

（6）生徒は下川町にいるからこそ「できないこと」をどのようにとらえているか

今度は逆に、生徒は下川町にいるからこそ「できないこと」をどのようにとらえているのだろうか。下川町の「良くないところ」に出てきた「必要なものがない」（カテゴリ）や「都市に比べて劣っている」（カテゴリ）に重なるものを上げるのだろうか。

次頁の図表1－14は、「下川町への評価」（3択）別に、「できないこと」の記述を掲げたものである。

最初に、この質問自体の適切性がどうか、という点を検討する必要がある。

回答として、「N.A.」が最多（11件、34%）となっている。「N.A.」の内訳は、「好き」が4件（15件中の27%、以下同様）、「半々」が7件（47%）、「嫌い」が2件（100%）である。逆に、3択で「好き」を選択した生徒には記述が多く、「半々」と「嫌い」で少なくなっている。そのため抽象的で、質問されていることがつかみがたかった（難しかった）のだと

は考えにくい。ひとつの解釈としては、「良くないところ」に既にしたので、重複する（「言うまでもない」）と考えて、書かなかったということかもしれない。しかしながら、「好き」の（すなわち、下川町に対してポジティブな感情を抱いている）生徒だからこそ記述できた、という解釈の方が適切だと考える。自分にしっかりと（下川町が）「好き」の感情があるからこそ、「できないこと」を直視することが可能で、それを言葉に書くことができるという解釈である。

図表 1－14 下川町にいるからこそ「できないこと」

3択	内容
「好き」 (n=15)	映画をみること
	都会の暮らし
	スタバに行く
	クラス替え
	からおけ、夏に下川でジャンプが飛べない
	カラオケとかでかいお店がない
	ゲームとか本とか買えない
	食べマルシェ
	N.A.
	若者向けの施設で遊ぶこと
	N.A.
	分からない
	よくあるマンガなどの中にあるデートスポットでのデート
	N.A.
	N.A.
「半々」 (n=15)	N.A.
	どこに行くのにも時間がかかるのであまり旅行をしたことがない
	N.A.
	大きな買い物、遊び
	大きい買い物
	N.A.
	N.A.
	わからない
	プリクラとかそーゆーのがないから今どきのJCJKみたいな事ができない。
	他の中学校との交流
	体を動かせる
	友達と遊ぶ場所が何もない。イオンすらない。どこで遊べってんだよ。
	N.A.
	N.A.
	N.A.
「嫌い」 (n=2)	N.A.
	N.A.

ところで内容としては、下川町の「良くないところ」に重なっていることが分かる。「消費文化へのアクセスが悪い」の2つのラベル「物を買う場所に乏しい」と「遊ぶ場所に乏しい」である。しかもそれが、具体的に上げられている（「映画をみる」、「スタバに行く」、「デートスポット」、「プリクラ」等々）。生徒が考える中学生（図表中の「JC」は「ありふ

れた女子中学生」を意味するだろう）なら触れることができるはずのものに触れることができないという意味で、「できないこと」に上げられたのであろう。

ここからはみ出すものもある。注目したいのは、「クラス替え」と「他の中学校との交流」である。共に、生徒間でのコミュニケーションをもっと持ちたいという要望と考えることができるかもしれない。

これらの内容を区別し、集約化したものが図表 1－15 である。

図表 1－15 下川町にいるからこそ「できないこと」を整理したもの

内容	度数・内訳(%)	
娯楽がない	度数	8
	内訳(%)	25
買い物・消費 ができない	度数	7
	内訳(%)	22
学校経験が ない	度数	2
	内訳(%)	6
運動する場 所がない	度数	2
	内訳(%)	6
分からない	度数	2
	内訳(%)	6
体験できない	度数	1
	内訳(%)	3
ある生活が できない	度数	1
	内訳(%)	3
N.A.	度数	11
	内訳(%)	34
合計(n=32)	度数	34
	内訳(%)	106

「娯楽がない」が 8 件（25%）、「買い物・消費ができない」が 7 件（22%）である。これに「学校経験がない」、「運動する場所がない」の 2 件（6%）が続く。

まず、「できること」の整理と対比して、学校の位置が低いことを指摘できる。すなわち、下川町にいるからこそ「できること」には学校が結びついたが、「できないこと」は娯楽・消費に結びついている。

次に、下川町にいるから「できること」同様に、地域（社会）に関わるものがない。「運動する場所がない」がかろうじてそれにあたると考えられる。ところで、下川町の「良くないところ」として「自治体行政問題」を指摘する生徒はいた。これをさらに自らの関わり方に結びつけ（「したい」の裏返しとしての「できない」という意味で）て、「できない」へと展開した生徒は残念ながらいない。

すなわち、ここでの「できないこと」は、「与えられていない」という意味での受動的な意味であると考えられる。極論の誹りは免れないとの指摘はあろうが、「できること」と「できないこと」と両方の検討からは、生徒はある意味「お客」であって、（未来の）「地域の

担い手」ではないのではないかと考えられる。その結果が、「できないこと」に端的に表れている。すなわち、「与えられても良いはずのものが」与えられていないことへの不満を、「できないこと」として言語化したのではないだろうか。

（7）生徒は下川町の産業をどのようにとらえているか

下川町は「森林未来都市」として、全国的に著名な存在である。森林・林業、林産業そしてエネルギー産業が一体となった森林総合産業を擁している。そのような地域社会の特徴について、どのように知っているのかを生徒に質問した。また、下川町の最大の産業である農業についても、同時に質問した。質問は、それぞれの産業の「印象」を尋ねる形である。それぞれを併記する形でまとめたのが、図表 1－16 である。具体的な記述は、代表例を後述するのみで割愛し、整理したものだけを掲げた。

図表 1－16 林業・林産業の印象と農業の印象

（林業・木材加工業）			（農業）		
内容	度数・内訳(%)		内容	度数・内訳(%)	
内容を答えたもの	度数	9	内容を答えたもの	度数	9
	内訳(%)	28		内訳(%)	28
下川にとって大事	度数	4	大変な仕事	度数	7
	内訳(%)	13		内訳(%)	22
高い評価を受けている	度数	4	大事な仕事	度数	3
	内訳(%)	13		内訳(%)	9
大変な仕事	度数	4	良い仕事	度数	3
	内訳(%)	13		内訳(%)	9
よく分からない	度数	1	評価が高い	度数	2
	内訳(%)	3		内訳(%)	6
その他	度数	2	N.A.	度数	10
	内訳(%)	6		内訳(%)	31
N.A.	度数	10	合計(n=32)	度数	34
	内訳(%)	31		内訳(%)	106
合計(n=32)	度数	34			
	内訳(%)	106			

最初に林業・林産業の印象について明らかにする。

「内容を答えたもの」が最も多かった（9件、28%）。例えば、「わりばしや家に使う建材をつくっている」や「木・森を利用する」という記述をまとめた。

これに3種類の評価、ないしは印象が続く。まず、「下川にとって大事」の4件（13%）である。例えば、「下川町のために頑張っていると思う」である。次に、「高い評価を受けている」の4件である。例えば、「とても良い物をつくっている」である。最後に、「大変な仕事」の4件である。例えば、「大変そう」である。

また「N.A.」が10件（31%）もある。全体として、生徒は林業・林産業について、踏み込んだ理解をもっていない様子がうかがえる。

次に農業の印象について明らかにする。

これも「内容を答えたもの」が最も多かった（9 件、28%）。例えば、「作物を育てている」である。特産のトマトの名称を書いた生徒は、4 人いた。

これに3種類の評価、ないしは印象が続く。「大変な仕事」は7 件（22%）である。例えば、「その時の状況によって収入などが変わる、大変」や「冬に収入がない、給料的に生活が大変、天候によって左右される」という具体的な内容を上げた生徒がいた。これ以外では、「大変そう」という漠然とした印象になる。さらに、「大事な仕事」と「良い仕事」がそれぞれ3 件（9%）あった。前者の例として「下川町を支えている二本の柱」を、後者の例として「品質のいいものがたくさんある」を上げておく。

農業の印象でも N.A.が 10 件（31%）もある。生徒は、若干の例外を除いて、踏み込んだ理解をもっていない様子が見える。

生徒が、下川町の誇るべき産業を踏み込んで知るのには難しい。下川町にいるからこそ「できること」の分析において、学校体験を軸として地域理解がなりたっていることを指摘した。このこととも関係しているのかもしれない。

（8）生徒にとっての地域の広がり

ところで、この報告書で考察している地域アイデンティティにおいて、「地域」という言葉の意味は、「地元」と言い換えることもできるだろう。その意味で、地域アイデンティティの核には「地元愛」があると考えることができる。

ところで生徒は、「地元だと思う範囲」をどのような大きさでとらえているのだろうか。幾つかのより小さな地区を基礎に地元をとらえている場合もあるだろうし、名寄市も地元の範囲に加わっている場合もあるだろう。まず、3 択で質問し、狭い範囲と広い範囲にのみ、具体的な範囲を尋ねた。それへの回答が図表 1－17 である。

図表 1－17 地元だと思う範囲

	度数(人)	内訳(%)
下川町よりも狭い範囲	1	3
ちょうど下川町	17	53
下川町よりも広い範囲	5	16
N.A.	9	28
計	32	100

現在の下川町は、中心部に比較的固まった形で町並みが存在している。そのために、「ちょうど下川町」と答えた生徒が半数を超えた（17 件、53%）。「下川町によも狭い範囲」と答えた生徒が 1 人（3%）である。具体的には、「上名寄」である。身近な実感がもてる地域が念頭にあるものと考えられる。そしてこの考え方の生徒は少ない。「下川町よりも広い範囲」と答えた生徒が 5 人（16%）いる。広い順から具体的に掲げると、「北海道内全て」、「上川管内」、「名寄あたりからもう地元感がある」、「上砂川」そして 1 件は記述なしとな

っている。「上砂川」は、家族的に縁のある場所なのであろう。また、3択に答えなかった（「N.A.」の）生徒が9人（28%）いたのは、このような問いを受けたことがない（考えたことがない）ことも関係している可能性がある。

（9）生徒にとっての他地域のイメージ——「住むならこのまち」と「遊ぶならこのまち」を素材に

続けて、生徒の地域についての価値付けを知るために2つの質問を行った。それが、「住むならこのまち」と「遊ぶならこのまち」の自由記述である。これも、複数書く生徒がいる一方で、空欄の生徒もいた。そのため、これまでと同様に複数回答的に扱い、場所別に整理する方法をとった。図表1-18がそれである。

図表1-18 「住むならこのまち」と「遊ぶならこのまち」（整理したもの）

（住むならこのまち）			（遊ぶならこのまち）		
	度数(人)	内訳(%)		度数	内訳(%)
下川町	12	38	下川町	1	3
名寄市・士別市	2	6	名寄市	4	13
旭川市	3	9	旭川市	10	31
札幌市	4	13	札幌市	9	28
東京都	2	6	東京都	5	16
抽象的基準のもの	4	13	本州のその他の地域	1	3
N.A.分らない	10	31	抽象的基準のもの	3	9
計	37	116	N.A.	7	22
			計	40	125

まず、「住むならこのまち」である。下川町から近い順序に並べてある。

最も多かったのが、「下川町」である（12人、38%）。最寄りの市である「名寄市」と「士別市」がそれぞれ1人いたが、まとめて「名寄市・士別市」としておく（6%）。「旭川市」は3人（9%）、「札幌市」は4人（13%）と徐々に多くなっている。「東京都」は2人（6%）と多くない。「抽象的な基準のもの」を上げた生徒は4人（13%）いる。例えば、「都会の近く」、「のんびりゆたかで静かな町」であった。「N.A.」が9人と「分からない」が1人であった（合わせて10人と考えた。31%）。

この「住むならこのまち」において、下川町を選択した生徒が下川町にどのような価値付けをしているのかを考える必要がある。それについては、考察に譲りたい。

次に、「遊ぶならこのまち」である。これも下川町から近い順序に並べてある。

まず「下川町」は1人（3%）と少ない。「名寄市」は4人（13%）で、「旭川市」が10人（31%）、「札幌市」が9人（28%）と続く。生徒が遊びたいと考えている場所、言い換えるなら「消費文化へのアクセスが良い」場所は「旭川市」と「札幌市」である。「消費文化へのアクセス」だけを考えるなら、「東京都」がもっと多くても良さそうだ（5人、16%）が、少し縁遠いのかもかもしれない。そのため、「旭川市」と「札幌市」が手頃であるという意

味で選択されているのではないかと推理した。そして、「N.A.」が7人（22%）であった。

生徒にとって、下川町は遊ぶ場所として選択されていない。異なる言い方をすれば、生徒の遊び方は、下川町にチューニングされていない。都市でのそれにチューニングされている。生徒は、下川町環境を遊びに生かす、あるいは下川町で遊ぶ方法を発見（創造）できていない。下川町の「良くないところ」で上げられた「消費文化へのアクセスが悪い」と、整合的なものとなっている。遊びは、消費文化を通じたものに席卷されている。

（10）小括——生徒の地域アイデンティティ

第3節が長くなったので、簡単なまとめをしておきたい。

生徒の下川町についての評価（3択）は「好き」と「半々」が相半ばし、「嫌い」はすくなくなかったことが分かった。この評価の詳細は下川町の「良いところ」と「良くないところ」の分析に譲るが、体験的な評価（「空気がきれい」）が重要であった。

生徒にとっての下川町の「良いところ」の理解は、「自然のめぐみ」があることが分かった。次いで、生活してはじめて分かる「生活が穏やか」にあった。他方で、生徒にとっての下川町の「良くないところ」の理解は、「消費文化へのアクセスが悪い」ところにあることが分かった。

生徒にとっての下川町は、学校を通した森林体験ができる場所として意識されていることが分かった。他方で、生徒にとっての下川町は、「消費文化へのアクセスが悪い」場所という評価が、そのまま不利な（できない）場所として意識されていることが分かった。

生徒にとっては、下川町の主要な2つの産業も学校を通して学んだ理解にとどまり、踏み込んだ理解をもっているのは、ごく一部の生徒にとどまった。

生徒の中で4割ほどが、下川町を住みたい場所ととらえていたが、遊ぶ場所としてはとらえきれないことが分かった。下川町が住む場所である場合でも、「消費文化へのアクセスが悪い」場所である。そのため遊ぶ場所は町外に求めることになっていた。

これらの検討から分かったことは、生徒の一部は生活してはじめて分かる「生活が穏やか」という価値をもってはいるものの、それも印象に止まっているのではないかということである。ただし、生徒の地域生活そのものを質問した項目は、今回の調査にはない。そのために、これは推論に止まっている。他の中学校で行った調査の場合は、家庭を越えた近隣との付き合いや、家庭と学校に止まらない社会関係の拡がりの有無と「生活が穏やか」価値との関連を考察した。その全体を「地域コミットメント」としてとらえ、「地域コミットメント」と地域アイデンティティとの関係を検討した。それが、ここではできていない。

しかしながら、生徒の産業の評価の抽象性や評価づけが学校における取り組み由来であること、さらには地域行事等が地域の「良さ」としてほとんど上がらないこと、そして地域への期待の裏返しとしての「不満」も上がらないこと（「消費文化へのアクセスが悪い」「都市に比べて劣っている」という不満は下川町にとっては克服しようのない）からも大きく外れた評価とはなっていないと考えている。すなわち、生徒は下川町で生活している

が、下川町に関わって行く主体という意味での「若き担い手」ではない。少し離れた位置から、下川町を都市との対比で見ているという印象をもつ。

第4節 生徒の将来志向

これ以降では、生徒の地域アイデンティティに関する質問の検討を離れ、将来に向けてどのようなイメージをもち、どのように展望しているのかについて、高校卒業後の進路、職業希望、「将来の居住地志向」、将来生活イメージの検討を行う。「将来の居住地志向」がここに入っているように、生徒にとっての将来志向は地域の移動を伴う。それは地元に残り続けることが稀であることを反映している。しかしながら、それを越えて地域アイデンティティは将来志向に強い影響を及ぼす。より正確に言うなら、地域アイデンティティと将来志向は相互参照的な関係にあるさえ言える。これは第2章において幾つかの角度から検討される。

(1) 生徒の進路志向と保護者の進路についてのアドバイス

下川町には高校がある。そのため、地元の高校に通うことができる。しかし、下川町の高校は専門高校（商業科）である。高校以降の進学を考えた場合、生徒にとって他市町の高校に通学する、あるいは高校進学を契機にして下川町を離れて他市町に転居するという選択肢が必然的に生じてくる。

2017年度の卒業生（22人）を例に、進学先を確認しておく。地元の下川商業高校に7人（32%）が進学した。最寄りの名寄市には高校が2校ある。普通科の名寄高校と幾つかの専門学科で構成された名寄産業高校である。前者に5人（23%）、後者に8人（36%）が進学した。これ以外の2人は、札幌市の高校に進学した。すなわち、およそ3分の1が地元の高校に進学し、6割が名寄市の高校に通学する。それ以外は少ない。近隣の名寄市へはバス等で通学している。バス便はあまり豊富とは言えないが、通学時間は30分程度であり、他の町村において自町村から通学する場合に比べて好条件と言えるだろう。前年度と比較すると、下川商業高校への進学者が少ない（前年度は52%）。

本調査の生徒は進路をどのように考えていたのだろうか。進路希望をまとめたのが図表1-19である。

図表1-19 中学校卒業後の進路希望

	度数	内訳(%)
下川の高校に進学	13	41
名寄の高校に進学	13	41
それ以外の高校に進学	5	16
就職	1	3
計	32	100

「下川の高校に進学」が 13 人（41%）で、「名寄の高校に進学」と同数である。「それ以外の高校に進学」が 5 人（16%）である。「就職」がひとりいる（3%）。例年とそれほど変わらないものと考えられる。

すなわち、中学校卒業段階で 8 割を超える生徒は自宅から学校に通学している。一部の生徒だけが下川町を離れる。

保護者が進路についてどのようなアドバイスをしてくれているのかについても尋ねた。それをまとめたのが図表 1－20 である。

図表 1－20 保護者からの進路アドバイス（職業別）

保護者の職業	内容
農家	行きたい高校に行けるように勉強を頑張ろう
	自由に自分で決めて
	保護者はいつも「あなたの好きな道にいきなさい」といってくれます。
自営業	自分の好きなところに行ってね
会社員	給料が安定している職につけ
病院・医療関係	うかってからの後が大事だと言われます

生徒に尋ねた質問であるため、実際は保護者が進路についてのアドバイスをしているかどうかは分からない。生徒が内容も含めて「されている」と思っている場合の数字である。そのためか、6 人（19%）と 2 割にとどかない。

保護者の職業別に並べてみた。差があるかもしれない。保護者の職業が農家である場合（4 人中 3 人が回答している）や自営業（5 人中 1 人が回答している）である場合には、「後継」の問題が家の問題（家産の相続）として出てくる。それは生徒の進路にも関わるので、保護者としてどのような態度で望むのかを明らかにしておく必要がある。その点、学校関係の成否（受験）が問題となる「会社員」（8 人中 1 人が回答している）や「公務員」（11 人中誰も回答していない）とは異なることは明白である。

内容的には、生徒の自己決定の自覚を高める（自分で決める）形で励ましていると思われる。「希望」をもつことを重視していると言っても良い。そこからはみ出すのは、「給料が安定している職につけ」と「受かってからの後が大事」となる。一時代前のような、社会との関係での進路アドバイス、「社会に貢献すること」というようなものはここにはない。子弟の自己中心的な将来志向を促進するものとなっている。新自由主義の文化（受動的な意味としての「自己責任」）もここに及んでいる可能性もある。

（2）生徒の「将来の居住地志向」

高校段階では、多くの生徒が下川町の自宅から通学する。しかし、もっと長い期間で考えた場合、生徒は地域との関係をどのように考えているのだろうか。

現代の日本においては「地方消滅」も喧伝され⁵、地域格差は大きい。農家のような家産がない場合、下川町＝地元で人生を完結させる難しい。また、「地方創生」を人間の「周流」（言語では circulation）⁶の問題として理解するなら、注目しなければならないのは「地域から流出する」（都市への「I ターン」）だけではなく、「地域への再流入」（地域への「U ターン」）を考慮すべきである⁷。すなわち人生の展望を分析的な観点から問題とするなら、地域移動という観点からも捉える必要がある。

図表 1－2 1 「将来の居住地志向」とその理由

3択	理由
ずっと下川に残る(n=2)	下川からでるといっても行くところもないから。
	下川町が住みやすいから。
いったん下川を出るが戻ってくる(n=10)	できれば下川に店を開きたいから
	下川が好きだから、地元だから
	N.A.
	将来のことがあるから
	職につく関係があるから
	進路はあまり決まっていけど、きっと戻ってくると思うから。
	田舎だから他の地域でくらしたい。
	N.A.
	下川町は良い町だし、貢献したいから。
下川を出て戻ってこない(n=15)	とくに理由はないです。
	高校から下川町をはなれる予定なのでそのままはなれるままだと思います
	N.A.
	自分が望んでいることができないから
	夢をかなえるためには下川にいられないから
	やりたい職業の仕事がなさそう
	進路、仕事の
	長期の休みに実家に帰るから
	札幌で美容師、保育士、味の素トレーニングセンターで栄養士、スキージャンプを続ける、どれか。
	N.A.
	たぶん下川から出ると思うけどたまに帰る
	そんな気がするから。
	下川町から出た生活も便利だと思うから。
	下川町以外の町にもすんでみたい
	将来、東京に行きたいけど、もしかしたら下川に残るかも。
未定・N.A.(n=5)	下川にいる必要がないから
	N.A.
	まだわからない
	N.A.
	N.A.
	わかりません

⁵ 代表的なものとして、元総務大臣の増田寛也の『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』（中公新書、2014年）を上げることができる。

⁶ イタリアの社会学者 V.パレートが用いた言葉で、特定階層（エリート）の人生の中での移動を問題にした。

⁷ 下川町がこの点でめざましい成功を治めていることは言うまでもない。

このことを把握するために、多少強引な3択ではあるが「ずっと下川に残る」、「いったん下川を出るが戻ってくる」、「下川を出てもどってこない」のから、生徒に選択してもらった。またその理由も聞いた。前頁の図表1－21には3択の結果と選択の理由をまとめた。さらに理由の中でも、下川町に残る場合の理由を太字にした。

3択が無回答であった場合や、3択は無回答であったが理由に「未定」や「分かりません」があった場合は、「未定・N.A.」にまとめた。

まず3択の全体的な趨勢について述べる。「ずっと下川に残る」は2人(6%)であった。「いったん下川を出るが戻ってくる」が10人(31%)で、「下川を出て戻ってこない」が15人(47%)で最多となった。「未定・N.A.」は5人(16%)である。

生徒は、約半数が「下川を出て戻ってこない」と考えている。しかし、「いったん下川を出るが戻ってくる」というUターンを志向する生徒も3割いる。「ずっと下川に残る」は少ない。「未定・N.A.」も無視できない数いる。

また、それぞれの「理由」については整理が難しいものが混在し、分析は十分できない。直接的な理由を答えた場合は簡単である。しかし、例えば「いったん下川を出るが戻ってくる」を選択した場合には、「いったん下川を出る」理由を答えた場合や、「戻ってくる」理由を答えた場合が混じる。さらには、「いったん下川を出るが戻ってくる」を選択していても、本当の気持ちとしては「田舎だから他の地域でくらしたい」と答えた生徒もいる。そのために、ここではざっくりとした印象を明らかにすることに止まる。

ところで下川町に「残る」理由は、消極的なもの、積極的なものの両方がある。ここでの「住みやすい」とは、どのようなことを指すのかを知りたいところである。

下川町を「出る」理由は、「将来のことを考えて」、「仕事のことを考えて」、「田舎から出たい」、「特別の理由はない」等からなる。大括りにと分類すると、進路を考えた場合の判断(言わば「機能的な判断」の場合)と、田舎への忌避に都会への憧れが混じった場合の判断(言わば「感情的な判断」の場合)の2つから構成されていると考えられる。さらに、「いったん下川を出るが戻ってくる」の「出る」理由と「下川を出て戻ってこない」の「出る」理由に、大きな違いはない(「機能的な判断」と「感情的な判断」)ように思う。

「いったん下川を出るが戻ってくる」の「戻る」理由は、「地元」、「好きだから」という愛着(「感情的な判断」)と共に「住みやすい」、「良い町」という他の場所と比較しての評価、さらに「店を開きたい」、「貢献したい」という可能性を求める場合が加わる。地域社会へのコミットメントを志向する(「貢献したい」)場合は目を引く。

(3) 生徒の職業志向

生徒にとって将来を考えるツール(道具)として重要なものの1つが職業である。生徒は、将来の職業をどのように考えているのだろうか。ここでは、「なりたい職業」の有無と具体的な職業という2段階を区別して検討する。

まず、「なりたい職業」の有無をまとめたのが図表1－22である。

図表 1－2 2 「なりたい職業」の有無

	度数(人)	内訳(%)
あり	19	59
決まっていない・N.A.等	13	41
計	32	100

※ 森林環境教育が進路の参考になったと答えた中学3年生は将来なりたい職業の有無で「あり」と答えている。

生徒の将来への視野は、眼前の高校入試に止まるわけではない。中学校においても、将来を見据える「キャリア教育」が取り組まれている。それでも、「なりたい職業」は何かと質問されて答えることができた生徒は、19 人（59%）である。高卒後の進路が就職の場合の職業選択は、「学校紹介就職」を頼りにしつつ、雇用の良否で選択することを意味するだろう。さらに「進路未定」の場合は、当然、職業は考えにくい⁸。図表 1－2 3 は、「高卒後の進路」と「なりたい職業」の有無のクロス表である。

図表 1－2 3 「高校卒業後の進路」×「なりたい職業」の有無

		将来なりたい職業の有無		合計
		ある	ない・N.A.	
進学	度数(人)	7	2	9
	内訳(%)	78	22	100
就職	度数(人)	3	3	6
	内訳(%)	50	50	100
未定・N.A.等	度数(人)	9	8	17
	内訳(%)	53	47	100
計	度数(人)	19	13	32
	内訳(%)	59	41	100

生徒が高卒後の進学を見据えることができた場合には、「なりたい職業」に「ある」と答えやすいことが分かる。

それでは具体的な職業はどのようなものだろうか。生徒は、様々な職業を記述してくれた。しかしそのままでは分析しにくい。傾向も分からない。そのため、厚生労働省の職業分類（大分類）を参考にして分類してみた。それが次頁の図表 1－2 4 である。生徒の記述した職業が複数あった場合、同じ大分類に入る場合はひとつとカウントした。異なる大

⁸ 日本の場合には、ヨーロッパ諸国と比較して職業概念が社会的に確立できず、実質的には特定の企業への所属と、そこでフレキシブルに職務を重ねることが当たり前であった。しかしながら、1990 年代以降はいわゆる「正規雇用」ではない、非正規雇用（仕事内容としては労働力という意味でのハンズ）が格段に増えたことは言うまでもない。このことを踏まえるなら、生徒にとっての職業選択はイメージによる（流行りの）職業（カタカナ職業）を答えるか、先輩や家族等で見知った職業を答えるか、学校によるキャリア教育に影響されて自分の好きな（興味がある）職業を答えるか、非常にシビア理解をもって雇用形態（正規／非正規）を答えるか、の何れかになると考えられる。どれにしても、学校生活の延長線上に職業選択をすることは、職業訓練を軽視する日本においては困難である。

分類になる場合は複数回答として扱った。

図表 1－24 「なりたい職業」

職業分類	度数(人)	内訳(%)
A. 管理的職業	0	0
B. 専門・技術的職業	10	53
C. 事務的職業	2	11
D. 販売の職業	2	11
E. サービスの職業	6	32
F. 保安の職業	0	0
G. 農林漁業の職業	1	5
H. 生産工程の職業	2	11
I. 輸送・機械運転の職業	0	0
J. 建設・採掘の職業	0	0
K. 運搬・清掃・包装等の職業	0	0
計(回答した生徒数19人)	23	121

「なりたい職業」が「ある」と回答した生徒は19人であった。これを母数として、それぞれの選択された職業毎の選択数（度数）を除したのが、内訳(%)である。

最も多く選択されたのは、「B.専門的・技術的職業」の10人（53%）である。半数を越えている。これに继ぐのが「E.サービスの職業」の6人（32%）である。以下、「C.事務的職業」、「D.販売の職業」、「H.生産工程の職業」の2人（6%）となる。

すなわち、「B.専門的・技術的職業」とそれ以外とに大別されると考えて良い。そして、高校の進路やそれ以降の進学は、この職業選択（「B.専門的・技術的職業」か否か）と関連している。

気がついていただけると思うが、生徒の職業希望は、職業分類（大分類）に万遍なく分布しているわけではない。この偏りには2つの要因があると考えられる。

ひとつは、「なりたい」と考えることが可能な職業が限定されているという要因である。もうひとつは、何よりもその職業に事実上就くことが困難な職業があるという要因である。後者のみ補足しておく。

例えば、「A.管理的職業」は会社組織に所属することが前提に成る場合、職業キャリアの最終盤で就くことが可能な職業である。初職から就くことは、資産家の子弟でもない限りまずない。違う要因であるが「G.農林漁業の職業」も、出身家族との関係で決まってくる。雇用労働者の子弟が農業をすることは、現在では農業法人に雇用されるという可能性もないわけではないが、それほど多い雇用先ではないだろう。漁業も同様である。その結果、高卒労働市場や大卒労働市場に登場することが珍しい職業に就きたいと考えることは、稀になる。

ところで、生徒の職業希望の多くを占めた「B.専門的・技術的職業」と「E.サービスの職業」において、具体的に列举された職業名を補足しておく。

前者は、「教師」「保育士」等の教員、「薬剤師」「看護師」等の医療関係職業、「栄養士」「管理栄養士」等の保健医療関係専門職からなっている。養成機関を経由し、資格を所持することが前提となる職業である。後者は、「パティシエール」「シェフ」等の飲食物調理の仕事、「美容師」「ネイリスト」等の資格をもった生活衛生サービスの仕事である。

生徒は、独立性の高い職業をイメージして職業希望を考えていることが分かる。すなわち、会社等の組織に雇用され、柔軟に働く雇用労働者一般はイメージしにくいのである。「販売の職業」や資格が求められない「サービスの職業」、そして「生産工程の職業」を選択した生徒は少ない。以前であれば女子の職業として有力であった「事務的職業」に就きがいを知っている可能性もある。

（４）生徒の「将来生活志向」

生徒の将来志向を考察する最後に、希望する将来生活について検討する。これも回答は自由記述で求めた。生徒が将来の生活を考える場合に、思考を制約する要因は様々あると考えられるが、ここでは男女差（結婚と出産、それに伴う労働への影響）のみに注目して、具体的な内容を掲げてみた。次頁の図表１－２５は男女別に「将来生活志向」を整理したものである。

これも考えにくかったのか「N.A.」が多い（５名、１６％）。それ以外をざっと見てみよう。

生活の領域を大きく「仕事」と「仕事外」に大別して考えるとすると、ほとんどが仕事外の内容となっているように思える。極端な例としては、「ゲームしながらたまに友だちに会い楽しく過ごす」を上げることができる。もはや、仕事をしなければ食べて行けないことも念頭にない将来志向である。ここまでになると生徒にとって「将来」とは、「思い描く」ものではなく、ましてや「創る」ものではさらさらなく、現在の生活の延長線上に「やってくる」ものとして想像されているのではないかと考えてしまう。「のんびんだらりとした生活（１人暮らし）」と書いてしまうのはなぜかが気になる。分析を本線に戻そう。

仕事に関するものとしては、「好きな仕事ができる生活」、「ちゃんと仕事がしたい」が、かろうじて「充実した生活」⁹が上がるぐらいだろう。

また、生活全体についてのぼんやりとした印象（輪郭）を答えた生徒も多い。例えば、「安定した生活」、「豊かで安心できる」生活、「楽しい生活」等である。すなわち、生徒の将来生活は、仕事のことイメージすることはなく、ぼんやりとしたイメージから構成されていると考えることができる。図表１－２０で「保護者からの進路アドバイス（職業別）」を検討した際にも指摘したが、保護者（家族）の影響は乏しい。家族との生活から構築されるような生活のイメージは生徒にはなさそうである。

⁹ 「充実」の意味には、仕事が含まれているに違いないと考えた。しかしもしかしたら、趣味的な充実や家族生活の充実も考えられないわけではない。そのため、読み込み過ぎかもしれない。

図表 1－25 希望する将来の生活

	内容
男子生徒 (16人)	ゲームしながらたまに友達に会い楽しく話す
	安定した生活
	N.A.
	豊かで安心できる
	安定した生活がしたいです
	しゆみに少しだけでもお金をつかえるぐらいの生活
	N.A.
	N.A.
	のんびりだらりとした生活(1人暮らし)
	充実した生活
	楽しい生活
	楽しい生活
	安定した生活
	普通の生活
	1人でゆったりとした暮らしがしたい。
	幸せな生活
女子生徒 (16人)	普通の生活
	幸せに
	ふつう+猫がいる生活
	幸せでたのしい生活
	20代で結婚したい！
	結婚したい
	楽しくて、安定している生活
	N.A.
	最高にすてきな人と結婚して、かわいらしいbabyを産んで産んで幸せな家庭を築いて生活したい！！
	収入が安定している、好きな仕事ができる生活
	楽しい生活、ちゃんと仕事をしたい
	すきな人と結婚して幸せな家庭を築きたい。
	充実した生活
	お金に困らない生活
	家族みんな、なかが良ければなんでもいいです。
	N.A.

よりはっきりと内容を確認するために、整理してみる。それが次頁の図表 1－26 である。これも内容の質的な差異に注目して区別し、記述間で共通するものをまとめて作表した。要素とカテゴリの2段階に区別している。内容を列挙していく。

第1に、要素としては「安定・安心の生活」(4人、13%)、「お金に困らない生活」(同前)、「普通の生活」(3人、9%)として集約することができると考えた。これらをさらに集約して、「人並みの暮らし志向」と命名したい。

第2に、要素としては「幸福な生活」(6人、19%)、「楽しい生活」(5人、16%)として集約することができると考えた。これらをさらに集約して、「幸せな生活志向」と命名したい。

第3に、要素としては「マイペース」(2人、6%)、「独り暮らし」(同前)、「ゲームをする」(1人、3%。以下同様)、「友達と一緒に」そして「猫と一緒に」として集約することができ

ると考えた。とは言っても、1 人のみで集約とは言えないものも含んでいる。これらを「気ままな生活志向」と命名したい。

図表 1－26 「将来生活志向」

カテゴリ	要素	度数(人)	内訳(%)
人並みの暮らし志向	安定・安心の生活	4	13
	お金に困らない生活	4	13
	普通の生活	3	9
幸せな生活志向	幸福な生活	6	19
	楽しい生活	5	16
気ままな生活志向	マイペース	2	6
	独り暮らし	2	6
	ゲームをする	1	3
	友達と一緒に	1	3
	猫と一緒に	1	3
女性役割を果たす生活志向	結婚	4	13
	出産	1	3
充実した生活志向	充実した生活	2	6
	仕事に注力	2	6
計		38	141

※ この小計は重複をカウントせずそのまま計上したものである。

第4に、要素としては「結婚」（4人、13%）、「出産」（1人、3%）として集約することができると思った。これらを「女性役割を果たす生活志向」と命名したい。

最後に、要素としては「充実した生活」（2人、6%）と「仕事に注力」（同前）として集約することができると思った。これらを「充実した生活志向」と命名したい。

ざっくりとまとめた前述の印象は、ほぼあてはまっていることがわかる。数的には、「人並みの暮らし志向」と「幸せな生活志向」が多い。これに、「気ままな生活志向」とちょうど逆の意味をもっているかのような「女性役割を果たす生活志向」が加わる。「充実した生活志向」は少ない。「充実した生活志向」が、専門職中心の職業志向と矛盾している印象をもつ。職業志向はある程度明確にはなっているのだが、実質的に「仮」（鍵括弧が付いているというような、暫定的な意味しかない）である場合や、職業志向と「将来生活志向」が結びつかない場合が考えられる。その意味で将来志向全体は、非常に未分化である可能性が考えられる。

（5）小活——生徒の将来志向

第4節も長くなったので、簡単なまとめをしておきたい。

生徒の中学校卒業後の進路は、自宅から通学することを選択する場合がほとんどである。地元の高校（下川商業高校）に行く生徒と最寄りの名寄市の高校（名寄高校、名寄産業高校）に行く生徒は、ほぼ同数となる。この調査の生徒たちは、例年とそれほど変わらない。

生徒が将来志向を考える上で、保護者からの進路アドバイスはほとんどない。アドバイ

スするかどうかには、保護者の職業が関係している可能性があった。また、アドバイスする場合でも、生徒の自己中心的な希望を促進したアドバイスにとどまり、職業の社会的な意味に関するものは皆無である。生徒は将来志向を学校（キャリア教育）と回り（先輩や同学年の生徒）をみて考えている。

生徒は、「将来の居住地志向」をしっかりと判断している。これは職業志向がもつ生徒が6割に止まることと、ほとんどの生徒の「将来生活志向」が未分化であることと対比をみせる。「下川を出て戻ってこない」は約半数を占める。「いったん下川を出るが戻ってくる」が3割で、「ずっと下川に残る」は少ない。

そして、「下川を出る」理由は、「下川を出て戻ってこない」場合も「いったん下川を出る」場合も大差ないと考えられる。大括りすると、「機能的な判断」と「感情的な判断」の2つに大別される。前者は、「夢をかなえる」、「将来のことを考えて」、「仕事のことを考えて」等である。後者は「田舎からでたい」「下川町以外の町にもすんでみたい」等である。ここに下川町の「良くないところ」や下川町にいるからこそ「できないこと」にでてきた「消費文化へのアクセスが悪い」という評価は、ぼんやりと関わっている。ただし、強くはないと思われる。

他方で「下川に戻ってくる」理由は、「地元」だから、「好きだから」という愛着（「感情的な判断」）と共に、生活価値（「住みやすい」）や起業志向、そして（下川町に）「貢献したい」が上げられている。

生徒の職業志向は、職業名を考える程度に分化した生徒が6割ほどいる。具体的には「B.専門的・技術的職業」に偏りをみせる。生徒が上げた職業名の検討からは、独立性の高い職業がイメージされていることが分かった。これと高卒後の進学志向が結びついているものと考えられる。そして「B.専門的・技術的職業」に偏っているからこそ、下川町に戻って来ることを考えた場合に、その職業の雇用がないことがネックになる。すなわち、職業志向における「B.専門的・技術的職業」への偏りは、「下川を出て戻ってこない」という「将来の居住地志向」と相補的である。

さらに、生徒の「将来生活志向」は非常にぼんやりしている。そして、職業志向（「B.専門的・技術的職業」に偏りを見せていた）と結びつかない。

これら全体は、以下のように解釈できると考えた。

生徒の将来志向は、多段階で構築されていると考えられる。はっきりしているのは、「将来の居住地志向」である。端的には「夢をかなえるためには下川にいることはできない」という意味付けである。

これと「B.専門的・技術的職業」に偏る職業志向が、相補的な形でカップリングする。ここには、高校卒業以降の進学先（職業系の大学や専門学校）も関わっていると考えられる。しかし、大学卒業後の進路として、普通に見られる「（大）企業で働きたい」等の希望は皆無（これに近い選好と言えるのは、「公務員」が1人いるのみ）で、資格所持が前提の独立性の高い職業に集中している（ここには、男女差の問題も位置づく）点は特徴的であ

ると考えられる。さらに指摘しておくならば、地域アイデンティティの考察において指摘できた「消費文化へのアクセスが悪い」ことからくる下川町の不利は、あまり顔を出していないことは重要である。

そして、「将来生活志向」は非常にぼんやりとし、職業志向と関わらない。その意味で、偏っていた職業志向も暫定的な性格をもっている可能性を指摘できる。すなわち、「将来の居住地志向」が影響した形で、職業志向が暫定的に形成され、それゆえに「将来生活志向」が取り残された形で漠然化していると理解できるのではないだろうか。

このような意味で、「将来の居住地志向」が生徒の将来志向を主導している。

第2章 考察

第1節 はじめに——考察のテーマ（浅川）

私たちは、この第2章において中学3年生（以下、「生徒」と呼称する）の地域（下川町）について考え方の特徴と、考え方の構造（小さな部分からなりたつ全体）を探りたいと考えている。第1章では生徒調査結果の概要を明らかにした。それを幾つかのテーマを立てて論じる形になる。第2章では、第1章で自由記述を分析する際に、区別し、集約化することで作成したカテゴリ（ラベルや要素も含めて）を素材に、カテゴリ間の関係を問うことを通じて、考察を深めて行く。

考察を深めるテーマは、「地域（下川町）理解の構造」、「地域（下川町）アイデンティティの特徴——他の町村との比較」、「将来志向の構造——男女差を中心に」である。

第2節 生徒の地域（下川町）理解の構造（浅川）

第2章第2節以降での分析の方法について、第1章と異なる点を補足する。それは、区別し集約化の際の度数（人）の計算の仕方である。

これだけでは何のことか分からないので、第1章の冒頭の説明と重複している部分がある冗長な説明となってしまうが、調査票の設計意図から再び説明しなおしたい。

本報告書の元になった調査は、地域アイデンティティに関する特定の仮説から質問項目を作成し、計量的な選択肢（例えば1～5）を回答してもらう形をとっていない。生半かな仮説は、生徒が考えることに先入観を持ち込み、歪ませると考えたからである。そのため、端的な質問項目に自由記述で回答してもらう形をとった。

自由記述の羅列は、生徒のリアルな言葉を示す点では意味がある。しかし、自由記述の単なる羅列だけでは、生徒のリアリティ（断片としての言葉の元になっているもの）を明らかにすることにはならない。さらに、他の生徒との比較や生徒集団としての全体像を明らかにする上で、明らかに不十分である。そのため、自由記述の内容を質的に区別し、集約化することで抽象的な水準において理解するだけではなく、量的な把握を試みた。この区別し、集約化の際には、私たちの解釈が入っており、全くの客観性に基づくという訳ではない。しかしながら、地域アイデンティティに関するこれまでの調査研究において蓄積された解釈はここでもそれほどの違和感なく活用できたと考えている。しかしながら、その結果と妥当性について批判を請うものである。

以下で自由記述の手続きを記述する。自由記述は、次の2段階で区別し、集約化することで理解され、量的に把握される。

まず、自由記述中の言葉を区別し、整理することで（複数の）要素を集約する段階がある。次に、それらを比較し、抽象のレベルを上げ、ラベルやカテゴリを作成する段階がある。

第1章の分析では、要素－ラベル－カテゴリ等の系列は作成した。しかし、それぞれの量を問題とする際は、要素の単純集計にとどまった。第2章の分析では、それぞれの関係を検討したい。そのために、ラベルとカテゴリの量を確定しなければならない。ラベル毎の量を確定するためには、要素の数え方で重複を除かなければならない。カテゴリ毎の量を確定するためには、ラベルの数え方で重複を除かなければならない。言葉で書くと複雑になるので、具体例を上げて説明する。

要素からラベルを作成する際には、ひとりの生徒が回答した要素の質的な差異に注目する。同じ要素がどうかの吟味である。同じ要素の場合は、ひとつのラベルにたいしての肯定／否定という意味での、ひとつの回答として考える。すなわち重複を除外して度数を算出し直すわけである。

例えば、図表1－9（15頁）を例に説明してみよう。「森林の豊かさ」（12件）、「空気がきれい」（12件）、「自然の豊かさ」（7件）という要素から「豊かな自然」というラベルを

作成した。ある生徒が「森林の豊かさ」と「空気がきれい」の両方の要素を記述していた場合、「豊かな自然」というラベルについての回答の有／無は、「森林の豊かさ」と「空気がきれい」の単純加算した 2 件ではない。重複が生じている。そのため、ラベルについては「有」のみ問題となり、同数（件）としては 1 件として算出し直されなければならない。

このような再計算を行った。例えば、ラベル「豊かな自然」の度数は、要素「森林の豊かさ」・「空気がきれい」・「自然の豊かさ」のそれぞれの度数を単純加算した 31 件ではなく、「豊かな自然」というラベルを支持した生徒数で再計算された 25 件となる。重複が排除されたわけだ。

これはラベルからカテゴリを作成した時でも同じである。それぞれのラベルやカテゴリを生徒が支持したかどうか注目して、重複が除かれて、度数の再計算が行われる。以下の分析では、その作業が追加されることで、クロス集計されている。そのため、第 1 章の度数と異なるところが多々ある。

生徒の地域アイデンティティについては第 1 章第 3 節において明らかにしてきた。27 頁の「小括」でそれをまとめている。

しかしながら、まだざっくりとした全体的な傾向をつかんだに過ぎない。例えば、下川町の「良いところ」として生徒が考えたこと（要素－ラベル－カテゴリの系列）は、どのような関係にあるのかは、全く分からない。どれとどれが近く、あるいはどれとどれが対立しているか、そのことを含めた全体構造はどうなっているのだろうか。考察を深めて行かなければならない。

前述した再計算は、このラベルやカテゴリ間の関係を検討できるようにするための作業である。

これ以降では、生徒の地域理解の構造を明らかにする。具体的には、下川町の「良いところ」と「良くないところ」それぞれの構造（内部の関係性）やこの 2 つの関係である。しかし、自由記述の内容を、要素－ラベル－カテゴリと質的に区別し、集約化作業を行ったが、全体の生徒数の関係（具体的に言えば数が少ない）で、評価が難しいものが多い。余りにも生徒数が少ない場合には、それをもって相互関係を評価できない。そのために、生徒数が多いもの、支持が多いものを中心にして分析することにする。この方針から、中心的な検討対象はカテゴリ間の関係の分析になる。これに加えて、生徒数の多い一部のラベルや要素も検討の対象にした。

（1）生徒の下川町のとらえ方の特徴

①下川町の「良いところ」カテゴリ間の関係

下川町の「良いところ」には、4 つのカテゴリがあった（図表 1－9 参照）。それぞれ「自然のめぐみ」（26 件）、「林業が盛ん」（1 件）、「生活が穏やか」（10 件）そして「地域の取り組みがある」（6 件）である。それぞれを支持する度数は、大きく違っていた。

カテゴリ間の関係は、2 行×2 列のクロス集計表を作成して分析を試みる。しかし、前述

したように、統計分析において度数の小さい場合の結果の解釈は難しい。なぜなら、度数が小さいと、当然 1 件 1 件の比重が重くなり、全体としての傾向が左右されてしまうからである。

そのため、2つの対策をとる。まず、主要なカテゴリ間の関係のみを検討対象とする。しかしこの限定をしても、「独立性の検定（カイ二乗検定）」が可能となる条件（標本の大きさ）が満たせる場合はほぼなかった。次に、2行×2列のクロス集計表においては、この条件で活用できるフィッシャーの正確確率検定の結果を利用する（図表の下部に、結果を記載した）。しかしそれでも、余りにも度数が少ない場合の信頼性には、問題がないとは言えないと考える。そのため解釈では参考程度にとどめ、主にはクロス集計表から読み取る形で説明する。

ところで、下川町の「良いところ」カテゴリ間で注目するのは、度数の多い「自然のめぐみ」カテゴリ（26件）と「生活が穏やか」カテゴリ（10件）の2つである。クロス集計表は図表2-2-1である。

図表2-2-1 （良いところ）「自然のめぐみ」カテゴリ
×（良いところ）「生活が穏やか」カテゴリ

			「生活が穏やか」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	4	22	26
		内訳(%)	15	85	100
	非該当	度数(人)	6	0	6
		内訳(%)	100	0	100
合計		度数(人)	10	22	32
		内訳(%)	31	69	100

(Fisherの直接法)正確有意確率(両側)=.000

この図表から「自然のめぐみ」カテゴリの該当／非該当（下川町の「良いところ」として、「自然のめぐみ」があてはまると考えるのか／考えないのか。以下同様）は、「生活が穏やか」カテゴリの該当／非該当と関係していると考えられる。関係は負のそれである。「自然のめぐみ」カテゴリに対して、「生活が穏やか」カテゴリは対立する意味をもつと考えられる。すなわち、それぞれのカテゴリは下川町の「良いところ」としては、対立する価値を表している。誇張した言い方をするなら、下川町の良さとして「自然のめぐみ」という環境面に注目する場合は、「生活が穏やか」という地域社会の質には注目しない傾向にある。逆の言い方もできる。「生活が穏やか」という地域社会の質に注目する場合は、「自然のめぐみ」という環境面には注目しない傾向にある。この点が、生徒が下川町の「良さ」考える上で機軸となる区別となっている。

「生活が穏やか」カテゴリと「地域の取り組みがある」カテゴリ間の関係についてもクロス集計表を作成し検討したが、両者には関係がなかった（図表は割愛する）。

この検討から、下川町の「良いところ」を構成するカテゴリ間の関係は、「自然のめぐみ」カテゴリと「生活が穏やか」カテゴリの関係を機軸に構成されていることが分かった。

②下川町の「良くないところ」カテゴリ間・ラベル間の関係

下川町の「良くないところ」には5つのカテゴリがあった（図表1－11、18頁参照）。それぞれ「消費文化へのアクセスが悪い」（20件）、「都市に比べて劣っている」（3件）、「自然が厳しい」（4件）、「自治体行政問題」（9件）、そして「特になし」（1件）である。それぞれの度数は大きく違う。しかも、「消費文化へのアクセスが悪い」に集中しすぎである。

この「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリは、2つのラベル「物を買う場所に乏しい」と「遊ぶ場所に乏しい」から構成されていた。それぞれは10件ずつと大きく、内容的にも異なる可能性もある（過剰な集約だとは考えないが、度数が多いため弁別して検討可能である）。そのため、まずこの2つのラベルの関係を検討し（図表2－2－2）、その後次に度数の多い「自治体行政問題」カテゴリとの関係を検討する。

図表2－2－2 （良くないところ）「物を買う場所に乏しい」ラベル
×（良くないところ）「遊ぶ場所に乏しい」ラベル

			「遊ぶ場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「物を買う場所に乏しい」	該当	度数(人)	0	10	10
		内訳(%)	0	100	100
	非該当	度数(人)	10	10	20
		内訳(%)	50	50	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisherの直接法)正確有意確率(両側)=.011

この図表から「物を買う場所に乏しい」ラベルの該当／非該当は、「遊ぶ場所に乏しい」ラベルの該当／非該当に関係していると考えられる。関係は負のそれである。「物を買う場所に乏しい」ラベルと「遊ぶ場所に乏しい」ラベルは対立する意味をもつと考えられる。すなわち、それぞれのカテゴリは下川町の「良くないところ」としては、対立する価値を表している。誇張した言い方をするなら、下川町の「良くないところ」として、「物を買う場所」に注目する場合は、「遊ぶ場所」には注目しない傾向にある。

この結果から、「消費文化へのアクセスが悪い」というカテゴリは、「消費文化」とまとめることができるにしても、方向性の異なる2つの内容もっていると理解できる。しかしながら、他の例えば、下川町の「良いところ」との関係を検討する際は、ひとつのものの2つの異なる側面として理解可能かもしれない。そのため、ひとつのカテゴリとして扱う場合と、2つのラベルとして扱う場合の双方をにらみながら、注意深く扱うことにしたい。

さらに、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの関係

を検討する（図表 2－2－3）。

図表 2－2－3 （良くないところ）「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ
×（良くないところ）「自治体行政問題」カテゴリ

			「自治体行政問題」		合計
			該当	非該当	
「消費文化 へのアクセ スが悪い」	該当	度数(人)	3	17	20
		内訳(%)	15	85	100
	非該当	度数(人)	6	4	10
		内訳(%)	60	40	100
合計		度数(人)	9	21	30
		内訳(%)	30	70	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.030

この図表から「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの該当／非該当は、「自治体行政問題」カテゴリの該当／非該当に関係していると考えられる。関係は、負のそれである。「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリは対立する意味をもつと考えられる。すなわち、それぞれのカテゴリは、下川町の「良くないところ」としては、対立する価値を表している。

誇張した言い方が許されるなら、下川町の「良くないところ」として「消費文化へのアクセスの悪い」（場所）という点に注目する場合は、「自治体行政問題」を抱えた地域とは考えない傾向にある。かなりおもしろい関係だと言えるだろう。逆の言い方をするなら、「自治体行政問題」（の良くなさ）にまで目が行き届く生徒は、「消費文化へのアクセスが悪い」というような表面的（？）なことを良くないとは思わないということであるだろう。すなわち、「消費文化へのアクセスが悪い」が表面的な批判であるとするなら、「自治体行政問題」への批判は踏み込んだ批判である。両者はくい違う。

「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを 2 つのラベルに戻して、それぞれのラベル毎に「自治体行政問題」のクロス表を作成したが、大差ない内容（カテゴリの場合と同様の傾向）であった。

この検討から、下川町の「良くないところ」を構成するカテゴリ間の関係は、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの対立関係を機軸に構成されていることが分かった。

続けて、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「都市に比べて劣っている」カテゴリの関係を検討する。「都市に比べて劣っている」カテゴリは度数が 3 件と少ない。そのため、参考程度の意味しかないが、考察しておこう（次頁の図表 2－2－4）。

図表 2-2-4 (良くないところ)「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ
× (良くないところ)「都市に比べて劣っている」カテゴリ

			「都市に比べて劣っている」		合計
			該当	非該当	
「消費文化へのアクセスが悪い」	該当	度数(人)	0	20	20
		内訳(%)	0	100	100
	非該当	度数(人)	3	7	10
		内訳(%)	30	70	100
合計		度数(人)	3	27	30
		内訳(%)	10	90	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側) = .030

この図表から「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの該当／非該当は、「都市に比べて劣っている」カテゴリの該当／非該当に関係していると考えられる。関係は、負のそれである。「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「都市に比べて劣っている」カテゴリはどのようなものかは分からないが、対立する意味をもつと考えられる。しいて解釈するなら、「消費文化へのアクセスが悪い」は優劣の問題とは関係しないある種の「不利」として理解しているというものだろうか。しかし、なにぶん度数が少ない。

「自治体行政問題」カテゴリと「都市に比べて劣っている」カテゴリのクロス集計表も作成し、フィッシャーの正確確率検定も計算したが、関係がないという結果となった。

これらの検討から、下川町の「良くないところ」カテゴリ間の関係は、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを機軸として、「自治体行政問題」カテゴリと「都市に比べて劣っている」カテゴリに分化した2つの対立する関係から構成されていると考えられる。そして、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを構成する2つのラベルの関係も対立する関係であった。

③下川町の「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ等の関係

ここまで、「良いところ」カテゴリ間の関係と「良くないところ」カテゴリ間の関係を検討してきた。さらに、「良いところ」カテゴリのそれぞれと「良くないところ」カテゴリのそれぞれの関係を検討する。また、「消費文化へのアクセスが悪い」というカテゴリは、方向性の異なる2つのラベルをもっていることが分かっている。しかも件数が多い。そのため、この2つのラベルも検討対象とする。

ところで、「良いところ」カテゴリは4つあった。そして「良くないところ」カテゴリは5つあった。この5つに、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリに含まれる「物を買う場所に乏しい」と「遊ぶ場所に乏しい」という2つのラベルも検討対象に加えると、計7つになる。そのため作成が必要なクロス集計表は28表(4×7)になる。これをひとつずつ掲表しては非常に冗長になってしまう。そのため、限定をかける。

まず、事例数が 1 件のカテゴリは除外する。「良いところ」カテゴリでは「林業が盛ん」が、「良くないところ」カテゴリでは「良くないところはない」が、これにあたる。

次に、フィッシャーの正確確率検定の結果を利用して、強い相関があるものを絞り込む。フィッシャーの正確確率検定（両側）の有意確率による絞り込みである。

有意確率「.050 未満」のクロス集計表は、「生活が穏やか」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの 1 件だけである（.045）。「良いところ」カテゴリ間や「良くないところ」カテゴリ間の関係よりも、関係が明らかに弱くなっている。

さらに、「.100」前後まで含めると 2 件ある。これも「生活が穏やか」カテゴリに関わるもので、「生活が穏やか」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベル（.101）と「生活が穏やか」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリ（.115）の 2 件にとどまる。すなわち、「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ・ラベルで相対的に強く関係しているのは、「生活が穏やか」カテゴリに関わるものに限定されている。

最後に、この有意確率による絞り込みからはみ出すが、件数の多い主要なカテゴリに関わるものについては、補足的に傾向をみる。「良いところ」カテゴリで未検討の他の主要なカテゴリは、「自然のめぐみ」と「地域の取り組みがある」であった。「自然のめぐみ」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ（.372）と「自然のめぐみ」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリ（.329）、そして「地域の取り組みがある」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベル（.372）の検討を行う。

【「生活が穏やか」カテゴリを軸とした分析】

まず、「生活が穏やか」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリである（図表 2-2-5）。

図表 2-2-5 （良いところ）「生活が穏やか」カテゴリ
×（良くないところ）「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ

			「消費文化へのアクセスが悪い」		合計
			該当	非該当	
「生活が穏やか」	該当	度数(人)	4	6	10
		内訳(%)	40	60	100
	非該当	度数(人)	16	4	20
		内訳(%)	80	20	100
合計		度数(人)	20	10	30
		内訳(%)	67	33	100

(Fisher の直接法)正確有意確率(両側)=.045

この図表から「生活が穏やか」カテゴリの該当／非該当は、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの該当／非該当に関係していることが分かる。関係は負である。「生活が穏やか」カテゴリを選択する生徒は、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを選択しない傾

向にある。この2つのカテゴリは対立的であると考えることができる。

「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを構成する2つのラベル（「遊ぶ場所に乏しい」と「物を買う場所に乏しい」）では、「生活が穏やか」カテゴリとの関係はどうなるのだろうか。2つを区別してクロス集計表を作成する。

「生活が穏やか」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベルのクロス集計表が図表2-2-6である。

図表2-2-6 （良いところ）「生活が穏やか」カテゴリ
×（良くないところ）「遊ぶ場所に乏しい」ラベル

			「遊ぶ場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「生活が穏やか」	該当	度数(人)	1	9	10
		内訳(%)	10	90	100
	非該当	度数(人)	9	11	20
		内訳(%)	45	55	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisher の直接法)正確有意確率(両側)=.101

この図表から「生活が穏やか」カテゴリの該当／非該当は、「遊ぶ場所に乏しい」ラベルの該当／非該当に関係していることが分かる。関係は負である。下川町の「良いところ」として「生活が穏やか」を選択する生徒は、下川町の「良くないところ」として「遊ぶ場所に乏しい」を選択しない傾向にある。すなわち、図表2-2-5と同様の結果となった。しかし、「物を買う場所に乏しい」ラベルでは同様の関係が見いだせない(図表2-2-7)。

図表2-2-7 （良いところ）「生活が穏やか」カテゴリ
×（良くないところ）「物を買う場所に乏しい」ラベル

			「物を買う場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「生活が穏やか」	該当	度数(人)	3	7	10
		内訳(%)	30	70	100
	非該当	度数(人)	7	13	20
		内訳(%)	35	65	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisher の直接法)正確有意確率(両側)=1.000

この図表から「生活が穏やか」カテゴリの該当／非該当は、「物を買う場所に乏しい」ラ

ベルの該当／非該当に、全く関係していないことが分かる。両者は無関係である。すなわち、下川町の「良いところ」として「生活が穏やか」だと考えていたとしても、同時に下川町の「良くないところ」として「物を買う場所に乏しい」と考えることができる。

以上のことをまとめてみる。まず、「生活が穏やか」カテゴリとの関係で「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリは負の関係にあることが分かった。しかし、ラベルに分解して考えると、それぞれで意味が異なる。「遊ぶ場所に乏しい」ラベルと「物を買う場所に乏しい」ラベルで、前者には影響があるが、後者には影響がない。すなわち、下川町という場所の評価は「生活が穏やか」カテゴリとの関係という点から吟味すると、2つのラベルでは違っていると考えられる。

続けて、「生活が穏やか」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの関係を検討してみる(図表2-2-8)。

図表2-2-8 (良いところ)「生活が穏やか」カテゴリ
× (良くないところ)「自治体行政問題」カテゴリ

			「自治体行政問題」		合計
			該当	非該当	
「生活が穏やか」	該当	度数(人)	5	5	10
		内訳(%)	50	50	100
	非該当	度数(人)	4	16	20
		内訳(%)	20	80	100
合計		度数(人)	9	21	30
		内訳(%)	30	70	100

(Fisher の直接法)正確有意確率(両側)=.115

この図表から「生活が穏やか」カテゴリの該当／非該当は、「自治体行政問題」ラベルの該当／非該当に関係していることが分かる。関係は正である。下川町の良いところとして「生活が穏やか」を選択する生徒は、下川町の良くないところとして「自治体行政問題」を選択する傾向がある。共に地域社会の質を念頭においていると考える。前者を「良いところ」を考えるからこそ、後者の「良くないところ」も考えてしまう。このような関係にあるのではないかと考えられる。

次に、「良いところ」の他の主要なカテゴリである「自然のめぐみ」カテゴリと「地域の取り組みがある」カテゴリの検討に移る。

【「自然のめぐみ」カテゴリ】

まず、「自然のめぐみ」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリである(次頁の図表2-2-9)。

図表 2-2-9 (良いところ)「自然のめぐみがある」カテゴリ
 × (良くないところ)「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ

			「消費文化へのアクセスが悪い」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	17	7	24
		内訳(%)	71	29	100
	非該当	度数(人)	3	3	6
		内訳(%)	50	50	100
合計		度数(人)	20	10	30
		内訳(%)	67	33	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.372

この図表から「自然のめぐみ」カテゴリの該当／非該当は、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの該当／非該当に少し関係していることが分かる¹。関係は正である。下川町の良いところとして「自然のめぐみ」を選択する生徒は、下川町の良くないところとして「消費文化へのアクセスが悪い」を選択する傾向がある。両者は言わば「対」となって、ひとつの考え方を形成していると見ることができる。すなわち、生徒にとっての下川町とは、「自然のめぐみ」があるが、「消費文化へのアクセスが悪い」場所である。生徒 30 人中 17 人 (57%) がこの考え方をもっている。

さらに、「消費文化へのアクセスが悪い」を 2 つのラベルに分解して、それぞれ検討する。件数の低下にともなって有意確率が低下する (図表 2-2-10)。

図表 2-2-10 (良いところ)「自然のめぐみ」カテゴリ
 × (良くないところ)「物を買う場所に乏しい」ラベル

			「物を買う場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	8	16	24
		内訳(%)	33	67	100
	非該当	度数(人)	2	4	6
		内訳(%)	33	67	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=1.000

この図表から「自然のめぐみ」カテゴリの該当／非該当は、「物を買う場所に乏しい」ラベルの該当／非該当に全く関係していないことが分かる。両者は無関係である。すなわち

¹ ただし Fisher の直接法による有意確率 (両側) では度数の少なさもあり、「有意」とまでは言えない。それで「少し」と書いた。

下川町の良いところとして「自然のめぐみ」を考えていたとしても、同時に「物を買う場所に乏しい」と考えることができる。

では「遊ぶ場所に乏しい」ラベルに換えてみたらどうだろうか（図表 2－2－1 1）。

図表 2－2－1 1 （良いところ）「自然のめぐみ」カテゴリ
×（良くないところ）「遊ぶ場所に乏しい」ラベル

			「遊ぶ場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	9	15	24
		内訳(%)	38	63	100
	非該当	度数(人)	1	5	6
		内訳(%)	17	83	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.633

この図表から「自然のめぐみ」カテゴリの該当／非該当は、「遊ぶ場所に乏しい」ラベルの該当／非該当にほんのわずかに関係していることが分かる。関係は正である。しかし、「物を買う場所に乏しい」ラベルとわずかにひとり分の違いにすぎない。

すなわち下川町の「良いところ」である「自然のめぐみ」ラベルとの関係において、「良くないところ」カテゴリは弱い関係だが正の関係にある。「生活が穏やか」カテゴリの関係と比較して、明らかに弱い。

さらに、「自然のめぐみ」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリを検討する（図表 2－2－1 2）。

図表 2－2－1 2 （良いところ）「自然のめぐみがある」カテゴリ
×（良くないところ）「自治体行政問題」ラベル

			「自治体行政問題」		合計
			該当	非該当	
「自然のめぐみ」	該当	度数(人)	6	18	24
		内訳(%)	25	75	100
	非該当	度数(人)	3	3	6
		内訳(%)	50	50	100
合計		度数(人)	9	21	30
		内訳(%)	30	70	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.329

この図表から「自然のめぐみ」カテゴリの該当／非該当は、「自治体行政問題」カテゴリの該当／非該当にわずかに関係していることが分かる。関係は負である。すなわち、「自然

のめぐみ」カテゴリを選択する場合は、「自治体行政問題」カテゴリを選択しない傾向にある。

【「地域の取り組みがある」カテゴリ】

最後に、「地域の取り組みがある」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベルを検討する（図表 2－2－13）。

図表 2－2－13 （良いところ）「地域の取り組みがある」カテゴリ
×（良くないところ）「遊ぶ場所に乏しい」ラベル

			「遊ぶ場所に乏しい」		合計
			該当	非該当	
「地域の取り組みがある」	該当	度数(人)	3	3	6
		内訳(%)	50	50	100
	非該当	度数(人)	7	17	24
		内訳(%)	29	71	100
合計		度数(人)	10	20	30
		内訳(%)	33	67	100

(Fisher の直接法)正確有意確率(両側)＝.372

この図表から「地域の取り組みがある」カテゴリの該当／非該当は、「遊ぶ場所に乏しい」ラベルの該当／非該当にわずかに関係していることが分かる。関係は正である。すなわち、「地域の取り組みがある」カテゴリを選択する場合は、「遊ぶ場所に乏しい」カテゴリを選択する傾向にある。件数が少ないので不確かであるが、地域の「取り組み」は「遊ぶ場所」に近いものがイメージされている可能性がある。このカテゴリの基礎となった要素も「行事が良い」「町がきれい」「ジャンプの取り組みがある」であったので、どちらかと言えば、自分が取り組むものとしてイメージされていない（裏を返せば、消費者的な関わり）。そのことが関わっているのかもしれない。

④「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ等の関係は何を示唆しているか

以上のような検討の結果、判明したカテゴリ・ラベル間の関係を図示したのが少し飛ぶが 53 頁の図表 2－2－14 である

図表を掲げる前に、関係と正確有意確率の数値を整理しておこう。

「良いところ」、「良くないところ」それぞれのカテゴリ・ラベル内では、(Fisher の直接法) 正確有意確率(両側)で 0.05 以下となる以下の 4 件の関係が見いだせた。

【「良いところ」×「良いところ」】

- ・「自然のめぐみ」カテゴリ×「生活が穏やか」カテゴリ（有意確率 0.000）

【「良くないところ」×「良くないところ」】

- ・「物を買う場所に乏しい」ラベル×「遊ぶ場所に乏しい」ラベル（有意確率 0.011）
- ・「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリ（有意確率 0.030）
- ・「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ×「都市に比べて劣っている」カテゴリ（有意確率 0.030）

しかし、「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリ間では（Fisher の直接法）正確有意確率（両側）で 0.05 以下となるものは以下の 1 件にとどまった。一般的に関係が弱い。

【「良いところ」×「良くないところ」】

- ・「生活が穏やか」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ（有意確率 0.045）

有意確率は高いが注目したものを掲げる。事例数が少ないため、有意確率の点では甘い評価ではあるが重視したという意味になる。

【「良いところ」×「良くないところ」】

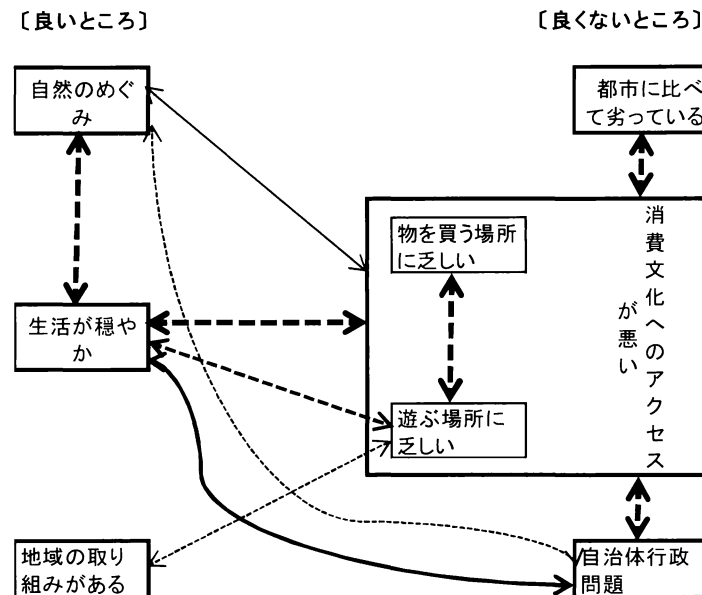
- ・「生活が穏やか」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベル（有意確率 0.101）
- ・「生活が穏やか」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリ（有意確率 0.115）
- ・「自然のめぐみ」カテゴリ×「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ（有意確率 0.372）
- ・「自然のめぐみ」カテゴリ×「自治体行政問題」カテゴリ（有意確率 0.329）
- ・「地域の取り組みがある」カテゴリ×「遊ぶ場所に乏しい」ラベル（有意確率 0.372）

このように「良いところ」は、「生活が穏やか」カテゴリとの関係で、「良くないところ」との違いが際立つ関係となっている。また、件数の観点から言うなら、生徒にとっての下川町は「自然のめぐみ」があるが、「消費文化へのアクセスが悪い」場所という理解である。生徒 30 人中 17 人（57%）がこの考え方をもっている。

ここまでの検討を総括して、これらのカテゴリ間の関係を図示してみる。図表の注にあるように、カテゴリ・ラベル間の関係の正負を実線と点線で区別した。また、「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ・ラベルの間の正確有意確率の数字は大きい（甘い）。そのため、関係性の指摘も推測にとどまるものであることを、事前にお断りしておかなければならない。

図表 2-2-14

「下川町の良いところカテゴリ」と「下川町の良いところカテゴリ・ラベル」の関係



※ カテゴリの枠は太線、ラベルの枠は細線で表している。また、カテゴリとラベルを結ぶ実線は正の関係を、点線は負の関係を表している。(Fisherの直接法)正確有意確率(両側)の数字を参考にして、有意確率が.050未満を最太線とし、.100近傍を太線、.300近傍を細線として表記した。

「良いところ」カテゴリ内では「自然のめぐみ」カテゴリと「生活が穏やか」カテゴリが負の関係にあった。この図表では主要なカテゴリを表記したため「地域の取り組みがある」カテゴリも出てくるが、両者との関係はない。

「良くないところ」カテゴリ内では、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「都市に比べて劣っている」カテゴリの関係、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの関係、のそれぞれが負の関係にある。すなわち、「消費文化へのアクセスが悪い」が軸となり、それと負の関係にある2つのカテゴリ（「都市に比べて劣っている」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリ）が配置された形となっている。しかし、この2つのカテゴリ同士は正の関係にはない。負の関係の位相がズレているのだろう。また、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ内の「物を買う場所に乏しい」ラベルと「遊ぶ場所に乏しい」ラベルは負の関係にあった。

「良いところ」と「良くないところ」の関係は、弱い関係も図示したため煩雑な表記となっている。多少ともクリアな表現とするために、2つに区別して説明しよう。

ひとつは、事例数としては最多の「自然のめぐみ」カテゴリと「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの正の関係である。その裏面とも言えるのが、「自然のめぐみ」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの負の関係である。共に、弱い関係である。

もうひとつは、「良いところ」の「生活が穏やか」カテゴリと「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの強い負の関係である。その裏面とも言えるのが、「生活が穏やか」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリの正の関係である。

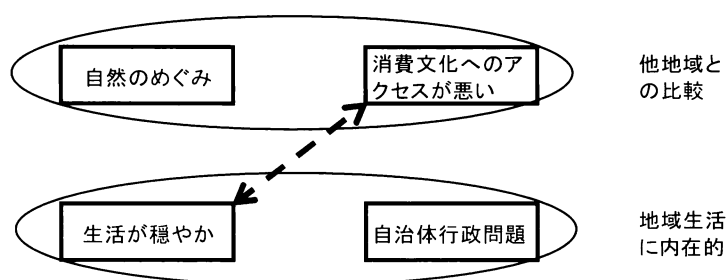
このような「良いところ」と「良くないところ」との関係からは、次のことが示唆される。

第1に、「良いところ」と「良くないところ」は結びつき、一体となって特定の意味を形成していると考えられること、である。

第2に、この結びつきは2種類に整理できる。軸になるのは、「生活が穏やか」カテゴリは「消費文化へのアクセスが悪い」と負の関係である（裏面が「自治体行政問題」との正の関係）。これのサブ的位置にくるのが「自然のめぐみ」カテゴリと「消費文化へのアクセスが悪い」と正の関係である（裏面が「自治体行政問題」と負の関係）。この両者がネガとポジの関係にあると考えられる。前者の関係がはっきりしている（有意確率は.045。しかし共に該当の度数は4件にすぎない）が、後者の方がメジャーである（度数は17件。有意確率は.372）。

第3に、2つの関係を個別に考えるのではなく、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリを軸に、2つの「良いところ」カテゴリが正対しているとも考えることもできる。正の関係を楕円の囲みで表し、負の関係（強いもののみ）を矢印で表現した（図表2-2-15はその概念図）。

図表2-2-15 地域評価概念図



第4に、この2種類の結びつき（セット）は地域評価という点で、異なる視点を表していると考えられるのではない。例えば、前者（「生活が穏やか」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリのセット）が「地域生活に内在的」な評価だとするなら、後者（「自然のめぐみ」と「消費文化へのアクセスが悪い」とのセット）は「他地域との比較」からみた評価、という具合に。イメージ的に対比すると、前者が（生活の中で分かるという意味で）深層的なものとしたら、後者は（同列に並べて比較することのできるという意味で）表層的なものを表している、となる。

第5に、「良いところ」のカテゴリでは「地域の取り組みがある」、「良くないところ」のカテゴリでは「都市に比べて劣っている」が、それぞれのカテゴリ内である程度の位置を

占めているが、カテゴリ間では余り考慮する必要がない。

第6に、説明の本筋からは外れるが、「良くないところ」の「消費文化へのアクセスが悪い」で関係性を担う軸は「遊ぶ場所に乏しい」の方で、「物を買う場所に乏しい」の方は、これらの関係からは少し外れた位置にありそうだ。すなわち、「良い」「良くない」を越えた位置にあるから、関係性がでてこないと考えられる。このような意味で、下川町の価値とは中立的（無関係）な意味を持っている可能性がある。

全体として、下川町の「良いところ」と「良くないところ」は、生活それ自体という視点と他地域との比較という視点の、言い換えれば深浅の異なるレベルの異なるセットで構成されており、この2つのセットが負の関係にあると考えられる。

さらに、「地域アイデンティティ」の獲得の問題に引きつけてまとめてみたい。示唆は次のようになる。

第1に、生徒が下川町の「自然のめぐみ」を高く評価していたとしても、「消費文化へのアクセスが悪い」という評価を下げる効果は持たないという点は重要である。両者はセットである。

第2に、「生活が穏やか」を高く評価していたとしても、「自治体行政問題」を下げる効果は持たない。両者はセットである。

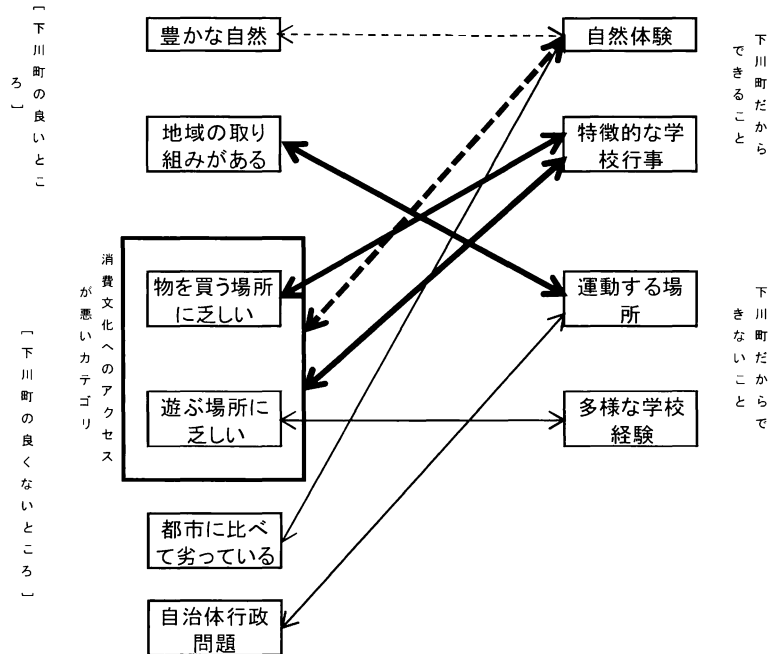
第3に、この2つのセットは負の関係にあるから、生徒はどちらかを「推す」（支持する）形で考え方をもちことになるだろう。

最後に、度数からすぐわかるように、生徒は「自然のめぐみ」を高く評価し、同時に「消費文化へのアクセスが悪い」と評価している。これが生徒の地域アイデンティティの軸である。そして、一部の生徒のみが生活自体の良さを評価する。そしてそれは、「生活が穏やか」である良さを知るからこそ、その分「自治体行政問題」を考える。内容に踏み込んで言うと自治体に厳しい。

（2）下川町の「良いところ」「良くないところ」と下川町だから「できること」「できないこと」は関係しているか

前項で作成した「良いところ」「良くないところ」のカテゴリ（ラベルがあるものはラベルも）と下川町だから「できること」「できないこと」との2行2列のクロス集計表を作成してみた。余りにも場合分けが多くクロス集計表が膨大になった。「良いところ」では、3カテゴリと4ラベル、これに度数の多い「森林の豊かさ」、「空気がきれい」、「自然の豊かさ」の3要素の分も作成してみた。「良くないところ」では、4カテゴリと2ラベルで作成してみた。「できること」は6項目、「できないこと」は7項目の計項目あったため、合計で208の集計表を作成した。また、基礎となる度数が少ないため、一部以外のはっきりとした関係は分からない。これも前項と同様である。そのため、図表は割愛した。（Fisherの直接法）正確有意確率（両側）で0.10以下ものだけに限定し、正・負の関係性に注目して、概要だけを図示したのが次頁の図表2-2-16である。

図表 2-2-16 下川町の「良いところ」「良くないところ」
×下川町だから「できること」「できないこと」



※ (Fisher の直接法) 正確有意確率 (両側) = .10未満に線を引いた。 .05未満を太線で、それ以上を細線にした。また、実線は正の関係を点線は負の関係を表している。

このような条件で取り上げることができたのは、8つの関係である。先に、「下川町の良いところ」との関係を取り上げ、次に「下川町の良くないところ」との関係を取り上げる。このそれぞれは(Fisher の直接法) 正確有意確率 (両側)の低いもの、すなわちより関係が強いと思われるものから順番に説明する。

まず、下川町の「良いところ」との関係である。

第1に、下川町の「良いところラベル (地域の取り組みがある)」と下川町だから「できないこと (運動する場所)」の関係である ((Fisher の直接法) 正確有意確率 (両側) = .048。以下数字のみ。関係は正)。両者とも地域社会に関わるという意味で、関係は妥当なものだが、意味は逆説的である。「地域の取り組みがある」と思う生徒が、下川町だから「できないこと」として、「運動する場所」を選択している。前者を「良いところ」として考えるが故に、後者を選択しているのだと考えたい。

第2に、下川町の「良いところラベル (豊かな自然)」と下川町だから「できること (自然体験)」の関係である (.050。関係は負) である。これも関わりから言えば妥当なものだが、関係は負である。奇妙な関係とも言える。「豊かな自然」を支持する生徒は、下川町だからできることとして、「自然体験」を選ばないのである。敢えて解釈するなら、「豊かな自然」があるのは当たり前だから、「できること」として敢えて「自然体験」を選ぶ必要がないと考えたのではないだろうか。

次に、下川町の「良くないところ」との関係である

第1に、下川町の「良くないところラベル（物を買う場所に乏しい）」と下川町だから「できること（特徴的な学校行事）」の関係である（.013。関係は正）。「物を買う場所に乏しい」と思っている生徒は、「特徴的な学校行事」を下川町だから「できること」として選択するという関係である。両者が対照的に、あるいは代替的に理解している関係と言えそうだ。「物を買う場所に乏しい」替わりに、「特徴的な学校行事」の体験はできるというような理解である。この点は、後述する「森林環境教育体験」の評価とも関わる重要な論点である。

第2に、下川町の「良くないところカテゴリ（消費文化へのアクセスが悪い）」と下川町だから「できること（自然体験）」の関係である（.030。関係は負）。「消費文化へのアクセスが悪い」と思っている生徒は、下川町だから「できること」として「自然体験」を選択しないという関係である。この逆を考えてみる。「消費文化へのアクセスが悪い」と思わない生徒は、下川町だから「できること」として「自然体験」を選択するという関係であるとするなら、妥当な関係であると理解できる。少しアクロバティックな解釈である。

第3に、下川町の「良くないところカテゴリ（消費文化へのアクセスが悪い）」と下川町だから「できること（特徴的な学校行事）」の関係である（.046。関係は正）。「消費文化へのアクセスが悪い」と思っている生徒は、下川町だから「できること」として「特徴的な学校行事」を選択するという関係である。第1と同様の解釈が可能である。

第4に、下川町の「良くないところラベル（遊ぶ場所に乏しい）」と下川町だから「できないこと（多様な学校経験）」の関係である（.071。関係は正）。「遊ぶ場所に乏しい」と思っている生徒は、下川町だから「できないこと」として「多様な学校経験」を選択している。両者は、経験という意味での多様性が少ないという意味で、共に選択されているのだろう。

第5に、下川町の「良くないところラベル（都市に比べて劣っている）」と下川町だから「できること（自然体験）」の関係である（.079。関係は正）。「都市に比べて劣っている」と思う生徒は、下川町だから「できること」に「自然体験」を選択する。これも補償的な意味であろう。このように考えると、第1・3と近い理解ができる。

そして最後に、「下川町の良くないところカテゴリ（自治体行政問題）」と「下川町だからできないこと（運動する場所）」の関係である（.100。関係は正）。「自治体行政問題」があると思う生徒は、下川町だから「できないこと」に「運動する場所」を選択する。問題の内容を指摘しているという意味で考えられる。

これらを通して、分かったことは次のようになる。

下川町の「良いところ」と以下の2つの関係は共に逆説的な意味をもっていた。「自然のめぐみ」を良いと思うからこそ「できること」として「自然体験」を選択しない、「地域の取り組みがある」が良いと思うからこそ「できないこと」に「運動する場所」を選択する、このような関係である。そして「良いところ」で重要なカテゴリであった「生活が穏やか」との関係は、「できること」にも「できないこと」にもつながらない。すなわち、「良いと

ころ」は下川町における可能性（「できること」）や制約（「できないこと」）に意味的につながりにくく、ねじれたものとしてしか意識されていない。

これに比して、下川町の「良くないところ」との5つの関係は、共に順接的な意味をもっていた。ただし、その意味については異なる。第1・3・5は「良くないところ」を補償するような形で、「特徴的な学校行事」「自然体験」が「できること」として考えられていた。第4・6は意味が共通するような形（前者は経験の多様性が得難いという意味で、後者は抱えている問題を説明するという意味）で、「できないこと」が選択されていた。第2も逆の関係を考えるなら、順当なものであった。

すなわち、「良くないところ」は下川町における可能性や制約に意味的に連動し、生徒にとって、意識された（意識に浮かび上がりやすかった）ものであることが指摘できる。

下川町の「良いところ」と「良くないところ」の関係では、「他地域との比較」の評価と「地域生活に内在的」な評価という2つの異なる評価レベルの存在を指摘した。それとの関わりでいけば、下川町だから「できること」「できないこと」は、前者に照準されたものだと考えることができるだろう。生徒は、下川町の「良くないところ」を意識し、それとの関わりで下川町の可能性や制約を理解している。すなわち、後者の下川町それ自体に内在する肯定的な評価と関わる形で可能性や制約を考えない。言い換えれば、内在的な町の価値（「良さ」）に関わって「できること」や「できないこと」を言語化することが生徒には難しい（まだ、できない）。では、どのような言語化が可能なのだろうか。節を改めて論じることしよう。

（3）下川町の評価（「良いところ」「良くないところ」カテゴリ）は「住むならこのまち」の選択に結びつくか

ここまでは、まず生徒の「良いところ」と「良くないところ」という対比から下川町についての評価の特徴を理解した。次に、それを基点として下川町を、どのような可能性のある場所、あるいはない場所（「できること」「できないこと」）として考えているのかに注目した。抽象的な理解に照準を合わせてきた。

ここでは、下川町という場所を選択する場合の根拠という観点から、生徒の考え方を検討してみたい。注目したのは、「住むならこのまち」で下川町を選択した生徒と選択しなかった生徒の差である。「良いところ」と「良くないところ」のどこに注目し、「住むならこのまち」として下川町を選択しているのだろうか。

まず「良いところ」カテゴリとの関係を、次に「良くないところ」カテゴリとの関係を、クロス集計表を作成することで検討する。

「良いところ」の4カテゴリそれぞれでクロス集計表を作成したが、関係があったのは、「自然のめぐみ」と「地域の取り組みがある」の2つであった（それぞれ次頁の図表2-2-17と図表2-2-18）。

図表 2-2-17 「住むならこのまち(下川町／その他)」
×「良いところカテゴリ(「自然のめぐみ」)」

		「自然のめぐみ」		合計
		該当	非該当	
下川町	度数(人)	10	1	11
	内訳(%)	91	9	100
その他	度数(人)	7	4	11
	内訳(%)	64	36	100
合計	度数(人)	17	5	22
	内訳(%)	77	23	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.311

「住むならこのまち」として下川町を選択する生徒は、その他に比して「自然のめぐみ」を選択する傾向にあるとは言える。しかしながら、強い関係ではない。「その他」の地を選ぶ生徒にとっても、「自然のめぐみ」を選択する傾向は高いからである。

図表 2-2-18 「住むならこのまち(下川町／その他)」
×「良いところカテゴリ(「地域の取り組みがある」)」

		「地域の取り組みがある」		合計
		該当	非該当	
下川町	度数(人)	0	11	11
	内訳(%)	0	100	100
その他	度数(人)	5	6	11
	内訳(%)	45	55	100
合計	度数(人)	5	17	22
	内訳(%)	23	77	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.035

これは度数が低い、はっきりとした傾向がでてくる。「住むならこのまち」として下川町を選択する生徒は、その他の生徒とは異なり「地域の取り組みがある」を選択しない。しかし、解釈は難しく、別れるように思う。まず、「地域の取り組みがある」を選択することは、下川町に住もうと思っていないからこそ、選択が可能になったという解釈が成り立つ。逆に、下川町に住もうと思う場合には、「良いところ」として「地域の取り組みがある」ことを評価しないという解釈もできるように考える。すなわち、「住む」ということと、具体的な「取り組み」が「良い」という評価には結びつかないというものである。さらに、下川町の「良くないところ」との関係も検討してみよう。

同様の方法でクロス集計表を作成した。しかし、多少なりとも関係が見いだせたのは、「自然が厳しい」カテゴリ(次頁の図表 2-2-19) だけであった。

図表 2-2-19 「住むならこのまち(下川町/その他)」
×「下川町の良くないところカテゴリ(自然が厳しい)」

		「自然が厳しい」		合計
		該当	非該当	
下川町	度数(人)	0	10	10
	内訳(%)	0	100	100
その他	度数(人)	2	9	11
	内訳(%)	18	82	100
合計	度数(人)	2	19	21
	内訳(%)	10	90	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.476

下川町に住もうと思う場合には、下川町の「良くないところ」として「自然が厳しい」を選択しないというものである。納得はゆくが、なんと言っても度数が低い (2 人)。

さらに下川町だから「できること」と「できないこと」も、「住むならこのまち (下川町／その他)」とのクロス集計表を作成し検討してみたが、同様であった。

そして、「住むならこのまち (下川町／その他)」と下川町の評価 (3 択) の関係も検討したが、関係は見いだせなかった。関わったのは、将来の居住地志向のみである (図表 2-2-20)。

図表 2-2-20 「住むならこのまち(下川町/その他)」
×「将来居住地志向」

		将来居住地志向		合計
		いったん下川町を出るが戻ってくる	下川町から出て戻ってこない	
下川町	度数(人)	6	1	7
	内訳(%)	86	14	100
その他	度数(人)	1	10	11
	内訳(%)	9	91	100
合計	度数(人)	7	11	18
	内訳(%)	39	61	100

(Fisher の直接法)正確有意確率 (両側)=.002

関係は強いのだが2つの限定がつく。クロス集計表を構成する2つの質問を共に回答した生徒の数が少ないため、18 人のみの結果となっている。また、「ずっと下川に残る」を選択した生徒 (2 人) は回答していない。ところで、一見してわかるように、「住むならこのまち」で下川町を選択する生徒は、「いったん下川を出るが戻ってくる」という展望を持っている生徒なのである。すなわち「住むならこのまち」という選択に表れているものは、未来の次元と関わった選択ということになる。

以上のような検討から、以下のことが分かった。

生徒の下川町に対する評価（「良いところ」と「良くないところ」という評価）と「住むならこのまち」で下川町を選択することとは結びつかない。「将来の居住地志向」と関係を念頭において言い換えるなら、生徒の現時点での下川町の評価は、（将来を見越して判断してしまう）住む場所の選択とは結びつくのが難しいらしい。

（４）下川町の評価（「良いところ」「良くないところ」カテゴリ）は下川町の評価（３択）に関係しているか

それでは、「良いところ」「良くないところ」で上げられたカテゴリは、生徒の下川町についての総括的な評価（３択）とどのように関わっているのだろうか。しかしながら、前述したように、３択の理由づけ（内容）には差があったが、「良いところ」と「良くないところ」に質問を替えて聞いた内容でみると全体的に差が乏しいと、既に指摘した。クロスする内容が「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリ・ラベルであるため、顕著な傾向はでない。そのため、少し細かい指摘となるがお許しいただきたい。

また、これも度数が小さいため統計的な裏付けが乏しい。しかし、３行×２列のクロス集計表を作成することで検討してみる。各セルの度数の小さい場合に使用されるフィッシャーの正確確率検定は２行×２列の場合でなければ使用できないため、図表を対比する形で検討する（図表２－２－２１）。

【下川町の評価（３択）と「良いところ」カテゴリ・要素の関係】

**図表２－２－２１ 下川町の評価（３択）×
「自然のめぐみ」カテゴリと「空気がきれい」要素**

		「自然のめぐみ」		合計
		該当	非該当	
好き	度数(人)	13	2	15
	内訳(%)	87	13	100
半々	度数(人)	12	3	15
	内訳(%)	80	20	100
嫌い	度数(人)	1	1	2
	内訳(%)	50	50	100
合計	度数(人)	26	6	32
	内訳(%)	81	19	100

		「空気がきれい」		合計
		該当	非該当	
好き	度数(人)	8	7	15
	内訳(%)	53	47	100
半々	度数(人)	4	11	15
	内訳(%)	27	73	100
嫌い	度数(人)	0	2	2
	内訳(%)	0	100	100
合計	度数(人)	12	20	32
	内訳(%)	38	63	100

確かに、「自然のめぐみ」カテゴリでは「好き」「半々」にほとんど差がない。しかし、「空気がきれい」要素では少し差があると考えられる。「好き」側で該当が多いのは、「自然のめぐみ」カテゴリの「見て分かる」的な直接性を一步越えた、例えば「感じたもの」、あるいは体験的なものとしての評価ではないかと考えられる。

下川町の評価（３択）と「生活が穏やか」カテゴリのクロス集計表を作成した（図表２

－ 2 － 2 2)。

図表 2－2－2 2 下川町の評価（3 択）×「生活が穏やか」カテゴリ

		「生活が穏やか」		合計
		該当	非該当	
好き	度数(人)	6	9	15
	内訳(%)	40	60	100
半々	度数(人)	3	12	15
	内訳(%)	20	80	100
嫌い	度数(人)	1	1	2
	内訳(%)	50	50	100
合計	度数(人)	10	22	32
	内訳(%)	31	69	100

「好き」で少し多い気もする。しかし、微妙である。「生活が穏やか」カテゴリを、(度数は小さくなるが) 3つのラベルに分解して検討したらどのようなになるだろうか。図表 2－2－2 3がそれである。

図表 2－2－2 3 下川町の評価（3 択）×
「生活が穏やか」カテゴリを構成するラベル

		「良い町民関係」		「生活しやすい」		「環境が良い」		合計
		該当	非該当	該当	非該当	該当	非該当	
好き	度数(人)	4	11	3	12	0	15	15
	内訳(%)	27	73	20	80	0	100	100
半々	度数(人)	0	15	0	15	3	12	15
	内訳(%)	0	100	0	100	20	80	100
嫌い	度数(人)	0	2	1	1	0	2	2
	内訳(%)	0	100	50	50	0	100	100
合計	度数(人)	4	28	4	28	3	29	32
	内訳(%)	13	88	13	88	9	91	100

面白い結果となった。「好き」では、「良い町民関係」と「生活しやすい」に集中する。「半々」は「環境が良い」に集中する。「嫌い」は「生活しやすい」のみの選択となった。「良いところ」と「良くないところ」の分析において、「生活が穏やか」カテゴリは地域生活に内在的な評価ではないかと考察した。「良い町民関係」ラベルと「生活しやすい」ラベルは、確かに地域生活の質についての評価と言えるだろう。解釈を裏づけるものとなった。ただし、この評価も「好き」の一部の生徒にとどまっている（主なのは「自然のめぐみ」評価）。

さらに、「地域の取り組みがある」ではどうだろうか（次頁の図表 2－2－2 4）。

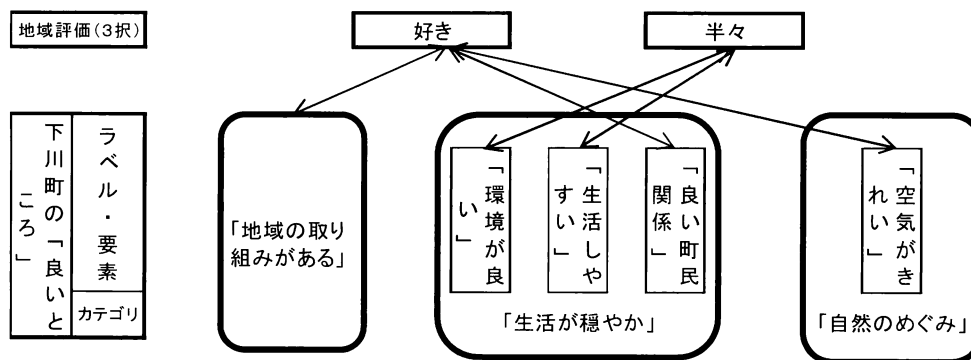
図表 2-2-24 下川町の評価（3 択） ×
「地域の取り組みがある」カテゴリ

		「地域の取り組み がある」		合計
		該当	非該当	
好き	度数(人)	5	10	15
	内訳(%)	33	67	100
半々	度数(人)	1	14	15
	内訳(%)	7	93	100
嫌い	度数(人)	0	2	2
	内訳(%)	0	100	100
合計	度数(人)	6	26	32
	内訳(%)	19	81	100

これも「好き」で多いように思われる。だからと言って、「地域の取り組みがある」が「住むならこのまち」の分析において（図表 2-2-18）、下川町と答えることに結びついていないことから言って、「生活が穏やか」と同様に地域生活に内在的なものかどうかを結論することはできない。

全体的に言って下川町の評価（3 択）において、「良いところ」のカテゴリレベルで比較すると、「好き」と「半々」はそれほど大きな違いはないと思われる。しかし、ラベルのレベルに分解して比較すると、興味深い差があると思われる。「好き」と「半々」に違いをもたらしているのは、それぞれのラベルの内容が、地域生活内在的な（ものであると考えられる）場合か否かであると考えられる（図表 2-2-25 の模式図参照）。

図表 2-2-25 下川町の評価（3 択）と
「良いところ」（カテゴリ・ラベル・要素）の関係の模式図



※ 横書きはカテゴリ。縦書きはカテゴリ内のラベルあるいは要素。

【下川町の評価（3 択）と「良くないところ」】

下川町の評価（3 択）と「良くないところ」の「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリとそれを構成する「遊ぶ場所に乏しい」ラベルのクロス集計表を検討する（図表 2-2

－ 26)。

図表 2－2－26 下川町の評価（3 択）×
「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリ・「遊ぶ場所に乏しい」ラベル

		「消費文化へのアクセスが悪い」		「遊ぶ場所に乏しい」		合計
		該当	非該当	該当	非該当	
好き	度数(人)	9	5	4	10	14
	内訳(%)	64	36	29	71	100
半々	度数(人)	11	4	6	9	15
	内訳(%)	73	27	40	60	100
嫌い	度数(人)	0	1	0	1	1
	内訳(%)	0	100	0	100	100
合計	度数(人)	20	10	10	20	30
	内訳(%)	67	33	33	67	100

「良くないところ」のカテゴリ・ラベルなので、「好き」評価よりも「半々」評価の方が若干多いという点では妥当な結果である。さらに細かくなるが、「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリよりも、「遊ぶ場所に乏しい」ラベルの方の差が大きい。この点も、妥当な結果である。しかし微妙である。

さらに、「良くないところ」の他のカテゴリではどうだろうか（図表 2－2－27）。

図表 2－2－27 下川町の評価（3 択）×
「自治体行政問題」「都市に比べて劣っている」「自然が厳しい」各カテゴリ

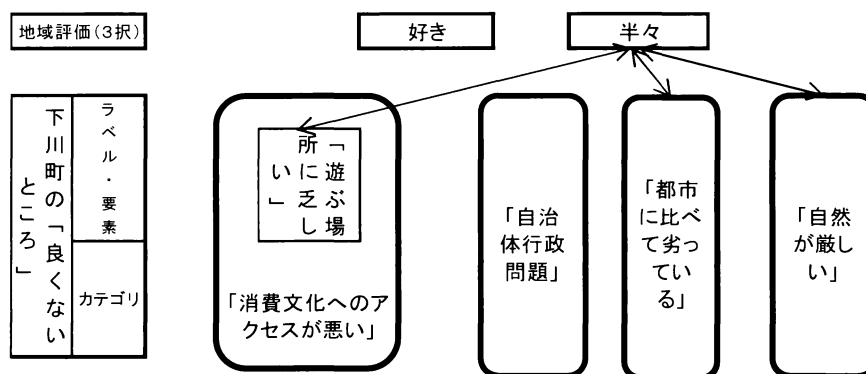
		「自治体行政問題」		「都市に比べて劣っている」		「自然が厳しい」		合計
		該当	非該当	該当	非該当	該当	非該当	
好き	度数(人)	4	10	0	14	0	14	14
	内訳(%)	29	71	0	100	0	100	100
半々	度数(人)	5	10	2	13	4	11	15
	内訳(%)	33	67	13	87	27	73	100
嫌い	度数(人)	0	1	1	0	0	1	1
	内訳(%)	0	100	100	0	0	100	100
合計	度数(人)	9	21	3	27	4	26	30
	内訳(%)	30	70	10	90	13	87	100

「自治体行政問題」カテゴリでは「好き」と「半々」で差がないだろう。しかし、「都市に比べて劣っている」カテゴリと「自然が厳しい」カテゴリでは差があると考えて良いように思う。ここに「好き」と「半々」あるいは嫌いを分ける違いがあると考えられる。すなわち、「好き」を選択する生徒は、「自治体行政問題」カテゴリに賛意を示すが、それには「好きだから」こそというニュアンスがあるだろうし、「都市に比べて劣っている」カテゴリに表れるような劣位を感じるようなものではなく、「自然が厳しい」カテゴリも受け入れられるものとしてあると考えられる。「半々」の生徒にとっては、それぞれが敢えて言うなら

「嫌う」内容であろう。

全体的に言って下川町の評価（3択）において、「良くないところ」のカテゴリレベルで比較すると、「好き」と「半々」にはある程度の違いがあると思われる。「半々」に特徴が表れた。「半々」という評価であっても、実質的には「嫌う」内容となっていると考えられる（図表2-2-28に模式図を掲げた）。

図表2-2-28 下川町の評価（3択）と
「良くないところ」の関係の模式図



※ 横書きはカテゴリ。縦書きはカテゴリ内のラベルあるいは要素。

（5）森林環境教育と下川町の評価（「良いところ」「良くないところ」カテゴリ）は関係しているか

ここは結果のみ記述する。森林環境教育の感想と「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリ・ラベルそれぞれのクロス集計表を作成し、検討したが（Fisherの直接法）正確有意確率（両側）で0.100以下の水準を満たすものはなかった。

最もそれに近かったのは、下川町の「良くないところ」（「遊ぶ場所に乏しい」ラベル）と「森林教育のキーワード（大変・困難）」のクロス集計表における0.103である。

方法の問題として、森林環境教育についての生徒の自由記述をキーワードで集約するという分析方法に問題があったのかもしれないが、やはり全体として森林環境教育は生徒にとっての多面的な経験であり、それが下川町への評価に連動するという明確な関連にはつながりにくい。その意味で長時間かけて、じわじわと、あるいは後になって理解されるようなもの（教育一般もそうである）なのではないだろうか。

（6）小括——生徒の地域（下川町）理解の構造

第1に、生徒の地域（下川町）評価の構造を、「良いところ」カテゴリ間で、「良くないところ」カテゴリ間で、「良いところ」カテゴリと「良くないところ」カテゴリ間で検討した。53頁の図表2-2-14がその関係を図示したものであり、54頁の図表2-2-15が概念図となる。

生徒の地域評価は、二重の構造から構成されていた。ひとつは、「他地域との比較」からもたらされる表層的な評価と考えられるものである。もうひとつは、地域生活に内在的な評価からなる深層的な評価と考えられるものである。

前者は、「自然のめぐみ」と「消費文化へのアクセスが悪い」のセット、「生活が穏やか」と「自治体行政問題」のセットである。「消費文化へのアクセスが悪い」と「生活が穏やか」は対立的な価値を表していた。

第2に、生徒が地域（下川町）をどのような可能性の場所としてとらえているのかを、下川町だから「できること」「できないこと」と下川町の「良いところ」「良くないところ」の関係から検討した。56 頁の図表 2－2－1 6 がその関係を図示したものである。

生徒にとっての可能性の中心は「特徴的な学校行事」にあった。そして、下川町の「良くないところ」で大きな位置を占めた「消費文化へのアクセスが悪い」（その中でも「遊ぶ場所に乏しい」）を補償するような形で「特徴的な学校行事」が評価されていた。

第3に、生徒の地域（下川町）評価（「良いところ」「良くないところ」）は、「住むならこのまち」として下川町をポジティブに選択することには結びつかない。翻って、「地域の取り組みがある」ことを評価する生徒は、下川町以外に住むことと結びついていた。下川町には住まないからこそ、「地域の取り組みがある」ことを評価していた。そして、下川町に住むことには、「将来の居住地志向」が結びつく。すなわち、地域（下川町）への評価は、将来の見通し（未来の志向性）を媒介にして、住むことに結びつくと考えられる。

第4に、生徒の地域（下川町）の評価を特徴（「良いところ」「良くないところ」）と好悪の3択の関係を検討した。

63 頁の下川町の評価（3 択）と「良いところ」の関係の模式図（図表 2－2－2 5）、65 頁の下川町の評価（3 択）と「良くないところ」の関係の模式図（図表 2－2－2 8）にまとめた。

「良いところ」では、「好き」と「半々」の質的な違いが理解できた。よりポジティブな評価（「好き」）は、「地域の取り組みがある」、「良い町民関係」、「空気がきれい」を選択し、「半々」は相対的な評価であると考えられる「環境が良い」、「生活しやすい」を選択した。

「良くないところ」は、「好き」には関係がない。「半々」にのみ関係があった。このような意味で、「半々」というよりは「嫌い」の内容的な意味づけと考えられる。それは、「遊ぶ場所に乏しい」、「都市に比べて劣っている」、そして「自然が厳しい」であった。

第5に、これらのことから生徒の地域アイデンティティは、2つの核をもっていると考えられる。地域評価の二重構造に重なるものである。他地域との比較から構成される表層的な価値へのアイデンティティと地域生活に内在的な評価から構成される深層的な価値へのアイデンティティである。そして、前者が明らかに優勢であった。そして、地域アイデンティティ教育としての森林環境教育との関係については、この調査の分析水準では確認できなかった。

第3節 生徒の地域（下川町）アイデンティティの特徴——他の町村との比較（浅川）

前節において、下川中学校の生徒の地域理解の構造について明らかにしてきた。本節ではこれを相対化するために、2つの地域の中学3年生との比較を行う。そして、地域理解の構造の比較から、現時（「人口減少時代」、地域格差があからさまになった時代）における地方の生徒の地域アイデンティティの特徴についての仮説を得る。

ところで、比較する2つの地域はオホーツク支庁のO町・N村である。下川中学校は上川支庁に所在するため、これらとは支庁が異なる。しかし、場所的には近隣の町村の中学校であり、考察を深めるための素材になると考えた。何よりも、私たちが行った同じ問題意識に基づく調査であるため、データを揃えることができる。

具体的には、2016年に私たちが行ったO町O中学校3年生（単年度1校の1クラス¹）に行った調査の結果、2013年と2015年にN村N中学校3年生に行った調査（複数年度の同じ学校の1クラスずつ²）の結果との比較である。2地域、3事例との比較となる。

これらの調査は、北海道の地方における中学生の地域アイデンティティを検討するという一貫した問題意識の元に行われている。そのため地域評価を3択（「好き」、「半々」、「嫌い」）を選択させる方法、そして地域の「良いところ」と「良くないところ」を自由記述で問い、この自由記述の内容を区別と集約化によって分析する作業は、同じ手続きで行われている。そのため比較が可能であると考えている。

さらに比較を行う手順について、補足的な説明を行う。

まず、下川中学校も含めた4つの事例の地域評価（3択）の比較を行う。次に、4つの事例でそれぞれの生徒が考えた地域の「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリ・ラベルの対比図表を元にして、特徴を簡潔に説明する。同時に、直感的に対比を理解するために、「良いところ」を左辺に、「良くないところ」を右辺として描かれた「シーソー」（模式図）を確認する。最後に、「良いところ」と「良くないところ」のそれぞれを一覧的にまとめて、内容の共通点や相違点について考えることを通して、地方の生徒の地域アイデンティティの特徴について仮説を得る。同時に、それがどのような「圧力」のもとで構成されているのかについての考察を深める。

（1）地域評価（3択）の比較

下川中学校も含めた4つの事例の「地域評価（3択）」の結果を掲げておく（次頁の図表2-3-1）。それぞれの中学校では学年1クラスである。しかし、その規模は異なる。

¹ O中学校は1学年1クラスである。ちなみに、O町には2つの中学校がある。規模の大きい方がO中学校である。

² N中学校も1学年1クラスである。ちなみに、N村の中学校はN中学校1校である。

図表 2－3－1 地域評価（3 択）の比較

		「好き」	「半々」	「嫌い」	計
2018年度下川 中学校生徒	度数(人)	15	15	2	32
	内訳(%)	47	47	6	100
2016年度O中 学校生徒	度数(人)	12	11	1	24
	内訳(%)	50	46	4	100
2013年度N中 学校生徒	度数(人)	3	4	3	10
	内訳(%)	30	40	30	100
2015年度N中 学校生徒	度数(人)	8	2	1	11
	内訳(%)	73	18	9	100

N中学校のクラスサイズは小さい。両学年とも 10 人といったところである。O中学校は 20 人を超すクラスサイズになる。これらに比べるなら、下川中学校の 32 人は大きいと言わざるを得ない。余談となるが、この数（32 人）のおかげで、これまで不可能であった統計的分析の一部が可能になった。さらに補足しておく、N村の中学校はN中学校 1 校、O町にはO中学校の他にもう 1 校ある。そして下川町には下川中学校の 1 校がある。

「地域評価（3 択）」の結果の方に目を転じてみよう。かなり大きなバラツキがあることがわかる。

「地域比較（3 択）」を評価の高さという観点からみるならば、最も地域評価の高いのが、2015 年N中学校生徒である（「好き」が 73%）。そして、順に 2016 年度O中学校（「好き」が 50%）、2018 年度下川中学校（「好き」が 47%）、2013 年度N中学校（「好き」が 30%）と続く。

また、「嫌い」は一般的に選択されることはない。2013 年度N中学校のみが例外的に多い（「嫌い」が 30%）。そして「半々」は「好き」とほぼ変わらない形で選択される場合（2016 年度O中学校、2018 年度下川中学校、両者ともに低い敢えて 2013 年度N中学校をここに入れても良い）と、くい違う場合（2015 年N中学校生徒）からなる。

そして問題は、この「地域評価（3 択）」をそのまま鵜呑みにすることはできないことにある。すなわち、「3 択」の選択を迫ったとしても、生徒はその深層における評価を単純な評価に反映させるわけではない。また、「3 択」と評価内容（地域のことをよく知っているのかどうかも含めて）は相対的には別である。すなわち、媒介項があると考えた方が良い。

さらに、具体的な地域評価（「良いところ」「良くないところ」の自由記述の区別と集約化）に進んでみよう。検討の順序は、地域評価（3 択）の分布が下川中学校に近いと思われる 2016 年度O中学校、年度で大きく評価が分かれたN中学校の 2 つの年度、そして 2018 年度の下川中学校としよう。

（2）2016 年度O中学校生徒の地域理解（「良いところ」と「良くないところ」）の構造

調査は、2016 年度の 9 月に行われた。アンケート形式は共通するが、報告書末尾に掲げる資料中の「下川中学校で行われたアンケート」よりも豊富な調査項目からなっている。

簡単に違いを説明しておく、学校生活に関する質問項目が豊富であり、特に調査前に行われた卒業旅行に関する質問が設けてあった。○中学校の生徒は、修学旅行の際に町長から○町をPRする「観光特使」に任命され、JR 札幌駅周辺（アスティ4 5 地下）において○町の宣伝を行う³。このような点が異なる。

このような細かい事情を書いたのは、地域理解の構造にその影響が表れている可能性について説明しておく必要があると考えたからである。

中学生は修学旅行で自町の「良さ」について札幌市民に宣伝する。その際の「良さ」は○町特産の食品（ホタテ等の魚介類と牛乳・チーズ・ソフトクリーム・ハム等の畜産産品）のそれであり、生徒は自ら調べ、その成果を札幌市民に問う。そして、札幌市民の評判は非常に高い。生徒はその実感をもって、帰町するのである。これが○中学校の取り組みである。

図表 2－3－2 2016 年度○中学校生徒の
町の「良いところ」と「良くないところ」の対比

良いところ			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみがある	豊かな自然	10	42
	美味しい食べ物	9	38
	広いスペース	2	8
	自然への好アクセス	2	8
小計		23	96

生活が穏やか	人が優しい	6	25
	社会関係が良い	2	8
	生活しやすい	8	33
	小計		16

第一次産業が盛ん	盛況な酪農	2	8
	盛況な漁業	2	8
小計		4	17

地域の取り組みがある	充実した教育環境	2	8
	地域社会の取り組み	1	4
小計		3	13

複数回答総計		46	192
--------	--	----	-----

良くないところ			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に乏しい	8	33
	遊ぶ場所に乏しい	2	8
	不便	5	21
	人が少ない	2	8
小計		17	71

「ワクワク」感がない	田舎	2	8
	狭い	2	8
	情報に乏しい	1	4
	つまらない	1	4
	特徴がない	1	4
	ポケモンがいない	1	4
小計		8	33

田舎者性	低い環境意識	2	8
	排他性	1	4
小計		3	13

停滞する観光業		1	4
---------	--	---	---

自治体行政問題	計画性のなさ	1	4
	少ない予算	1	4
小計		2	8

特になし		3	13
------	--	---	----

複数回答総計		34	142
--------	--	----	-----

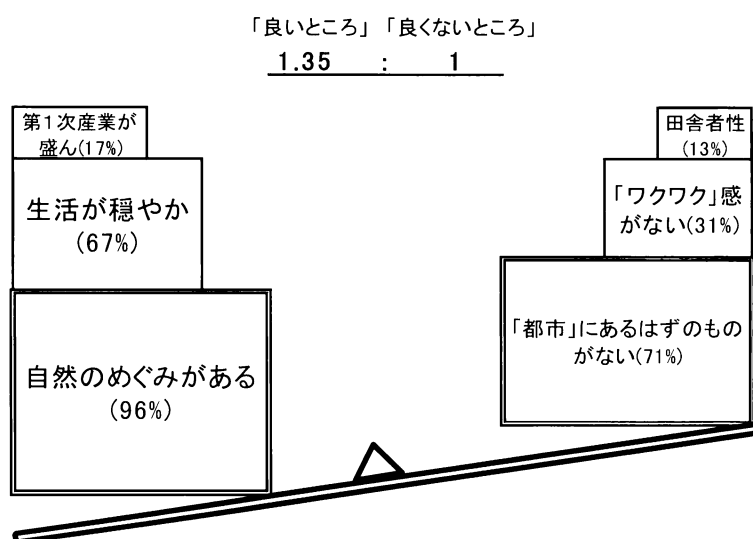
³ ○町であることが書き込まれた法被がプレゼントされる。学校で手作りのアクセサリを作成し、それを○町を札幌市民にアピールする際に配っている。

「良いところ」としては、第1に「豊かな自然」「美味しい食べ物」等のラベルからなる「自然のめぐみがある」カテゴリが強く指摘されていた（生徒24人中23件、96%。以下%の記述のみ）。この数え方は第1章で分析した際に説明した通りである。簡単に説明するとひとりの回答も複数回答的に扱っている。また度数は、要素の度数をそのまま単純に計上した形をとっている。第2に、「人が優しい」「生活しやすい」ラベル等からなる「生活が穏やか」カテゴリの指摘である（67%）。以上の指摘に止め、これ以下の量のものは説明を割愛する。

「良くないところ」としては、第1に「物を買う場所に乏しい」「不便」ラベル等からなる「都市」にあるはずのものが「ない」カテゴリの指摘である（71%）。これに「田舎」「狭い」ラベル等からなる「ワクワク」感がない」カテゴリが指摘される（33%）。

大きな対比の構造として把握するために、「良いところ」と「良くないところ」を左辺と右辺に見立てて、その釣り合いを「シーソー」（模式図）として表現してみよう。それが図表2-3-3である。

図表2-3-3 2016年度〇中学校生徒の対比模式図（主なもの）



「シーソー」には、カテゴリで10%を超える主なものだけを「載せる」（標記する）形で表現した。また、図表中央部に書かれた「良いところ」と「良くないところ」の比は、多い方の件数の総和を少ない方の件数の総和で除したものである。すなわち、「良いところ」の要素でカウントされた46件を、「良くないところ」の要素でカウントされた34件で除した1.35を、「1.35 : 1」と表記した（以下同様）。

これを見て分かるように、左辺の方が「下がっている」。すなわち、「良いところ」の方が多い。何と言っても「自然のめぐみがある」カテゴリが大きい。これに「生活が穏やか」カテゴリ、「第1次産業が盛ん」カテゴリが重なる。それが右辺の「都市」にあるはずの

ものがない」カテゴリ、「ワクワク」感がない」カテゴリ、「田舎者性」カテゴリを凌駕するのである。

○町の「地域評価（3 択）」では「好き」（50%）と「半々」（46%）が同程度支持され、「嫌い」（4%）は少なかった。その根拠という点でこの対比図をみると、「好き」の根拠がこのような形で存在することを直感的に理解できる。根拠は強い。同様に、「嫌い」の根拠もこのような形で存在する。

「地域評価（3 択）」において、「半々」が仮に右边と左边が釣り合う状態と考えるなら、○町の評価の場合「好き」が半数あるわけだから、「シーソー」左边が下がるという状況は、整合的な印象を受ける。

「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリ等の下川中学校との異同は4つの事例を比較する形で説明し直したい。しかし先取りの言え、ば、「良いところ」は下川町とほぼ同じカテゴリで構成され、「良くないところ」も重なる部分が多い。すなわち、地域の違いを越えて、似通っている。

敢えて違うところを上げるなら、○中学校の生徒では「美味しい食べ物」を上げる生徒が多かったことである。○町は、言わば生徒の「胃袋をつかんでいる」。

（3）2013 年度 N 中学校生徒の地域理解（「良いところ」と「良くないところ」）の構造

同様の順序で 2013 年度の N 中学校についても検討する。調査は 2013 年度の 8 月に行われた。インタビュー形式である点が異なる。報告書末尾に掲げる資料中の「下川中学校で行われたアンケート」よりも遥かに豊富な質問内容からなっている。簡単に違いを説明しておく。项目的には学校生活に関する質問が非常に豊富であった。これは、地域アイデンティティの根拠となると考えられる生徒の生活を、地域生活の水準と学校生活の水準で理解する必要があるという問題意識に原因があった。

下川中学校や○中学校との教育実践の違いという点で、地域アイデンティティに関わることを 1 点上げておかなければならない。それは N 中学校では、地域アイデンティティに焦点をあてた実践（行事等）をおこなっているわけではないことである。その点が、○中学校や下川中学校と大きく異なる。

次頁の図表 2－3－4 が、2013 年度 N 中学校生徒の村の「良いところ」と「良くないところ」を、カテゴリとそれを構成するラベル・要素も含めてまとめたものである。

「良いところ」でカテゴリが要素をまとめた形となっているのは、中間的に集約するラベルを作ることが難しかったからである。そのため、「良いところ」ではカテゴリー要素で系列が編成され、「良くないところ」ではカテゴリーラベルで系列が編成されており、非対称である。

「良いところ」としては、第 1 に「インターネットが無料」等の要素からなる「環境が良い」カテゴリが指摘されていた（生徒 10 人中 6 件、60%。以下%の記述のみ）。第 2 に、「人との関わり」等の要素からなる「生活しやすい」カテゴリ（30%）、「自然が多い」等の

要素からなる「自然のめぐみがある」カテゴリ（30%）が指摘されていた。

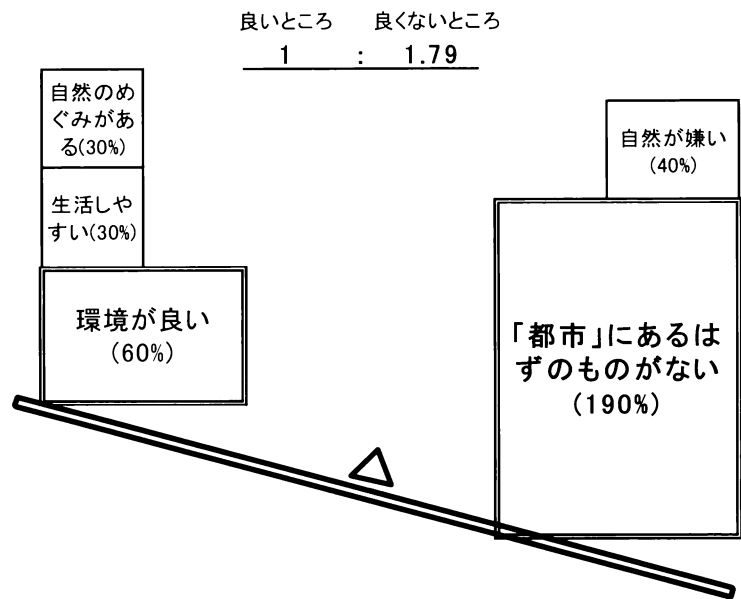
図表 2－3－4 2013 年度 N 中学校生徒の
村の「良いところ」と「良くないところ」の対比

良いところ				良くないところ			
カテゴリ	要素	度数(件)	内訳(%)	カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
環境が良い	遊びやすいところ	1	10	「都市」にあるはずのものが ない	物を買う場所に乏しい	7	70
	人が少ない	1	10		遅い(速さが無い)	1	10
	時間がゆっくり流れる	1	10		遊ぶ場所に乏しい	5	50
	静か	1	10		不便	4	40
	インターネットが無料	2	20		移動制限	1	10
小計		6	60		人がいない	1	10
				小計		19	190
生活しやすい	人との関わり	1	10				
	犯罪とか事件事故がない	1	10				
	住みやすい	1	10				
小計		3	30				
自然のめぐみがある	空気がおいしい。水がおいしい	1	10				
	自然が多い	2	20				
小計		3	30				
なし		2	20				
複数回答総計		14	140				

て補足しておきたい。1 人の生徒がおよそ 2 件を上げたことや、生徒がある種の「不当性」を訴えているというニュアンスを考慮したものである。そこが「あるはずのものが無い」という強い表現になっている理由である。他の事例と比較するなら、底流に存在する「気持ち」をより純化したと言える内容と考えた。「気持ち」とは、下川中学校の「良くないところ」のカテゴリにもあった「消費文化へのアクセスが悪い」を例にとると、これがただ「悪い」に止まらず、アクセスが「本来良くて当然なのに悪い」というニュアンスが入っているのである。

これも大きな対比の構造として把握する。それが図表 2－3－5 である。

図表 2－3－5 2013 年度 N 中学校生徒の対比模式図（主なもの）



これを見てすぐ分かるように、全く釣り合っていない。右辺の方が極端に「下がっている」。単純な比でも 1 : 1.79 である。言うまでもなく「良くないところ」の方が遥かに多い。何と言っても「「都市」にあるはずのものが無い」カテゴリが巨大である（190%）。これに「自然が嫌い」カテゴリが重なる（40%）。これが左辺の「環境が良い」カテゴリ（60%）、「生活しやすい」カテゴリ（30%）、「自然のめぐみがある」カテゴリ（30%）を遥かに凌駕する。

2013 年度 N 中学校生徒の「地域評価（3 択）」では「好き」が 30%と低かった。前項と同様に、仮に「半々」で右辺と左辺が釣り合うと考えるなら、「好き」と「嫌い」が同数なら形式的には釣り合いそうな気がする。しかし、全く釣り合っていない。「好き」の根拠となる「良いところ」が薄弱であるのに対して、「嫌い」の根拠となる「良くないところ」具体的で厳しい。その結果「地域評価（3 択）」の結果は「シーソー」（模式図）と対応しない。あるいは、「地域評価（3 択）」のバランスが釣り合う状態とは、模式図では右辺が下

がる（「良くないところ」が多い）状態、言い換えると「地域評価3択）」でかなり「好き」に偏った状況で、始めて「シーソー」（模式図）としてはバランスが釣り合うと考えなければならぬということである。

このように評価の数字という点で格段の違いを上げることはできるが、共通する核をもっていることも了解できる。

（４）2015 年度N中学校生徒の地域理解（「良いところ」と「良くないところ」）の構造

同様の順序で、N中学校の2015年度の生徒の調査結果についても検討する。この調査は、2015 年度の 9 月に行われた。2013 年度と同じくインタビュー形式で行われた。目的や質問項目の違いも同様である。また、N中学校では、地域アイデンティティに焦点をあてた行事をおこなっていない点も同様である。

図表 2－3－6 が、2013 年度N中学校生徒の村の「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリとラベルをまとめたものである。多い順に上げてみよう。

図表 2－3－6 2015 年度生徒の
N村の「良いところ」と「良くないところ」の対比

西興部村の「良いところ」				西興部村の「良くないところ」			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)	カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
生活が穏やか	人が親切	1	9	不便			
	社会関係が良い	2	18				
	安全	2	18	村の特徴が嫌い	人口構成の偏り	3	27
	生活しやすい	3	27		産業の問題	1	9
小計		8	73		遠距離通学	1	9
				小計		5	45
自然のめぐみがある	豊かな自然	2	18	自然が嫌い			
	自然産品がある	1	9				
小計		3	27				
体験可能性がある		1	9				
自治体の取り組みがある		3	27	村内の対立		2	18
なし		2	18	自治体が良くない		1	9
複数回答総計		17	155	なし		1	9
				複数回答総計		16	144

「良いところ」としては、第1に「生活しやすい」「社会関係が良い」等のラベルからなる「生活が穏やか」カテゴリが指摘されていた（生徒 11 人中 8 件、73%。以下%の記述のみ）。第2に、「豊かな自然」等のラベルからなる「自然のめぐみがある」カテゴリ（27%）や、「自治体の取り組みがある」カテゴリ（27%）が指摘されている。「なし」も 18%あった。

「良くないところ」としては、第1に「人口構成の偏り」ラベル等からなる「村の特徴

が嫌い」カテゴリの指摘がある（45%）。第2に「不便」カテゴリ（36%）、第3に「自然が嫌い」カテゴリ（27%）、第4に「村内の対立」カテゴリ（18%）が指摘される。

すなわち2013年度の生徒と比較して2015年度の生徒は、「良いところ」が積極的な意味に代わり、「良くないところ」で地域に住むことの「不当性」（「本来あつて当然」なのにな）を主張することがなくなり、事実としての問題指摘に、言わば「穏当化した」のである。

N村の状況で劇的に変わったことは何もない。しかし2つの点を、補足的に指摘しておきたい。第1に、生徒の将来志向の明解度が2つの学年で全く違うことが関わっていると思われる。第2に、中学校卒業後の進路が違うことが関わっていると思われる。すなわち、未来の見通しが、地域評価に参照されているのではないかと考えた。

2013年度の場合は、通学圏の高校に進学する生徒が過半を占めた⁵。70%であった。しかし2015年度の場合は通学圏の高校ではなく、離村して通学圏外の高校に進学した生徒が多かった。55%もいた。これらの違いの背景には、保護者の職業の違いがある。

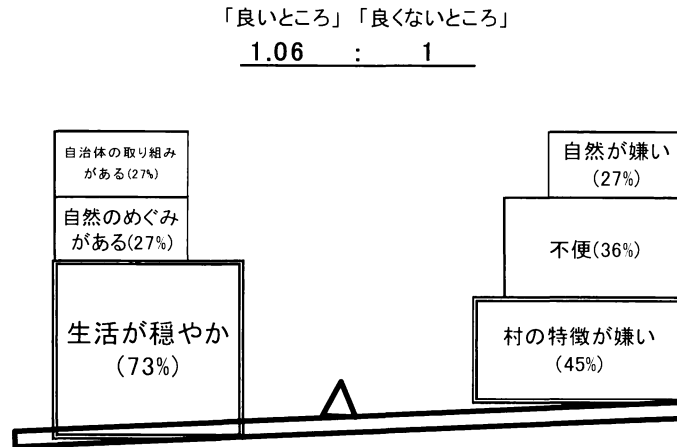
さらに通学圏外の高校に進学するという選択とそれを裏づける考え方は、さらにその先の高校進学後の進路志向、将来の居住地志向、職業志向、将来生活志向にも影響が及んでいた。

2015年度の生徒には、これらの志向相互をつなげた比較的一貫した将来志向があった。未来を見つめていたとも言える。そしてその見つめた未来から、現在の村の生活を振り返って（地域）評価をしていたと考えた。2013年度の生徒は、高校時代も村に住み続けることを受け入れなければならない（現在の不満足な状態が続く）状況で、将来の居住地志向のみが、すなわち「村を出て行くこと」だけが明確になっていた。

これも大きな対比の構造として把握する。それが次頁の図表2－3－7である。

⁵ N村には高校はない。近隣の〇町の〇高校、あるいは下川町の下川商業高校が近隣となる。そこから少し離れた名寄市の名寄高校・名寄産業高校や紋別市の紋別高校には自宅から通学は可能である。但し、バスでの遠距離通学となる。それ以外は、通学区に入っている現実的には通学が困難である。これ以外の高校に進学する場合は、N村を離れ、親戚等の家から通う、下宿や寮に入ることになる。

図表 2－3－7 2015 年度 N 中学校生徒の
対比模式図(主なもの)



これを見て分かるように、ほぼ釣り合っている。単純な比でも 1.06 : 1 である。「地域評価（3 択）」では「好き」が 73%と多かった。だからと言って左辺が格段に下がる訳ではない。しかし、2013 年度とは全く異なる。「半々」（18%）と「嫌い」（9%）は少ない。

「地域評価（3 択）」との整合性という点では、もっと左辺が下がって良いと考えられそうだが、そのようなことはない。すなわち、年度を越えて N 中学校に共通する事としては、基本的に右辺（「良くないところ」）が下がる（多い）のである。しかし、2015 年度の生徒の場合は、そのことを埋め合わせるものがあつた。

まず、「良いところ」の根拠という点で、2013 年度と異なりポジティブである。説明は割愛するが、村社会の共同的な生活への「コミットメント」がうかがわれる内容であつた。次に、「良くないところ」の根拠は前述したように、2013 年度から地域に住むことの「不当性」（「本来あつて当然」なものがない）が脱落した内容となつた。

ところで、「良いところ」カテゴリは、これも他町の異なる学年とも類似するかのようなカテゴリで構成されている。「良くないところ」は、より和らいだとも言える内容である。しかしここでも、地域の違いを越えて似通っていると考えることができよう。

さらに N 中学校の事例研究で重要だと考えた点を 1 点指摘しておく。「良いところ」の「自治体の取り組みがある」カテゴリや「良くないところ」の「村内の対立」カテゴリには、村社会の共同的な生活への「コミットメント」による裏づけがあつた。しかし、この「コミットメント」は、良い評価にのみ表れるとは限らない。「コミットメント」があるからこそ、「良くないところ」も見えてしまう。しかし、生徒に地域社会の共同的な生活を美化して伝える必要はないのではないだろうか。「村の若き担い手」として中学生を遇するのであれば、両面の評価（「酸いも甘いも」）が必要である。2015 年度の生徒の理解は、このようなものであつた。

（５）2018 年度下川中学校生徒の地域理解（「良いところ」と「良くないところ」）の構造

同様の順序で下川中学校の 2018 年度の生徒の調査結果についても検討する。

図表 2－3－8 が 2018 年度下川中学校生徒の村の「良いところ」と「良くないところ」のカテゴリとラベルをまとめたものである。多い順に上げてみよう。

図表 2－3－8 2018 年度下川町生徒の町の
「良いところ」と「良くないところ」の対比

下川町の良いところ				下川町の良くないところ			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)	カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみ	豊かな自然	25	78	自然が厳しい		4	13
	美味しい食べ物	1	3				
	小計	26	81				
生活が穏やか	良い町民関係	4	13	消費文化へのアクセスが悪い	物を買う場所に乏しい	10	33
	生活しやすい	4	13		遊ぶ場所に乏しい	10	33
	環境が良い	3	9	小計		20	67
	小計	11	34				
林業が盛ん		1	3	都市に比べて劣っている		3	10
地域の取り組みがある		6	19	自治体行政問題		9	30
				特になし		1	3
複数回答総計		44	138	複数回答総計		37	123

※ ラベルの度数はそこに含まれる要素の重複を排除している。そのため元になった図表1-9と1-11からは若干異なる。

※ また「良くないところ」の内訳(%)は、図表1-11の「N.A.」2人を除き、母数30人で除している。

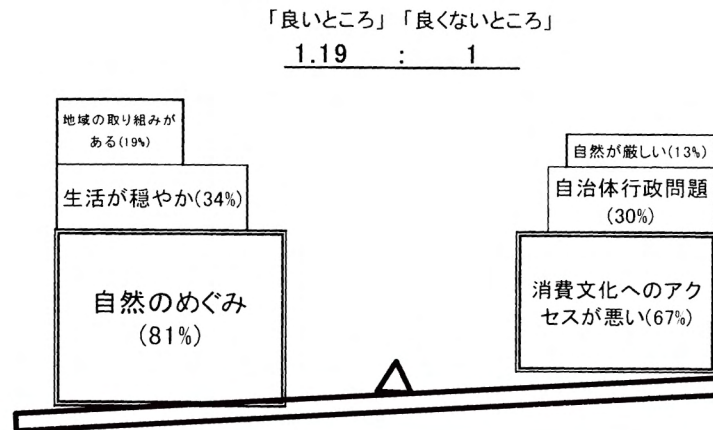
「良いところ」としては、第1に「豊かな自然」ラベルからなる「自然のめぐみ」カテゴリが指摘されていた（生徒 32 人中 26 件、81%。以下%の記述のみ）。第2に、「良い町民関係」等のラベルからなる「生活が穏やか」カテゴリ（34%）や、「自治体の取り組みがある」カテゴリ（19%）が指摘されている。

「良くないところ」としては、第1に「遊ぶ場所に乏しい」ラベル等からなる「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリの指摘である（63%）。第2に「自治体行政問題」カテゴリが指摘される（28%）。第3に「自然が厳しい」カテゴリ（13%）である。

ここでも大きな対比の構造として把握するために、「シーソー」（模式図）として表現してみよう。それが次頁の図表 2－3－9 である。

これを見て分かるように、左辺が下がる。単純な比で 1.19:1 である。「地域評価（3 択）」では「好き」と「半々」が 47%と同数であった。「半々」が右辺と左辺の釣り合う状態であると仮定すると、「好き」が多いので、〇中学校同様にもう少し下がっても良さそうだ。しかし、そうではない。

図表 2－3－9 2018 年度下川中学校生徒の
対比模式図(主なもの)



「良いところ」第1位の「自然のめぐみ」が大きく、「良くないところ」第1位の「消費文化へのアクセスが悪い」を上回っている。第2位の「生活が穏やか」と「自治体行政問題」を比べても、前者は後者を上回る。これは第3位同士でも同じである。

ここまで模式図で見てきたように、2013 年度N中学校の生徒以外では、「良いところ」の方が「良くないところ」を上回る（左辺が下がる）形となっていた。しかし、「地域評価（3 択）」と比較するなら、O中学校以外では「良いところ」がかなり多い形で指摘されるわけではなかった。とは言っても2つの事例にすぎないので一般化はできないのかもしれない。しかしながら、「地域評価」は「模式図」として整理するよりも、「3 択」での問い方の方が肯定的（「好き」側に傾く）に答えがちなのではないかと推測できる。

「良いところ」と「良くないところ」の内容・量の比較については項を改めて考えよう。

（6）「良いところ」と「良くないところ」の対比の構造を貫くもの

この項では、「良いところ」と「良くないところ」別に事例を比較する形で質的な共通性と量的な多寡について、集中的に議論することにしたい。

まず、「良いところ」である。まとめたのが次頁の図表 2－3－10 である。事例ごとに作成されたカテゴリを、参照領域を区別して並べ直したものである。

図表 2－3－10 「良いところ」カテゴリ・内訳(%)の事例比較

	2016年度O中学校		2013年度N中学校		2015年度N中学校		2018年度下川中学校	
	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)
自然評価	自然のめぐみがある	96	自然のめぐみがある	30	自然のめぐみがある	27	自然のめぐみ	81
生活評価	生活が穏やか	67	生活しやすい	30	生活が穏やか	73	生活が穏やか	34
			環境が良い	60				
産業評価	第1次産業が盛ん	17					林業が盛ん	3
地域の取り組み評価	地域の取り組みがある	13			自治体の取り組みがある	27	地域の取り組みがある	19
体験可能性評価					体験可能性がある	9		
なし			なし	20	なし	18		
計		192		140		155		138

※ 単純計と「計」が四捨五入の関係で合わない場合がある。

参照領域は、「自然評価」、「生活評価」、「産業評価」、「地域の取り組み評価」、「体験可能性評価」、「なし」を区別した。この参照領域は、暫定的なものである。

第1に、「自然評価」を上げることができる。4つの事例全てに共通する。

これには、それぞれの地域の単純な自然の豊かさ（自然が多い・豊か、空気がきれい・良い・美味しい）だけではなく、それから得ることができる物産への評価（乳製品・畜産品、水産物）が存在する場合は加算されるものとして考えることができる。そのために、それぞれの地域の産業の有無と関係することになる。O中学校の場合が正にそれで、加算されている。しかしN中学校の生徒は、O中学校の生徒同様に「酪農専業地帯」のN村で生活していても、N村の乳製品を飲む・食べることができない。すなわち加算されない。産業の6次化の影響は大きいし、前述したようにO中学校ではそれをPRすることが町の振興にも位置づいている。下川町では森林環境教育を背景に、前者の中でも「空気がきれい」が強調されているという特徴があるが、「食べ物」のような見えるものではないし、まして「味わえる」ものではない。すなわち、生徒にとっての地域アイデンティティの資源と考えた場合、どこにでも存在するものではない。

第2に、「生活評価」を上げることができる。これも4つの事例に共通する。質的な差については、個別に指摘した。生活における地域への「コミットメント」の有無を背景として、積極的なものから、消極的なものという「濃淡」をもっていると考えられる。より端的な言い方をすると地域に住んでいても、「地域に住んでいない」場合もある。地域のことを知識として知っていたとしても、それだけでは消費文化の強力な浸透力に対抗することは難しい（後述）。

第3に、「産業評価」である。これは、O町と下川町の産業への評価である。N村は酪農と福祉産業を地域の雇用の柱としているが、生徒に評価されていない。

第4に、「地域の取り組み評価」である。2013年度のN中学校の場合はなかった。しかしこの事例の場合で重要なことは（自治体やNPOも含めた）村の取り組み（端的には、行

事)の有無と直接関係があるわけではないことである。N中学校では地域アイデンティティを育む取り組み特徴的な実践をしていなかったが、N村自体は役場や青年会を中心に様々な取り組みを行っていた。生徒がどのような構えで生活をしていたのか、そのスタンスが影響している。このような意味で、「生活評価」に連動する。

第5に、「体験可能性評価」である。数は少ないが、2015年度N中学校生徒の場合にのみある。非常に興味深い事例なので、具体的なインタビューへの回答も上げておこう。「都市だったら体験できないことができる。」である。2013年度N中学校生徒の「都市」にあるはずのものが無い」カテゴリの、ちょうど逆のような内容である。これは、2015年度N中学校生徒の「自治体の取り組みがある」の高い評価とも関係している。第1章では、下川町にいるから「できること」として分析した。

第6に、「なし」である。「良いところ」は「ない」というもので、N中学校の生徒の場合のみで表明される。

以上の検討を経て、生徒は「自然のめぐみ」と「生活が穏やか」という2つの「良さ」を地域アイデンティティの資源(核)として考えていることがわかる。一般化できるかどうかという点でさらに事例を積み重ねる必要があるだろうが、地方の生徒の考える「地元」の良さ、地域へのアイデンティティがここにあることは間違いないだろう。

そして前者は、地域の自然自身と、存在する場合はそれを生かした第1次産業産品の評価が加算される。そして後者は、都会とは異なる地方社会の「穏やかさ」を背景とするものの、地域への「コミットメント」の有無によって大きく「濃淡」を持つ。後述するがここが弱い(淡い)場合は、「都市」との比較的劣位(「都市」にあるはずのものが無い)の中での消極的な評価に後退してしまう(2013年度のN中学校の場合)。「都市」にはない「可能性のある場所」として「言語化」してとらえることができる場合は、極めて限られるが「都市」との比較的劣位(「都市」にあるはずのものが無い)に抗することができる(後述)。すなわち、地域への「コミットメント」を背景とした独自の視点が獲得できると、「地域の取り組み」をみる見方が消極的な、極端な言い方からすると「お客様」見方から脱却できる可能性がもてる⁶。

量についても検討する。

「自然評価」については、2016年度O中学校(96%)>下川中学校(81%)>2013年度N中学校(30%)≒2015年度N中学校(27%)、となる。大きな差がある。

「生活評価」については、2013年度N中学校(90%。ただし内容的には消極的)>2015年度N中学校(73%)≒2016年度O中学校(67%)>下川中学校(34%)、となる。ここにも大きな差がある。

⁶ ここでの「コミットメント」は関わる中で環境を変えることができるという実感を伴う点で重要であった。だから、自然領域から社会領域まで様々な領域の「コミットメント」が考えられる。そして2015年度N中学校の事例の場合は、その「コミットメント」を支えるもの(人)が家族や仲間によっていた点が重要であった。個人(単体)の「コミットメント」ではなく、それが集合での「コミットメント」であった。

残りの評価は、存在する場合と存在しない場合がある。

「地域の取り組み評価」のみ上げておこう。これは、質の違いも考慮しなければなら
ないし、「体験可能性評価」との関係もある。とりあえず単純に合算して比較するなら、2015
年度N中学校（36%）>下川中学校（19%）≒O中学校（13%）>2013年度N中学校（0%）、
となる。ここにも大きな差がある。

すなわち、地域の「良さ」という点から言えば、生徒の地域アイデンティティは、評価
の「参照領域」において部分的に共通性をもっている。しかし、「良いところ」の内容はそ
れぞれで異なる。「十把一絡げ」にはできない。

さらに、「良くないところ」別に検討してみよう。図表2-3-11が「良くないところ」
カテゴリ・内訳(%)の事例比較である。

参照領域は、「地域社会評価」、「自然評価」、「産業評価」、「自治体評価」、「なし」を区別
した。この参照領域も、暫定的なものである。

図表2-3-11 「良くないところ」カテゴリ・内訳(%)の事例比較

		2016年度O中学校		2013年度N中学校		2015年度N中学校		2018年度下川中学校	
		カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)
地域社会評価	「都市」との比較	「都市」にあるはずのものが無い	71	「都市」にあるはずのものが無い	190			消費文化へのアクセスが悪い	67
		「ワクワク」感がない	33					都市に比べて劣っている	10
		田舎者性	13						
	村の特徴					不便	36		
						村の特徴が嫌い	45		
						村内の対立	18		
自然評価				自然が嫌い	40	自然が嫌い	27	自然が厳しい	13
産業評価		停滞する観光業	4						
自治体評価		自治体行政問題	8	自治体が良くない	10	自治体が良くない	9	自治体行政問題	30
なし		特になし	13	なし	10	なし	9	特になし	3
計			142		250		144		116

※ 2015年度N中学校については、「N.A.」を除いたため、計が異なっている。

※ 単純計と「計」が四捨五入の関係で合わない場合がある。

第1に、「地域社会評価」である。これは「良いところ」の「生活評価」の裏面的な意味
をもっていると考えられる。しかし、「生活評価」が広めの生活実感、あるいは生活体験と
結びついたものであるのに比べて、もっと抽象的で地域社会全体を「値踏み」するような
ニュアンスをもった評価であると考えられる。

内容から考えて2つに大別する必要があると考える。ひとつは「都市」との比較という
言葉で括れる、そして劣位に位置づけられてしまう「地域社会評価」である⁷。もうひとつ

⁷ 「都市」との比較であるが、ここでの「都市」とは札幌や東京のような大都市をイメージするものではないことが重要である。生徒が引き合いに出した例をみても、「イオンがない」「カラオケがない」等の郊外型店舗や集団で遊ぶ場、あるいはコンビニや本屋等の地方都市がイメージされている。そのような場所でも揃うべきである。しかしそれがないという意味である。すなわち、社会的標準仕様とも言えるべきもの

は「都市」と比較してどうなのか、というニュアンスが抜けたものである。この場合は、地域に住むことの「不当性」（「本来あつて当然」なのにな）を主張することがない。しかし、この4つの事例では2015年度N中学校の場合だけであるため、一般的なものと言えるのかどうかに疑念がないわけではない。

また、前述したように地域への「コミットメント」の有無が関わる。ここが弱い場合には、「都市」との比較的低位（「都市」にあるはずのものがない）が強調されることになる（特に、2013年度のN中学校の場合。しかしO中学校、下川中学校も共通する）。そして「都市」にはない「可能性のある場所」として「言葉化して」とらえることができる場合、「都市」との比較的低位（「都市」にあるはずのものがない）に抗することができる。その場合に、「村の特徴」となった（「都市」との比較というニュアンスが抜けた）。詳細は割愛するが、このN中学校の調査研究の報告書においては、2015年度の生徒の特徴を、2013年度の生徒とは異なって「機能的」な観点から村評価をしていると表現した。

そしてN村は地域アイデンティティを積極的に育むような特徴的な取り組みを、学校で行っているわけではない点も重要である。学校経由ではない。本論に戻ろう。

第2に、「自然評価」である。「自然が嫌い」カテゴリや「自然が厳しい」カテゴリからなる。O中学校にはなかった。

第3に、「産業評価」である。これは上記とは逆に、O中学校にしかなかった。

第4に、「自治体評価」である。

第5に、「なし」がある。

以上の検討から、「良いところ」と「良くないところ」の参照領域は対応していることが分かった。これを確認しておく。

共通しているものは、「自然評価」と「産業評価」である。

そして「良いところ」と「良くないところ」で焦点が少しズレていると思われるものがある。「良いところ」－「良くないところ」という書き方をすると、「生活評価」－「地域社会評価」のセット、「地域の取り組み評価」－「自治体評価」のセットである。

そして「良いところ」の「体験可能性評価」には対応するものがない。しかし、これが「良くないところ」の「地域社会評価」とりわけ「都市」との比較の裏面であると考えることができるかもしれない。このように考えるなら、「生活評価」＋「体験可能性評価」－「地域社会評価」と整理し直すことができる。

すなわち、生徒の地域評価は、地域を越えて、概ね共通するフレーム（枠）でなされている。

量についても検討する。

「地域社会評価」については、2013年度N中学校（190%）＞2016年度O中学校（117%）＞2015年度N中学校（99%。ただし内容的は機能化している）＞下川中学校（72%）、となる。

がイメージされていて、それを満たしていないと評価しているのである。これをさらに抽象化させると「ワクワク」感がない」になるし、より露骨にすると「都市に比べて劣っている」となる。

大きな差がある。

「自治体評価」については、下川中学校（28%）＞2013年度N中学校（10%）≒2015年度N中学校（9%）≒2016年度O中学校（8%）、となる。ここにも差がある。

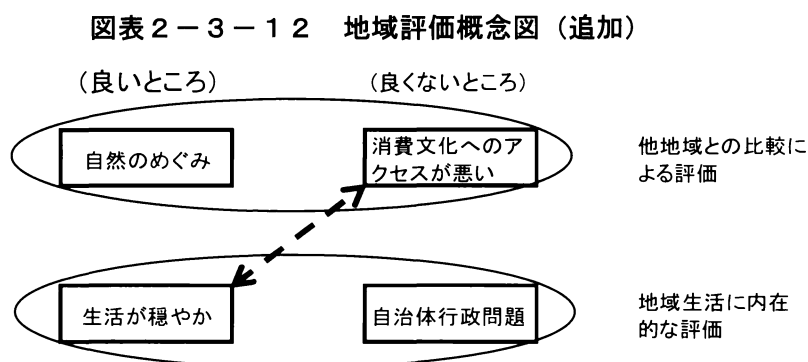
残りの評価は、存在する場合と存在しない場合がある。

「自然評価」のみ上げておこう。これは、質の違いも若干ありそうだ。2013年度N中学校（40%）＞2015年度N中学校（27%）＞下川中学校（13%。ただし「自然が厳しい」カテゴリであった）、となる。ここにも差がある。

すなわち、「良くないところ」での生徒の地域アイデンティティは、地域評価において「参照領域」共通性をもつ（参照領域が共通していることと違いがあることは両立していると理解している）。また、「良くないところ」の中心は同一である。「都市」という鑑を通して、地域を劣位に位置づける。この評価が成り立つのは、消費文化という共通の土俵が生徒に形成されているからである。

（7）小括——地域アイデンティティに刻み込まれた地域格差を変革するために

ここまでの議論を、第2節の図表2-2-15（54頁）を補助線にしてまとめてみたい。ただし、図表に追加をした（図表2-3-12）。



要点は2つあった。

ひとつは、「良いところ」と「良くないところ」を貫く2つのカテゴリのセットがあったことである。「自然のめぐみ」カテゴリと「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリのセットと、「生活が穏やか」カテゴリと「自治体行政問題」カテゴリのセットである。

もうひとつは、この2つのセットにおいて「消費文化へのアクセスが悪い」カテゴリと「生活が穏やか」カテゴリの関係が負である（対抗している）ことであった。

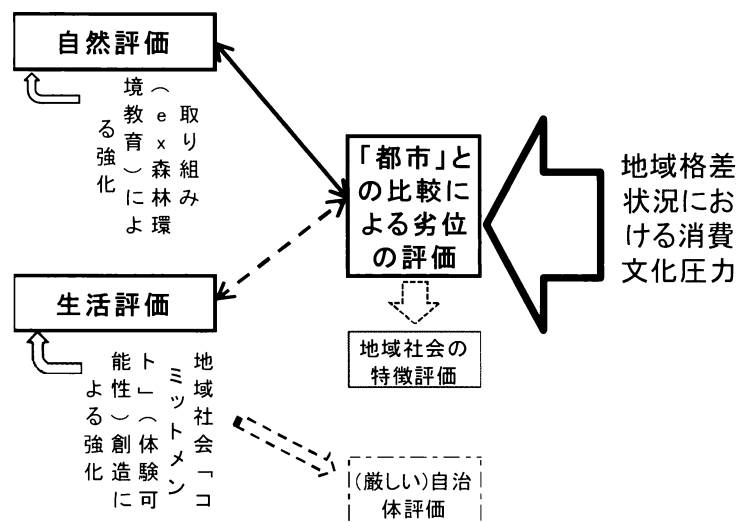
すなわち、他地域との比較による評価と地域生活に内在的な評価の2つの評価の対抗関係として理解できるということである。生徒の地域アイデンティティは、他地域との比較という評価と地域生活に内在的な評価の間でせめぎ合っていると考えられる。

これを前項の地域アイデンティティの参照領域として当てはめるなら、前者は「自然評

価」と「地域社会評価」を参照するということであり、後者はより多面的に「生活評価」・「地域の取り組み評価」・「体験可能性評価」と「自治体評価」を参照するということになるだろう。すなわち、生徒は自らの地域アイデンティティを形成する際に、「良いところ」（他者から言えば注目させたいところ）だけではなく、その裏面を同時に参照することを意味している（あるいは、それがあって始めてリアルな参照となる）と考える必要があるのではないだろうか。

4つの事例から考えたことを盛り込んで、このせめぎ合いと変革が可能であるとすればどのようなことを考えなければならないのかを仮説的に提案してみたい。それが図表2-3-13である。

図表2-3-13 消費文化圧力の下での地域アイデンティティと変革（仮説）



生徒の地域アイデンティティのせめぎ合いは、以下のように考えられる。

生徒は、地域格差状況において消費文化圧力を受けている。言い換えるなら、消費文化によって陶冶されている。ここには、家族文化や地域文化の抵抗力も関わっているが、消費文化圧力の方が強力であると考えて良い。この圧力の下で、「都市」との比較による劣位の評価」を地域に与えてしまう。

生徒は地域に住んでいるため、2つの意味で自然評価をもつ。ひとつは「都市」にないものの補償的な意味合いとしての「自然評価」である。「イオンはないが、森林がある」的な理解である。もうひとつは、補償的ではない「自然評価」である。補償的ではない「自然評価」をもつためには、消費文化の評価平面を離れる必要がある。ここでしかできない、「お金には換えがたい体験」（しかも、「協働的な体験」）が重要となる。ここに取り組み（下川町の場合は森林環境教育）が関わってくる。しかしながら、補償的と指摘したように「自然評価」は「都市」との比較による劣位の評価」と両立しうる。

さらに生徒は地域に住んでいるため、「生活評価」をもつ。そして「生活評価」は「「都市」との比較による劣位の評価」に対抗的な意味をもっている。そして2015年度N中学校の事例で説明したように、地域社会「コミットメント」により強化しうる。特に、地域社会の可能性が広がるような「コミットメント」の体験が重要である。その場合は、「「都市」との比較による劣位の評価」から、「「都市」にあるはずのものが~~ない~~」という点が脱落する、すなわち「都市」との比較というニュアンスが抜け落ちる可能性が生まれる。そうなった場合は、地域社会の機能的な特徴が残る。しかしながら、この強化は同時に、だからこそ「自治体評価」が辛くなることも意味する。すなわち、生徒が「自治体民主主義の質を問う」わけだ。「シティズンシップ教育」が地方でこそ求められる根拠は、この点にあると考えられるだろう。

私たちが4つの事例の検討を踏まえて考えたことは、このような「仮説」である。確かに、2015年度N中学校の事例の一般化がどの程度可能か、という問題は残る。しかしながら、図表2-3-12(83頁)の「地域評価概念図(追加)」とも整合的であると考えている。要するに、地方の生徒の地域アイデンティティを育むための鍵は、地域に内在的な評価を深めることにある。

このようなことを考えた時、学校がなしうることは何か。これについては、「おわりに」で提案する。

第4節 下川中学校3年生の将来志向の構造について—男女差を中心に(学生担当分割愛)

おわりに——まとめと今後の課題

最後になるが、学校がなしうること（可能性）について幾つかの提言をする。しかし、これはいささか拙速かもしれないとも思う。4事例の検討にしか過ぎないからである。

私の手元には、調査をさせていただいたが報告できていない高校生の「声」もある。これらを加えてゆく作業が残っている。

しかし、生徒調査をさせていただいたお礼という訳ではないが、多少の背伸びをして提言を行ってみたい。

84頁の図表2-3-13を素材にしよう。

北海道の地方において、生徒が自らの地域アイデンティティを形成する環境には、既に「地域格差状況における消費文化圧力」が働いていると理解する必要がある、というのが本報告書の知見であった。生徒はこの圧力のもとで、「都市」との比較を根拠に「地域が劣っている」という評価をする。これをどのように変えことができるかを考えたい。しかし、このことは地方のためという意味に止まらない。生徒にとっての意味を考えなければならない、というのも本報告書の知見である。

それは、「地域が劣っている」という評価が発条^{ばね}になって「下川町から出て戻ってこない」と考えることが（それ以外のことを考えなくても）、将来を考えていると思ってしまう状況が、特に男子生徒にあるからである。単純化すると、未分化な進路意識は「地元を捨てる」ことに簡単に結びついてしまう。

この流れを変える方法の中で主流のものは、「自然評価」を増量することである。模式図の「シーソー」の左辺を重くする方法である。「地域体験学習」に学校が取り組むべき根拠はここにある。O町や下川町でも採っていた方法論でもある。しかしながら考えなければならないのは、この方法論は評価のバランスを変えることはできる（O町と下川町の取り組みから実証済み）が、それは「地方が劣っている」という評価を解体する機能をもっていないということである。この取り組みを否定するつもりは、毛頭ない。O中学校の生徒がO町にもっていた「プライド」はこの実践を根拠にしていた。

しかしここで提案したいのは、「生活評価」を「地域社会「コミットメント」（体験可能性）創造」によって強化するという方法論である。意図的な実践によって生じた結果ではないが、2015年度のN中学校の生徒に生じていたことであった。しかしこの方法論は同時に、「自治体評価」（厳しい目）も育てることにもなる。生徒が地域を知ることは、「良い面」に限定することはできない。深く知るなら、「酸いも甘いも」になってしまうと考えるべきである。学校にできることは、「シティズンシップ教育」であると考えるが、学校の枠を飛び出して、「若き町民」として町を知り、参加・参画するためには多様な取り組み（例えば、「子ども議会」¹、「地域新聞づくり」²等）が試みられて良いと考える。まだ、ほとんど手

¹ 少し古くなるが、2017年の北海道新聞のデータベースを検索した結果では、知内町、木古内町、中標津町で「中学生議会」が、新得町、壮瞥町では「子ども議会」が、「中学生と支庁が語る会」が歌志内市で行

がついていない教育のフロンティアである。

この両面（「酸いも甘いも」）を睨みながら、地域社会に内在的な要素を強化することである。さらに「自治体評価」と連動していることに示唆されるように、「生活評価」と言っても個人的な（個別の家族の）快適な生活を意味するわけではないと考えた方が良いと思う。すなわち、自治体への批判も含み（自治体は生徒の「コミットメント」を受容する寛容さが必要である）、共に地域をつくるという姿勢の「生活創造」であると考えたい³。

「研究の意図」に引きつけるなら、「はじめに」（3 頁）で説明した中学生の「トライアングル型」の生活環境に、新しい生活環境（「創造する地域社会」）を加えることを目指すことを考えたいということでもある。中学生が「町コミットメント」を拡げ深めることができる学校や家族以外の「第3の場」、町の（行事への「お客」としての参加やボランティアに止まらない）「コミュニティ・ワーク」に関わることができる環境を創出することが追求される必要がある。この環境においては、中学生も下川町の「若き担い手」として遇する。このことで、消費社会の格差構造から生まれる否定的な「町アイデンティティ」（「消費文化へのアクセスが悪い」）に対抗できる豊かさをもった「町アイデンティティ」を形成可能にできないだろうか。そのことで、進路志向や「将来イメージ」への「参照点」の多様化を可能にする。

大所高所的な言い方で言えば、これまで日本社会は、中学生を（高校生でさえも）、未成年であるとして「お子様扱い」しつつ、現実的には消費社会が「お客様」として（振る舞うように）陶冶してきた。この限界がきたと考えるべきであろう。

ところで、「18 歳成人法」が施行されるのは 2022 年である。少なくとも高校の教育目標は、「大人にすること」に変わらざるを得ない。これは、日本国全体の問題ではある。しかし、地方ではどうするのか。同じ中等教育とは言っても、中学校までは別個に考えるのか。この問題の例題の幾つかが解かれなければならない。

このように考えたとしても、直ぐに U ターン希望者が増えるとは限らないだろう。しかし、自分が関わる手応えのある（あった）場所、肩入れできる（できた）場所で生きていたという記憶は、中学生の確かな財産となると考える。町は、町を離れてからも、自分のいる場所や未来を考える参照点となる。町は、言わば、人生のどこにいても、自分がどこにいるかを見つけられる「灯台」たろうとするのである。

最後になったが、今後の課題は多すぎて、書き切れない。己の微力をかみしめている。しかしながら、事例研究を積み上げることしかできないと臍を固めて、これからも続けて行きたいと考えている。

われたという記事が載っていた。議会改革と関係しながら進められている。

² 北海道は、小中学校（学級新聞）や高等学校（学校新聞）において、聞づくりが非常に盛んな都道府県である。蓄積は多い。

³ ボランティアへの動員を越えた「未来の町の担い手」として遇する必要がある。

謝辞

私（浅川）が下川町を始めて訪れたのは、2017年の7月になります。私が所属する北海道大学大学院教育学研究院が隣接する西興部村と連携協定を結び、様々な調査研究や教育支援（「夏の学習会」）を続けていた関係で、下川町を通過することは何度かありましたが、バスから降りたのは、この時が最初になります。

2017年度は、役場の森林総合産業推進課バイオマス産業戦略室、下川町教育委員会を、また森林環境教育についてはNPO法人「森の生活」、さらに下川町森林組合の機関調査を行わせていただきました。

続く2018年度は、下川町立下川中学校と「下川ジャンプ少年団」、そして町議会議員から話を聞くことができました。下川中学校において行わせていただいた生徒調査の結果が、この報告書です。

ところで、この間私が進めてきた調査研究では、「人口減少時代」や「自治体消滅」と言われるほどの日本社会の大きな変化のもとで、課題先進地である北海道における地方の教育問題を、若者（中学生・高校生だけではなく、様々な産業の若手労働者も含めて）を対象として考えてきました。若者（彼ら／彼女ら）の地域との関係（コミットメント）や地域の担い手の社会的・文化的背景、その困難と潜在的な可能性について考察することが課題です。

下川町は、森林関連産業の蓄積が進み、また森林環境教育も熱心に進められており、ここまで研究していた他の地域の比較も含めて、学ぶことが多くありました。教えていただくことができたことのうち、まだお返しできるものは少ないですが、中学生調査を報告書という形でまとめることができ、嬉しく思っています。

この報告書が、下川中学校の実践や、下川町の教育に少しでも参考になることがありましたら、それに過ぎる幸福はありません。私だけでなく、2018年9月の社会調査に参加した北海道大学教育学部の3年生一同もそのように思っております。

最後になりましたが、貴重な勉強の機会をくださいました下川中学校の貞弘真悟校長とご紹介くださった下川町教育委員会堀北忠克教育課長を始めとする教育委員会の皆様に、調査にご協力くださった中学3年生の皆様（「会食集会」にも招いていただきました）に、心から感謝いたします。

拙い報告書ですが、これからも精進しより良いものとする事で、下川町を始めとした小規模自治体と、北海道の中等教育の発展に貢献したいと考えています。

北海道大学大学院教育学研究院

教授

浅川 和幸

(資料) 平成30年度下川中学校3年生の生活・将来志向・地域アイデンティティに関するアンケート調査

責任者：北海道大学教育学研究院
教育基礎論分野
教授 浅川和幸

○本調査の趣旨とプライバシーの配慮について

私たちがこの調査を行う目的は、中学生が、将来やふるさとについて考えていることを理解することにあります。これまで、「地方の若者は（中学生も）都市に出たがっている」と多くの人に思われてきました。地方は不便であると頭から信じていることや、地方で暮らしていくことの魅力は外から見るだけではなかなか気付かないことが背景にあります。私たちは、この調査を通して、大変さも含めて、その魅力をみなさんから教えていただきたいと思っています。

ただ、こんなことを書くと、「地域に残りたい」と書かなくてはいけないかなと思うかもしれませんが、そんなことはありません。「都会に出ていろんなものを見てみたい」という人がいれば、そう書いてください。私たちは、地方には都会に出たい人ばかりではなくて、地域に残りたい生徒もいるということを踏まえて、その双方にとって意味のあるようなこれからの学校のありかたを考えたいと思っています。そのため、いまのありのままの気持ちを書いていただくと、ありがたいです。

こうした目的に理解をいただいて、調査に協力していただけたら助かります。当然、プライバシーの保護には十分配慮し、回答していただいた内容につきましても、厳重に管理いたします。また、答えたくない内容や分からないものに関しては、空欄のままで結構です。書ける範囲で答えていただければと思います。

1. 基本的なことについて

Q 1 いずれかに○を付けてください。 男 ・ 女

Q 2 保護者の職業を教えてください。（ ）
※公務員、会社員、自営業という書き方でも結構です。

2. 地域への気持ちについて

Q 3 これまで森林環境教育をうけてきたと思いますが、感想を教えてください。
※森林環境教育：植樹祭、炭焼き体験(炭焼き、かま開け、会食)

また、自分の進路を考える上で参考になったことがあれば教えてください。

Q 4 下川町のことをどう思っているのか、ひとつだけ○を付けてください。(好き・嫌い・半々)

その選択肢を選んだ理由を教えてください。

Q 5 下川町の、良いところと良くないところを教えてください。

良いところ

良くないところ

Q 6 下川町にいるからこそできること、できないことを教えてください。

できること

できないこと

Q 7 下川町の主な産業は「林業・木材加工業」と「農業」ですが、それぞれの仕事についての印象を教えてください。

林業・木材加工業について

農業について

Q 8 将来的に下川町を出ていくつもりですか。下の中から一番近いものに○を付けてください。

(「ずっと下川町に残る」・「いったん下川町は出るが戻ってくる」・「下川町から出て戻ってこない」)

その選択肢を選んだ理由を教えてください。

Q 9 住むならこのまちが良い、遊ぶならこのまちが良いというものがあれば教えてください。

住むなら () 遊ぶなら ()

Q 10 あなたが地元(身近に感じる場所)だと思う範囲はどこですか。下の中から一番近いものに○を付けてください。

(下川町よりも狭い範囲、下川町、下川町の周辺も含めたよりも広い範囲)

↓ ↓
「下川町よりも狭い範囲」と「下川町よりも広い範囲」を選んだ場合は、どの範囲かを教えてください。

3. 将来志向について

Q 11 中学校卒業後の希望進路について、○を付けてください。

町内の高校進学 名寄市の高校進学 それ以外の地域の高校進学 就職

Q 12 高校卒業後の進路希望を教えてください(具体的に)。

進学の場合 ()、就職の場合 ()

Q 13 進路に関して、保護者から言われていることがあれば教えてください。

Q 14 将来なりたい職業があれば教えてください。 ()

その理由を教えてください。

Q 15 将来どのような生活がしたいか教えてください。

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号 16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の
社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究報告書 3

下川中学校調査報告書 中学生の地域理解の構造と地域アイデンティティ

研究代表者 浅川和幸

連絡先 〒060-0811 札幌北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院
Tel・fax 011-706-2604

平成 31 年 3 月 18 日発行
印刷 北海道印刷企画株式会社
Tel 011-562-0075